

一五三 大藏省簿冊書拔

琉球処置ノ件

(表紙)  
「大藏省簿冊書拔」

琉球国版図之儀ニ付正院江建言之案

慶長年間島津義久琉球ヲ征シ、中山王尚寧ヲ擒獲シ、  
 皇国ニ服從セシメ候而ヨリ、以来同国之儀は薩摩之付庸  
 ト看做シ、諸事同藩ニ致委任、延テ至今日候、因テ其版  
 図離合之概略ヲ查考候処、中興之始祖舜天源為朝之遺裔  
 ト云説ハ姑ク措キ、服從以来親礼ヲ修幣帛ヲ獻シ、恭順  
 之誠ヲ表シ、歴世不解而已ナラス、言語風俗官制地名之  
 相類似スル、総テ我光被中ニ不洩一証ニ有之、殊其形勢  
 ヲ視察致候得は、我薩之南岬ト相距僅數十里、豆之無人  
 八丈・蝦之薩加連ニ比スレハ、内地ニ接近スル大逕庭ナ  
 シ、故ニ彼国ハ我残山之南海中ニ起伏スル者ニシテ、一  
 方之要衝 皇国之翰屏、臂ハ手足ノ頭目ニ於ルカ如ク連  
 為ノ職ヲ尽シ、捍護之用ニ可供義喋々謁論ヲ不待候、尤

彼從前支那之正朔<sup>ヲ</sup>奉シ封冊ヲ受候由相聞、我ヨリモ亦  
 其携戴之罪ヲ匡正セス、上下相蒙曖昧ヲ以數百年打過、  
 何トモ不都合之至ニ候得共、君臣之大体上ヨリ論候得は、  
 仮令我ヨリ涵容スト雖、彼ニ於テハ人臣之節ヲ守、聊悖  
 戻之行不可有義勿論ニ候、況百度維新之今日ニ至テハ到  
 底御打捨被置候節ニも無之ニ付、從前曖昧之陋轍ヲ一掃  
 シ、改テ 皇国之規模御擴張之御措置有之度、去迎威力  
 ヲ挾侵奪之所為ニ出候而は不可然、依テ彼首長ヲ近ク  
 闕下ニ招致シ、其不臣之罪ヲ譴責シ、且前文慶長大捷以  
 後之情況、順逆之大義土地之形勢、其他伝紀典章待遇交  
 涉之上ニ表見スル証跡ヲ拳ケ詳細ニ説明シ、彼ヲ使テ悔  
 過謝罪茅土之不可、私有ヲ了得セシメ、然後速ニ其版籍  
 ヲ収メ、明ニ我所轄ニ歸シ、国郡制置・租稅調買等悉皆  
 内地一軌之制度ニ御引直相成、一親内仁 皇化洽浹ニ至  
 候義所仰望候条、尚篤御廟議被為尺度此段具陳仕候、已  
 上、

壬申五月

大藏大輔井上 馨

正院  
御中

今度琉球使人摂政・三司官三名其地随從之者貳拾七八人  
来朝ニ付、接待向等諸事外務省江御委任被 仰付候、就  
而は右設備入費別紙之通外務省より申立候間及御打合候、  
早々見込可被申出候也、

壬申八月廿日

史官

大藏省  
御中

追テ来ル廿四五日比着之趣ニ付、早々御回答有之度  
候也、

今度琉球人上京ニ付而は滞留中旅館並朝夕食饌或ハ眠浴  
具之末ニ至迄、惣而不見苦様接勸振設備可有之、就而は  
右入費凡目当金老万円ニ而差定、差向金五千円大藏省よ  
り相渡候様御達有之度候、此段相伺候、以上、

八月廿日

外務省

正院  
御中

今度琉球人摂政・三司官其他来朝ニ付、接待向等外務省  
へ御委任被 仰付、右設備入費別紙を以同省より申立候  
ニ付、御打合之趣致承知、然ル処琉球国版図之一事ニ付  
而は、曾テ縷々具陳仕候次第も有之、這回来朝之使人何  
等之事情可有之ハ勿論諒知難致候得共、其使人之接遇ニ  
於ル素より欧米各国之特派使節トハ其時実大イニ相違致  
候義ニ付、自然旧套之礼節ニ同伏シ、殊域外賓ヲ以被為  
待候而は把持之国権ニ関シ、不容易御不都合ヲ醸シ可申  
込、加之方一彼ニ於テ不臣抗衡之念慮等有之時は、却テ  
彼ニ辞柄ヲ授ケ候道理ニ相当、到底不可然ト存候ニ付、  
此般接対之礼は大略版図内ト看做シ、旧習ヲ改革致漸各  
地方官朝集一般之御処置ニ帰候様仕度、右は御体裁ニも  
致関係候義ニ付、厚御詮議被為在度、先以此段不取敢申  
進候也、

壬申八月廿二日

井上大蔵大輔

史官

御中

琉球人上京ニ付接待御用金渡方之義ニ付、外務省より申立有之、其節及打合置候処、其後右接対振ニ付建言之趣有之、右建言之次第は御評議も有之候得共、接対御用金は渡方無之而は、最早上京日限も切迫ニ及ヒ差支ニ相成候間、早々渡方可有之候也、

壬申八月廿四日

正院

御蔵省

琉球人接待振ニ付当省建言之次第は御評議被為在候得共、日限切迫相成候ニ付、御用金は早々外務省へ相渡候様御達之趣致承知候、然ル処右御評議之次第ニ依り而は、接対振之都合も有之候筈ニ付、可成は右御評議御判定之上、御用金渡方之御沙汰御座候様仕度、此段御答申進候、已上、

壬申八月廿五日

井上大輔

正院

御中

琉球人接対入費之義ニ付、去月中より毎度御懸合ニ及候末、本月五日付を以史官より之別紙相添老万金之内先五千金丈差向、受取度段申進、尚又本月十日春日寿格を以催促申進候処、正院より確然之御沙汰無之ニ付、渡方難相成趣被申聞、則御省より今一応正院へ御伺相成確定候様御取計有之度旨、同人より御相談及置候処、今日ニ至候迄何と御報も無之、当省ニ於テハ日々之仕払差支、甚困却被在候、就而は至急御渡之運ニ相成候様致度、此段尚又御催促申進候也、

壬申九月十三日

外務省

大蔵省

御中

琉球人接対之義ニ付当省より縷々建言仕置候処、此際御

都合有之段御高論之赴領承仕候、就而は右御取扱振之義は追テ御紙面ヲ以判然御沙汰有之候様致度、尤接待入費金は兼テ御達之通早々外務省へ渡方可取計、尤時日御達之内被下物代三千円は則前断入費金ニ相当候故、引去相渡候積有之候、此段申進候也、

壬申九月十四日

大蔵省

正院

御中

琉球人接待入費之義、縷々御督促之趣致承知候、右は正院へ建言之次第も有之御沙汰相待居候故迂延至、今日敢テ怠慢致候義ニハ無之候、然ル処既ニ正院より御沙汰之品も有之ニ付、入費金御渡方可取計候条、受取人御差出可有之候、此段及御答候也、

壬申九月

大蔵省

外務省

御中

追テ琉球人被下物代三千円ハ正院より御達之末、既

ニ御渡致候間、最前御申越有之候五千円、国主并使臣へ被下品代価と見做、右丈引去候而御渡方取計積ニ有之候、此段併テ申入候也、

琉球藩を府県と併セ相称候節順席之義伺

先般琉球藩を被置候ニ付而は、右藩を府県と併セ相称し候節、順次位置如何相心得可然哉、此段相伺申候也、

但當省おゐて刊行いたし候改置府県概表江琉球藩記載方順次之義は当三月中相伺候処、西海道之末へ相加へ可申旨御指令相濟候得共、府県ト併唱致候節位置難相決候ニ付、本文之通尚相伺候義ニ有之候也、

明治六年五月廿七日 大蔵省事務総裁  
参議大隈重信

太政大臣三条実美殿

伺之趣府藩県之順次ニ候事、

明治六年六月八日

總裁 (大隈)

加川勝美 (加)

月日

大藏省事務總裁  
大隈重信

太政大臣三条実美殿

丞〇

六月八日

加川勝美 (加)

今般琉球藩東京在番之者着京ニ付而は、以後之御指置振  
正院へ御伺可相成筈を以、既ニ外務省へ御打合セ相成居  
候義ニは有之候得共、已後制度ニ相関候御布告等御達可  
相成義ニ可有之欵、且差向在番之者接対振も内地府県同  
様御取扱相成可然候得共、一応正院へ左之通御申立相成  
可然被存候間、御伺案共相添此段相伺申候、

今般琉球藩之義当省ニ於而己後之御指置は追々取調可  
相伺候得共、差向諸法令規則等制度ニ相関候御布達并  
総テ之接対振も内地府県同様取扱可然欵、此段相伺申  
候、自然伺之通相成候義ニ有之候ハ、同藩へも前以  
御達置相成、且内地一般へも為心得御達有之度、此段  
併テ申進候、以上、

丞〇

先般琉球藩へ出張候根本茂樹其他官員持帰候諸件調書、  
追々取調候処、差向改正不被 仰出候而は不相成廉々も  
有之候様相見込候間、一応左之通正院へ御伺相成可然と  
存候得共、先般同藩へ外務省よりも出張有之候義ニ付、  
前以一応同省へも御照管之上正院へ御申出之方可然、依  
テ御懸合振相伺申候、

外務省へ之御懸合振

先般琉球藩江当省官員出張諸件取調候処、差向改正不致  
候而は今日之体裁ニ相對シ不都合之廉々も有之候様相考  
候ニ付、左之通正院へ一応相伺、細目之義は追々同藩在  
番之者へ相達候様可致被存候、先般御出張も有之候義ニ

付一応及御照管候、不日御回答有之度、此段及御懸合候、

已上、

月日

渡辺大蔵大丞

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

正院へ御同按

琉球藩諸件取調トシテ先般出張致候当省官員持帰候書類  
追々取調候処、同藩施政之順席職制を始、総テ古例旧格  
を以其低因襲候義と相見へ、今日之御政体ニ相對シ差向  
御改正不相成候而は、更ニ藩屏ニ被列候御趣意も貫徹致  
間敷、自然御制御之上ニ就御差支之義も可相生欵ニ候得  
共、内地地方より相異候義ニ付、百事一時ニ改正候様之  
被仰出有之候共、実地難被行義ニ可有之、乍去刑法・貨  
幣・年号・式日・祭日施政之順席等大綱ニ相関候義は、  
速ニ改正不被仰出候而は難相成欵、且一切之費用之如キ  
も従前藩王私費と公庁と歳入之内より聊區別相立候而已

ニ付、将来錯雜之憂無之様更ニ藩王録高(録)を定、出納判然

為致、且職制并事務章程之如キも藩王私用ト公用ト相混、

更ニ區別も不相立候様之類は、判然取分候様被仰出候方

可然と存候間、出張官員持帰候書類相添一応相伺申候、

可然御沙汰有之度此段申進候、已上、

月日

尚以本文之趣外務省へも打合セ候上相同候義ニ有之  
候、御沙汰之上細目之義は追々取調尚相伺可申候、

此段も添テ申進候、已上、

此一条伊地知貞馨論弁之上見合相成候事、

冊子原寸 縦二六種 横一九・六種 一九枚

一五〇 琉球使者上京ニ付政府ヨリノ指令其他書類

(表紙)「琉球使臣来朝以来之概略」

今度琉球人上京之筈ニ付而は、旅宿取設可有之、尤同国  
人は平座致し候趣ニ付、其心得を以取計可有之候也、

壬申八月十三日

正院

外務省

史官

御中

外務省

今般琉球使人摂政・三司官三名其他随従之者二十七人  
来 朝候ニ付、於其省万事可取扱事、

今般琉球使官上京ニ付愛宕下毛利高謙居邸借受、右旅館  
取設置候間、此段御届申候也、

壬申八月廿四日

但鹿兒島県付添官員其省之官員ニ申付、諸事取扱可為  
致事、

明治五年壬申九月十四日伊江王子(尚健)・宜野灣親方(尚有恒)・喜屋武(尚維新)  
親雲上参 朝拝 謁ノ節、琉球王ヨリノ呈書左ノ通り、

壬申八月十九日

太政官

書簡之写

恭惟

今般琉球人上京ニ付而は、滞留中旅館并ニ朝夕食饌或は  
眠浴具之末ニ至ル迄、惣而不見苦様接対振設備可有之筈、  
就而は右入費凡目当金壹万円ト差定、差向金五千元大蔵  
省より相渡候様御達し有之度候、此段相伺候也、

壬申八月廿日

皇上登極以来、乾綱始張庶政一新黎庶  
皇恩ニ浴シ、歛欣鼓舞セサルナシ、尚泰南陲ニ在テ伏シ  
テ盛事ヲ聞キ、懼怍ノ至リニ勝ヘズ、今正使尚健・副  
(使也) 向有恒・賛議官向維新ヲ遣シ、謹テ  
朝賀ノ礼ヲ修メ、且方物ヲ貢ス、伏シテ

奏聞ヲ請フ、

明治五年壬申七月十九日

琉球尚泰謹奏

勅語

汝等入朝シ能ク汝ノ主ノ意ヲ奉シテ失フナシ、自ラ方物ヲ献ス、深ク嘉納ス、

書簡之写

恭惟

封冊写

皇后位ヲ中宮ニ正シ、德至尊ニ配シ、天下ノ母儀トナリ、四海日ニ文明ノ域ニ進ミ、黎庶生ヲ業ミ業ニ安ス、尚泰海陬ニ在テ伏シテ 盛事ヲ聞キ、懼怍ノ至リニ勝ヘス、今正使尚健・副使向有恒・贊議官向維新ヲ遣シ、謹ンテ

慶賀ノ礼ヲ修メ且方物ヲ貢ス、伏シテ

奏聞ヲ請フ、

明治五年壬申七月十九日琉球尚泰謹奏

勅語

琉球ノ薩摩ニ付庸タル年久シ、今維新ノ際ニ会シ、上表且方物ヲ献ス、忠誠無二、朕之ヲ嘉納ス、

御受之写

臣健等謹白ス、臣寡君ノ命ヲ奉シ、

**国印** 朕上 天ノ景命ニ膺リ、万世一系ノ帝祚ヲ紹キ、奄ニ四海ヲ有チ八荒ニ君臨ス、今琉球近ク南服ニ在リ、氣類相同ク、言文殊ナル無ク、世々薩摩ノ付庸タリ、而シテ爾尚泰能ク勤誠ヲ致ス、宜ク頭爵ヲ予フヘシ、封シテ琉球藩王ト為シ、叙シテ華族ニ列ス、咨爾尚泰其藩屏ノ任ヲ重シ、衆庶ノ上ニ立チ、切ニ朕カ意ヲ体シテ永ク皇室ニ輔タレ、欽メ哉、

明治五年壬申九月十四日

御璽



天朝ニ入貢ス、今寡君ヲ封シテ藩王トナシ、且華族ニ班  
セシム、

仕哉、内々御差図ヲ仰キ奉リ候、以上、  
壬申九月廿三日 正使尚健

聖恩重渥恐惑ノ至リニ勝ヘス、臣健等代テ 詔命ノ辱ヲ  
拝ス、

右指令  
伊地知貞馨ニ託シ謝表可差出候事、  
壬申九月廿八日 外務省  
副使尙有恒  
賛議官向維新

明治五年壬申九月十四日

正使尚健

伊地知貞馨ニ託シ謝表可差出候事、

副使尙有恒

壬申九月廿八日

外務省

賛議官向維新

今般使命ヲ奉シ入朝ノ処、寡君ヲ封シテ藩王トシ、華  
族ニ列セシム、殊ニ

皇帝陛下

毎歳藩王ヨリ新正 天長節鹿兒島県庁ニ付テ慶賀ノ礼ヲ  
修ム、然レトモ書翰而已ニテ誠敬ヲ表スル無シ、因茲以  
来右兩度ノ慶賀土産ノ輕品別紙ノ通り献シ奉リ、微誠ヲ  
伸シコトヲ希フ、是藩王ノ本意ナリ、臣等命ヲ奉シ伏テ  
懇願ス、宜ク御執奏奉仰候、以上、

皇后ヨリ藩王及夫人へ種々ノ重品ヲ下賜リ、導クモ臣等

懇願ス、宜ク御執奏奉仰候、以上、

天顔ヲ拝シ

正使尚健

皇后

壬申九月廿三日

副使尙有恒

皇太后へモ内謁仕、陪從ノ者ニ至リ皆寵恵ヲ蒙リ、天恩

賛議官向維新

至渥奉謝ノ詞ヲ知ラス、他日藩王ヨリ御礼ノ儀何様可

右指令

伊地知貞馨ニ托シ献上可致事、

壬申九月廿八日

外務省

別紙覚書

紺地島紬上布

拾端

紺島紬上布

拾端

島紬

拾端

太平布

拾疋

練芭蕉布

拾端

先年其藩於而各国と取組候条約並ニ今後交際之事務、外

務省ニ而管轄候事、

壬申九月廿八日

太政官

外務省

別紙之通琉球藩へ達相成候事、

壬申九月廿八日

太政官

外務省六等出仕伊地知貞馨

琉球藩在勤申付候事、

壬申九月廿七日

外務省

外務省少録堀江弘貞

琉球藩在勤申付候事、

壬申九月廿七日

外務省

外務省等外二等小菅直達

琉球藩在勤申付候事、

壬申九月廿七日

外務省

皇国現今履行スル処ノ各国交際ニ関セシ書類別紙目錄ノ  
通リ差進候也、

明治五年壬申九月二十一日 外務卿副島種臣

琉球藩王

閣下

目錄

- 一 亞墨利加合衆国条約并稅則蘭文訳
- 一 尼達蘭条約并稅則蘭文訳
- 一 俄羅斯条約并稅則蘭文訳
- 一 不列顛条約并稅則蘭文訳
- 一 仏蘭西条約并稅則蘭文訳
- 一 葡萄牙条約并稅則蘭文訳
- 一 独乙北部聯邦条約并稅則
- 一 瑞西合衆国条約并稅則蘭文訳
- 一 白耳義条約并稅則蘭文訳
- 一 伊太利条約并稅則仏文訳
- 一 丁抹条約并稅則蘭文訳
- 一 西班牙条約并稅則
- 一 瑞典那耳回条約并稅則
- 一 澳地利兼洪噶利条約并稅則并横文
- 一 布哇条約英文訳
- 一 新定約書并輸出入品運上目錄并規則
- 一 清国修好条規和文漢文
- 一 同 通商章程
- 一 日本国海関稅則
- 一 清国海関稅則
- 一 伝信機約定書
- 一 御歷代正数
- 一 小笠原島開拓關係書
- 一 困難船救助心得并不開港場取締
- 一 鴉片煙禁制布告書
- 一 小兒壳渡禁制布告書
- 一 方今東留各国公使領事名号
- 一 官途必携
- 一 官等表
- 一 官員全書
- 一 外交須知
- 一 海軍旗章
- 一 船灯規則

一 諸標便覽表并横文

一 府県概表

一 海外国勢便覽

一 実測録

一 実測日本地図

一 日本地図諸類 日本輿地全圖・四神全圖  
富士見十三州輿地全圖・北海道国郡圖

一 清国及近傍諸州圖

自今一等官ノ取扱タルヘキ旨被  
仰付候事、

壬申九月廿八日

太政官

琉球藩王尚泰

東京府下飯田町檜木坂ニ於テ邸宅一圀下賜候事、

壬申九月廿九日

太政官

琉球藩王尚泰

壬申十月七日

正院 御中

副島外務卿

琉球藩へ本省官員伊地知貞鑿在勤為致候ニ付而は、死刑之儀伺之上処置ニ可及様談示為致候ニ付、新律綱領差贈申度候間、本省へ相廻シ候様司法省へ御下命有之度、此段申進候也、

壬申十月九日

琉球藩御処分相成候ニ付而へ、同藩負債式拾万円之金高は今般政府之御引請ニ可相成筋之処、来朝使臣共ヨリ同藩限ニ而消却致度志願ニ寄り、右高東京ニテ借替致候得は利足も余程之減省ニ可相成、且右借財之引当ハ年々琉球藩江積出之砂糖樽ニシテ一万五六千挺モ有之候得共、大蔵省ニテ奥印之引請無之候而ハ何分出金之者無之、仍而同省へ打合候処、実存無之趣ニ付、右奥印之儀同省へ御下命有之度、尤伊地知貞鑿来ル十三日出発之積ニ付、

至急御沙汰有之度候様致度、此段相伺候也、

壬申十月九日

外務卿副島種臣

正院

御中

伺之通大藏省へ御下命相成候事、

壬申十月十日

琉球藩使員等昨日第十時愛宕下旅館引払、品川ヨリ鹿兒

島県持船へ乗込出帆仕、此段御届申候也、

十月三日

外務省

正院

御中

鹿兒島滞在中

琉球藩

其藩ニ於テ是迄鹿兒島県へ在勤申付置候諸官員、自今  
為引払可申、尤将来藩用ノ都合可有之ニ付、在来ノ琉

館取縮ノ上蔵屋敷等ノ名目ニ改メ、日用ノ物品相弁ス

ル為メ下官兩三名為相詰候儀へ、其藩ノ適宜ニ取計不

苦候、此段申入候也、

壬申十一月十日

外務省

十一月二日

鹿兒島県

外務省六等出仕

伊地知貞馨

今般琉球藩へ別紙写之通相達候間、同藩御打合不都合  
無之様御取計可被成、此段申入候也、

同廿一日

琉球藩

御中

戸籍寮七等出仕

根本茂樹

外務省六等出仕

伊地知貞馨

是迄年々鹿兒島県へ為租税相納候米并砂糖、同県ヨリ其  
藩へ在勤ノ者取扱来候処被相廃、以来ハ其藩役々ニテ取  
立、直ニ大藏省租税寮へ上納可被致、此段申入候也、

同廿二日

鹿兒島県  
御中  
外務省六等出仕  
伊地知貞馨

琉球藩へ別紙写之通相達候間為御心得此段申入候也、

琉球藩  
外務省

於当<sup>(唐渡)</sup>年西洋各国<sup>(唐渡)</sup>相成候約条書都而可<sup>(唐渡)</sup>出候也、

明治<sup>(唐渡)</sup>年六月六日

四月十四日、幸地親雲上貞馨旅館へ来り、米仏蘭三国ト取結タル条約書写差出、左ノ通願出タリ、

先年於当藩仏米蘭三国ト取結候条約原書可差出旨御達相成、最速可差上筈ニ候得共、当所之儀海中ノ小藩何篇ノ自由ニ有之、西洋各国ト致交易候品柄逆モ全無御座、取組仕候条約モ屢致哀訴、乍漸致納得候訳合ニテ、当時藩

内極々疲弊御座候モ根源十余年之間各国之船々致来港、

接待向旁過分之出費相掛候上之事ニ御座候、此後致来船談判等仕候節、条約之本書相掛居不申候而は証拠仕候者無之、別而無心許御座候、文面事実都テ先日差出候写書通御座候間、本書之分は当藩へ致格護置候様仕度、何卒内情御汲取御聞濟被下候様奉願候、此段御願申上候也、

明治六年四月十四日  
浦添親方印  
川平親方印  
宜野灣親方印  
伊江王子印

在琉球  
外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

「<sup>(采)</sup>条約ニ付其藩ニテ談判致候節ハ、必シモ其本書ヲ要セス、若条約上ニ異論相生シ候時ハ其主任タル本省ニ本書無之テハ都合ニ候条、総テ取揃可差出事、

明治六年九月十八日  
外務省印

琉球藩

外務省

海中之孤島境界分明ニ無之候テハ、外国掠奪之憂モ難計候間、今般其藩へ御国内旗大中七流御渡相成候条、日出ヨリ日没マテ久米・宮古・石垣・入表・与那国五島之庁へ可揭示、尤這回は新調被相渡候得候、今後破裁之節は藩費ヲ以可致修繕、此旨相達候事、

当管内久米島ヲ始外四島へ可揭示御国旗大屯流中六流、御書付添御渡、正ニ落手御達之趣承知仕候也、

明治六年四月十四日

琉球藩

在琉球

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

琉球藩

外務省

当年より東京賜邸江親方屯人ツ、輪番可相詰候也、

明治六年三月十二日

当年ヨリ東京賜邸江親方輪番ニ在勤致候様御達之趣承知仕候、御請迄如此候也、

明治六年四月十二日

琉球藩

在琉球

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

尚以新律綱領二部御書付添御渡、正ニ落手、御達之趣承知仕候也、

東京為在勤当年上京

与那原親方

右之通被申付候間、此段御届申候也、

明治六年四月十二日

琉球藩

在琉球

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

謹白、尚泰嚮ニ正使尚健・副使向有恒・賛議官向維新

ヲ遣シ入貢ス、不凶モ藩王華族並ニ一等官ノ頭爵ヲ賜、

天恩至渥恐感ノ至リニ勝ヘス、爰ニ表疏ヲ具シ、謹ンテ謝

恩ノ礼ヲ修ム、伏シテ奏聞ヲ請フ、

明治六年三月二十八日

琉球藩王尚泰謹奏

謹白、尚泰嚮ニ正使尚健・副使向有恒・賛議官向維新ヲ遣シ入貢ス、不凶モ数種ノ品大金及ヒ東京府下へ邸宅等下賜リ、寡妾へモ珍品ヲ下サレ、且尚健等モ天顏ヲ拝シ、陪從ノ者ニ至リ皆

寵惠ヲ蒙ルノヨシ、委曲奉承シ、

天恩至渥恐感ノ至リニ勝ヘス、爰ニ表疏ヲ具シ、謹ンテ

謝

恩ノ礼ヲ修ム、伏シテ

奏聞ヲ請フ、

明治六年三月二十八日

琉球藩王尚泰謹奏

謹白、尚泰嚮ニ正使尚健・副使向有恒・賛議官向維新ヲ遣シ、

皇后へ献貢ス、辱クモ尚泰及ヒ寡妾へ数種ノ重品ヲ下賜リ、且尚健等モ

聖顏ヲ拝シ、

寵惠ヲ蒙ルノヨシ、委曲奉承シ、恐縮ノ至リニ勝ヘス、

爰ニ表疏ヲ具シ、謹ンテ謝

恩ノ礼ヲ修ム、伏シテ

奏聞ヲ請フ、

明治六年三月二十八日

琉球藩王尚泰謹奏

琉球藩王より

聖上并ニ

皇后宮江上書ニ封奏上致度旨ヲ以、同藩在勤外務省六等出仕伊地知貞馨ヨリ差越候間、即写相添差進候、御奏聞有之度候也、



明治六年四月廿五日

外務少輔上野景範

正院  
御中

覚

一 毎歲藩王より

新正

天長節慶賀之書簡献上物之儀、貴様之託シテ可差上旨  
去年伺書ニ御張紙ヲ以被仰渡置候間、在番親方使者ヲ  
以右之振合ニテ差上可然哉、且東京表官員衆へ御付届  
向之儀何様仕可然哉之事、

一 接政・三司官より右両御祝儀并官員衆御付届向之儀何  
様仕可然哉之事、

一 当地御在勤官員衆之儀、爾後何々何等官ヨリ被御詰候  
哉、右御待向并口上書等何様之振合ニ相心得可然哉之  
事、

一 接政・三司官藩政之惣裁一人勤、且三司官之儀多端之

政務職分ヲ以相勤申事ニテ、代合之節ニ奉伺候テヨリ  
申付候テハ、遠海之所柄間延相成、惣裁之役務長々相  
欠、三司官ニモ残兩人病氣等之節差支可申候間、是迄  
之振合を以国王ヨリ申付相勤サセ、御届申上候方々被  
仰付度事、

右条々何分御差図被成下度奉存候事、

明治六年三月十八日

琉球藩

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

右指令

初ヶ条

呈書献上物は本文之通可執計、官員衆へ付届向は無用ニ  
候、

二ヶ条

書付ヲ以外務省へ相付御祝儀可申上為御心得、別紙案文  
渡置候、別ニ付届ニは不及候、

三ヶ条

鹿児島県庁より之出役は此節限りニテ引取、外務省より  
兩三人位ツ、輪番相詰可申内、長官江之対遇是迄在番奉  
行同様、余は見聞役筆者之振合ニテ宜敷候、

四ヶ条

差向之処是迄之通可被相心得、追テ何分之御差図可有之  
候、

明治六年三月廿三日

在琉球  
外務省六等出仕  
伊地知貞馨

一在番親方其外何欵付使者致上京候得は、官所江之御届

何様仕可然哉之事、

付、使者被差上候段ハ書翰ニモ相見得不申候得は、

摂政・三司官書状ヲ以外務省宛ニテ御引合申上候テ

何様可有之哉、

一右使者往反鹿児島県致着候節、県庁へ御届向是又何様

相心得可置哉之事、

右相伺候也、

明治六年四月二日

外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

(奉)  
「在勤親方出京之節ハ外務省へ可届出、摂政・三司官書状ヲ以  
引合之儀は何之通、非常之儀到来之節ハ別段、其余は使者被  
差立ニ不及候、鹿児島着発之節ハ某日着、某日可致出発書面  
ヲ以県庁へ掛合可被申候事、

明治六年四月四日

外務省六等出仕  
伊地知貞馨

琉球藩  
摂政・三司官

御中

在琉球  
外務省六等出仕  
伊地知貞馨印

形勢一変開明之今日ニ臨候テハ各活目有之、万国之政体

情実迄モ被致搜索、百事煩雜ヲ去リ、易簡ニ付

朝旨遵奉、闔藩之庶民ヲ教育被致候様有之度者ニ候也、

明治六年四月十四日

形勢一變開明之今日ニ臨候テハ、各活目有之、百事煩雜ヲ去リ、易簡ニ付

朝旨遵奉、闔藩之庶民ヲ致教育候様御示諭之趣致承知御尤ニ候、深相心得

朝旨奉裁、永年ニ至リ違犯仕間敷、藩王ヘモ相達、此段御請申候也、

明治六年四月十八日

浦添親方印

川平親方印

宜野灣親方印

伊江王子印

在琉球  
外務省六等出仕  
伊地知貞馨殿

式部寮

御中

外務少輔上野景範

別紙之通琉球藩より差出候ニ付及御届候也、

明治六年六月十二日

六年七月十七日在勤与那原親方ヘ達ス

琉球藩

一藩王より之献上物ハ追而御沙汰有之候迄、新年及天朝節右兩度と可相心得候事、

一右勤親方其外より本省琉球掛官員ヘ贈答之儀、互ニ手数ヲ掛ケ無益之事候条、以来ハ屹度不相成候事、右可相心得者也、

明治六年七月十七日

外務卿代理

外務少輔上野景範

明治六年八月七日

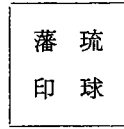
外務卿副島種臣殿

太政大臣三条実美

先般琉球藩印同藩ニ於て彫刻之分印顆を以届出有之候所、

右は諸省使府県同様正院より可下渡筋ニ付、銅印一顆下渡候条、同藩へ可相達候也、

明治六年八月七日



琉球藩へ藩印下渡候達書

今般其藩々印下ケ渡候条、以後別紙条例ニ照准、重立候藩用公書へ鈐印可致、就テハ先般其藩ニテ彫刻之上届出候藩印ハ削印可致、此段相達候事、

明治六年八月十九日

外務省印

琉球藩

〔<sup>(米)</sup>別紙〕条例

一此藩印ヲ鈐候事柄ハ、藩王必ス承知之上ニ限ルヘキ事、

一金銀借貸証文類ニ此藩印ヲ鈐スベカラザル事、

外国人へ対し候証文等ニ此印ヲ鈐スベカラザル事、

明治六年八月廿二日

太政大臣代理

参議御中

副島外務卿

撰政・三司官は琉球藩要枢之重官ニ而、鹿児島藩付属中此両官は人名相立申出之上、時々申付相成来候、御直管罷成候ニ付而は、右両官は奏任官ニ被准、交代之節は人柄取調藩王より伺之上、任職被仰付可然、尤撰政は四等官、三司官は六等官ニ被准度、此段可被遂御評議候也、

明治六年八月廿二日

太政大臣三条実美殿 外務卿副島種臣

先般

皇居炎上ニ付琉球藩王ヨリ相応之献金仕度旨、別紙之通り東京在勤与奈原親方を以テ内々申出候、然ルニ同藩之

儀は土壌偏小国用常ニ不足いたし候場合ニ付、献金ニ不及旨相達し申候、因而此段申進置候也、

明治六年八月三十日

東京在勤琉球藩使より差出候書付写

皇居御炎焼ニ付、琉球藩王より相応之御加勢金致献納度内願候間、御都合之処御内々相伺申越候様、此節琉球より申来候ニ付、御内分奉伺候間、何分御差函被成下度奉存候事、

癸酉八月

琉球藩より献金之儀伺出候ニ付

指令

書面内願之趣神妙之事ニ候得共、献金ニ不及候事、

明治六年九月十二日

外務  
省印

〔朱〕  
「宮本大丞へ伺之上  
此印相用候事」

明治六年九月三日

太政大臣三条実美殿 外務卿副島種臣

琉球国在勤官員御手当之義伺

琉球国より帰京いたし候当省六等出仕伊地知真馨より同所在勤之官員御手当筋之義ニ付、別紙之通申出、尚事実承糾候処、奏任以上は節儉相用候得ハ、取統出来可申候得とも、判任以下等外ニ至而は月給二割増ニ而は現場不足相立取統難出来段申出、同所之義内地之名を降候迄ニ而、其実台湾海ニ介立したる異域にして、遠近ニ於てモ朝鮮国よりは格別遠隔、其上布商買之道開けず、百物欠乏日用之器具百端都而鹿兒島を仰き居候故、格外高価之段は相違も無之、情実無余義次第二付、朝鮮国在勤之者御手当よりハ格別相減、琉球国在勤之ものニ限り前書二割増を相廃し、更ニ内地着後六十日之内御手当を目途とし、別紙之通月割御手当下賜り、右を以当分為取賄候様可致、尤追而彼地之形勢物価之低昂ニ随ひ、更ニ可相伺と存候、依之別紙相添此段相伺候也、

明治六年九月三日

(米) 一伺之通

明治六年十月十四日(四)

琉球藩在勤官員月御手当

一ヶ月

一金三拾円

八等  
九等

但着後六十日内御手当一日金壹円ツ、三十日分

一ヶ月

一金貳拾六円

十一等

但同断一日八十七銭ツ、同断

一ヶ月

一金貳拾貳円五十銭

十二等  
十三等

但同断一日七十五銭ツ、前同断

一ヶ月

一金拾五円

十四等  
十五等

但同断一日五十銭ツ、前同断

一ヶ月

一金拾円五十銭

等外  
一等  
二等

但一日三十五銭ツ、前同断

一ヶ月

一金九円

但一日三十銭ツ、前同断

朝鮮草梁公館在留官員御手当高

一ヶ月

一金七拾五円

八等

一金六拾九円

九等

一金六拾円

十等

一金五拾六円

十一等

一金四拾九円

十二等

一金四拾五円

十三等

一金三拾四円

十四等

一金三拾二円

十五等

海軍省  
御中

外務大少丞

当春中為測量琉球藩へ回艦相成候大坂丸、八重山島より護送那覇於而在勤当有官員へ御引渡有之候、西班牙国人救助ヲ請候儀ニ付、同国代理公使勤方エミリヨフエドより別紙写之通謝書差出候間、為御心得右写差進候、御落手有之度候也、

明治六年九月十五日

以手紙致啓上候、然は此度難船ニ出逢候我国人、琉球ニ於而仁慈懇情之御処置を請候趣、ヒリツヒース島主宰承り、同人不堪歎喜、又其節手厚之御救助被成下候礼謝を貴政府へ申述度旨、右主宰より拙者へ致通達候間、此段申進候、右可得御意如此御座候、敬具、

千八百七十三年第八月廿九日於横浜

副島種臣  
閣下

西班牙代理公使勤方  
エミリヨフエド

明治六年九月二十日

琉球藩へ達書案

一 藩王閣下昨年 特命を以て冊封を賜り、永久之一藩屏と被 仰出候ニ付は、朝廷へ抗衡或ハ残暴之所業ありて、庶民離散する等之事（廢藩）るに非らされは、廢藩之御処置ハ固より（廢藩）敷候、  
一 藩王教育向行届き刑措数十年之（廢藩）任職を不辱、感心之事ニ候、益庶民愛護永年（廢藩）致貫徹度事ニ候、  
一 先年於其藩各国と取組之条約原書被差出候ニ付、向後藩難を醸し又ハ不為ニ相成取計ハ決シ而無之候、  
一 仏米蘭之外其藩於而条約不取結国と雖、朝廷於而条約既済之各国船艦其藩内へ渡来候節ハ、当省より出張せる官員之指令ニ遵ひ、仏米蘭と結へる条約ニ照準し、厚く処置可被致候、  
右之件々外務卿副島種臣殿より致承知候、為御心得此段申進候也、

明治六年九月二十日 外務六等出仕伊地知貞馨

外務大丞 花房義質

伊地知貞馨殿

伊江王子殿

宜野灣親方殿

川原親方殿

明治六年九月廿四日

外務省

在勤

与那原親方

大神宮主典椿時中より当国中も御内地同様大廟之大麻為

致頂裁度旨、別紙ヲ以被申出候間、何分申上候様御達之

趣承知仕候、然処当地之義民間多くは矮小之家屋ニ而、

清淨ニ棚を構ひ大廟之大麻奉安置場所迺も無之、

神威を奉汚候而は別而奉恐入候義ニ御座候、殊に往昔よ

り別段神社建立、大麻備上神職等相立、藩王始諸人崇敬

仕、折々国家安穩之為神職之者共別紙祭文之通、

皇大神御以来御五代之地祇并右御以上御七代之天神を奉

始、諸神ニ被致祈願、正五九月ニは藩王直被致參詣事候

間、藩王為惣代年々大麻忝箱宛拝戴仕、各戸頂戴仕候義

は御用捨之方宜御取計被成下度奉存候、此段申上候也、

明治六年四月十四日

琉球藩

今般

朝廷地券発行ニ付、鹿兒島県琉球館地從前通難召置、御

引揚可被仰付候間、早々其心得可致旨御口達取添、別紙

之通県庁より御達有之、同県詰役々至極致心配、態々飛

脚を以申越有之候、然は琉球は何篇不自由之所柄、上下

日用之物件専鹿兒島県を便相達候付、東京御支配相成候

而も失張從前通鹿兒島県江も役々出張、琉産之品々繰登

致支配、且東京江之使者モ直上京難成、於同所日用品等

調弁之為在宿いたし候訳も有之、旁商売方ニ付而之蔵屋

敷とも相替候処、右館地御引揚相成候而ハ外ニ相応之敷

地相求、役々詰所蔵軒等取持、大金之入費相及、困窮之

小藩如何取償可申哉必至と驚入申仕合御座候間、遠海不



自由之小藩御奉公方付相立置申次第、彼是別条之御承知を以、何卒右館地は琉球藩へ御下賜被仰付被下度奉願候、以上、

癸酉九月廿四日

旧琉球館地壹町貳反  
四畦廿七步

右者今般

朝廷地券発行ニ付、御法令ニ基キ地主相立相当之地租可相収事候条、従前之通難召置、館地引揚候事、

明治六年癸酉

九月五日

鹿児島県庁朱印

大蔵省事務総裁

参議大隈重信殿

外務卿副島種臣

当地在勤与那原親方より別紙之通願出、館地下賜之申儀は御採用出来兼候得共、小島之小藩殊ニ昨年藩籍ニ被仰渡候ニ付而ハ、彼是之出費も不少、旁難済之趣候間、格

別之御撫恤を以て、是迄拝借邸低価払下之例ニ準シ御取計有之、相当之地税上納為致候ハ、可然と存候ニ付、其趣鹿児島県へ御達相成候様致度、此段及御懸合候也、

明治六年九月廿九日

明治六年十一月廿七日

外務卿寺島宗則殿

大蔵卿大隈重信

当地在勤与那原親方より館地下賜之義御省へ申立候ニ付云々、御懸合之趣承知いたし候、右館地之義は此度限り、特別之訳を以て無代価ニ而同藩へ下渡、以来賦税候様鹿児島県へ相達置候間、其旨御承知有之度、此段御回答旁申進候也、

明治六年十一月廿七日

明治六年九月廿七日

琉球藩

御中

外務大少丞

英国ベネール船昨年琉球表ニ而難船之節、乗組人救助受候謝辭可申入為メ、同国政府より近々砲艦回艦相成趣、別紙新聞訳相添在上海当省官員より別紙之通申越候間、御心得として差進候、委曲は伊地知貞馨より御聞取可被成、此段申入候也、

明治六年九月廿七日

上海領事館より之來簡拔萃

昨廿七日此地発兌之新聞中別紙式通訳文之通掲載いたし候間、御含まで入御覽置候、琉球藩へ派出之船は素より英国砲艦にして、全く同国政府送物を達候までの様ニ被存、別ニ商法相兼候模様には無之候、多分追而同藩出張之官員より申達可仕義と存候、

明治六年十一月廿七日

琉球藩東京詰  
与奈原良傑殿

外務大丞柳(原脱之)前光  
外務省六等出仕伊知地貞馨

今般在清国英国領事より申出、其藩へ訳官フレナンと申者ヲ派シ度、右は去年其藩管内へ漂流之英国人四名之者危急存亡之際、其藩より懇切之救助ヲ受候厚意ヲ謝シ候為、英国政府より金時計并鎖寄送致度候得共、言語不通より其意ヲ了解不為事も可有之歟と懸念候故、右弁解之為御国人之内一員を同行為致具候ハ、同国政府之厚情を貫き可申と、右領事より倚頼有之、六等書記生我田雄二郎を同行、八月八日朝其藩地江向清国上海を揚錨致候旨、在清国我領事より申出候、尤右之義ニ付テは新聞紙訳添九月廿七日相達置候通、全謝詞申入候迄ニ候間、委細は別紙訳文写ニ而御承知可有之、此段及御達候也、

明治六年十一月廿七日

〔朱〕八月廿二日上申之節別紙而已正院江差〔磨滅〕

謹白、当藩江清国人漂泊等之〔磨滅〕取扱向之事件旧例ヲ照し、藩庁之計ヲ以て〔磨滅〕行フヲ請フ、因茲使者三司官向居謙・賛議官〔磨滅〕勲ヲ遣シ、謹ンテ表疏ヲ具ス、

巨細撰政・三司官等より稟明スヘシ、特ニ優免ヲ垂レ、  
聖恩ヲ無涯ニ頂キ奉ランヲ懇願ス、伏テ

奏聞ヲ請フ、

明治六年五月十八日

琉球藩王尚泰謹奏

去年当藩属島八重山島へ外国人漂着有之、御軍艦大坂丸  
同島為測量下着之折、当地江御列渡相成、御在勤之官員  
衆より外国人交際向へ外務省御管轄ニ候間、御出張御応  
接可被成段御達シ有之、先規通り当藩計之方段々申立候  
得共御採用無之、其通御取計相成、当五月鹿兒島県被差  
送申候、依之願申上候義恐惶至極奉存候得とも、当藩之  
義往古より支那へも属シ来、支那人漂着有之節ハ致介抱  
福州江可送帰旨往年支那帝命令相成居、是迄漂着之節ニ  
当藩計ヲ以て介抱申付、本船破損等ニ而自分ニ帰帆難調  
者共は支那国江之進貢接貢船便、又は仕立船ヲ以福州江  
差送、一旦琉人支那漂着之節も其所之官向ニ介抱福州琉  
館屋江被送届、近地之事故互ニ漂着仕候義繁々有之、件

之取計向既ニ支那当藩之規模ニ相成居候処、支那人漂着  
之節、右通御在勤之官員衆御取扱相成候而は命令違背之  
筋成立、当藩何とも難致次第御座候、脱体海外不自由之  
孤士、全

皇国及ひ支那を便立行、夫故往古より御兩國ヲ父母之國  
と伝唱仕、藩内一同尊仰致来候次第ニ而、支那国江も先  
規不取失通融最通

皇国御奉公筋精勤仕度、藩王始萃藩深願罷在申事御座候  
付、件之情実

御憐察被成下、何卒支那人并同管轄之国民とも漂着等之  
節々、応接其外送届向旁御在勤之官員衆御差図を請、当  
藩役々にて先規通取計候方ニ被仰付被下度奉願候、右ニ  
付藩王願意之程使者三司官浦添親方・賛議官大宜見親雲  
上ヲ以被申上候間、御採用被成下候様偏ニ奉仰候、猶浦  
添・大宜見より申上筈御座候間、何分ニも可然様御執成  
奉願候、以上、

癸酉五月十八日

琉球藩三司官

川平親方

同 宜野灣親方

同撰政伊江王子

外務省  
御中

琉球藩江指令

書面伺之趣清國人漂流之節ハ追而何分指揮及迄本省在勤之官員江時々申立之上、還送方は旧ニ依リ可取計事、

但

朝鮮人外国人は此限ニ非ス、

明治六年九月十八日

外務省印

明治六年十一月四日

琉球藩江口達之覚

伺願事等は条理之有無ニ依リ御差函相成義ニ候得は、相  
当之事件は一紙ヲ以願出候而も御許可可有之、無筋事柄

は何程申立候而も曾而御採用不相成候間、別段使者差立候而も願事之成否不関、徒ニ藩財ヲ費ス而已ニ候、万事

奏達之為メ親方老人致在勤事故、以来は右在勤之者へ托し伺出候様可致、為心得此段達置候事、

但

非常之儀到来之節は別段ニ候事、

明治六年十一月四日

明治七年一月十三日

太政大臣三条実美殿 外務卿寺島宗則

琉球藩年貢船難破一件

琉球藩年貢船難破之節諸雜費、且右一件在上海領事及処分之顛末并米國船江謝酬金等之書類相纏候ニ付、致廻送候、随而昨十月九日付乙第一千八百八十一号、同藩年貢船漂着之節は諸雜用之伺、同十二月廿四日付二千式百三十四号、米國船江謝酬之伺簡連之御示令有之候様致度、此段申進候也、

明治七年一月十三日

明治六年八月廿七日

外務卿副島種臣

品川領事

閣下 井田総領事

去月廿三日付第貳拾六号付添之公函ヲ以テ申上置候琉球藩下漂流人、此地滞留中之費用別紙勘定書之通仕払候間今便報申仕候、御国内諸県ニ候得は、先例之通長崎県ニ委托致、夫々順席返輸之方法を立可申候得共、報知新聞第五百号中朝鮮国船漂着之節、御取扱之御振合も相見候ニ付、難民ハ唯送帰し候迄ニ致し置、同人等滞留中之諸費ハ逸々彼等へも申聞置候迄ニ而、今般別紙之通取調へ申達仕候、此地へ残置候船は別紙第一号書付之通、此地出商木綿屋幸兵衛江洋銀式百式十五弗ニ売払申候、漂流人等申出候ニハ、御救助方ニ付而今日之御費用夥敷相懸り候様被存候ニ付而ハ、右船売払代価ヲ以て政府之鴻費百分一ニ相備度段申出候得共、一応政府江相伺候義ニ付、

追而政府より本藩江御所置振御告知可相成と申聞置候付而は、右書類一纏り致其候申達仕候、将又当館より払出候洋銀四百五拾三弗貳拾六錢四トハ、非常金より操替置候間、何様本省より御返輸被下候様致度存候也、

明治六年八月廿七日

猶江琉球船代価ハ当館江預置、追而御差圖ニ寄本省江返納候とも、本藩江差戻候共可仕候、以上、

右困難船は米国船於洋中扶助上海江別レ越シ、我領事江引渡シ長崎江送り届帰藩致させ、右ニ掛ル諸雜用ハ都而官費ニ相立、於上海売払之船代等ハ都而船主中江被成下候旨ヲ以、在勤親方江御引渡相成候事、

明治六年七月廿九日

太政大臣三条実美殿

外務少輔上野景範

琉球藩より貢米上納方之儀ニ付願

今般琉球藩より貢米上納方之儀ニ付、別紙之通願出候間、

猶現地之情勢取調候処、願意無抛相聞、殊同藩之儀は海  
陬之孤島ニ而、即今内国同様之税法ニ引付候訳ニも難相  
成候得は、可然御評議有之度、為其願書及現地熟知之者  
より差出候書類相添、此段相伺申候也、

明治六年七月廿九日

〔朱〕琉球藩貢納ノ義、同藩願ノ通ニハ難聞届候得共、特別ノ詮議  
ヲ以賦米等ノ名目并代砂糖納相廢シ、自今米八千二百石ヲ常  
額ト相定候条、毎年十月十五日より十二月十五日迄六十二日  
間、大坂市中平均相場ヲ以右代上納可取計、尤右期限ノ義当  
分翌年七月マテ延納差許候条、納方ノ義ハ大蔵省へ可申立旨  
可相達事、

明治六年十二月二日

右大臣  
岩倉  
具視印

外務省  
御中

伊江王子  
宜野灣親方  
川平親方

当地之儀

朝廷御支配被仰付、段々蒙

浦添親方

御恩恤、且是迄鹿兒島県用聞共より高利付之借銀有之致  
難決候趣被聞召通、段々被及御手数、東京国立銀行より  
金式拾万円借用ヲ以返却相済、彼是御取扱之程、誠以難  
有次第奉存候、然処全体不自由之小藩蔵入之分ニ而は諸  
用費足合不申、難決之上臨時物入之儀共打続、蔵方を始  
士民窮迫成立定式難差欠、藩務之用銀茂御座候得は、銀  
行方五ヶ年賦之利割渡之儀茂大金之事ニ而、年々定式之  
蔵入ヲ以払入之処、別而無心許、殊更近年稀成早リニ而、  
年内稻植付之時節より当分ニ至り潤ニ相成候程之雨降不  
申、多分乾田相成、苗は勿論適植付置候稻茂枯損、庶民  
朝夕之食料ニ仕候唐芋迄も植付方不相調、今形ニ而は千  
万成熟之程無覚束、旁以心配罷在、殊ニ海外之土地金銀  
之通融も無御座、上納方ニ付而も別而手数ニ相及事ニ御  
座候間、何卒御憐愍之御所分を以、当酉年之貢税来戌十

二月迄ニ上納仕、戌年之貢税亥十二月迄ニ上納仕、年々其通追送之引結ニ被仰付、左候而右年貢之内直成替を以此節致上納候砂糖九拾七万斤余、御引合之石高茂来年上納之方江御差引被仰付、右砂糖以来は名分通米ニ御引直被下候様奉頼上候、年貢米之義都而代銀上納被仰付度、於当所先達而奉願趣御座候処、大藏省之官員衆当地ニ御詰居無御座節ハ、代銀大坂表租税寮江上納可致、尤相場立之儀は当地取納之季節那霸市上一ヶ月ニ上米相場平均ヲ算シ、代銀積取計候様御達之趣承知仕候得共、金銀之通融無之現錢も不自由之場所柄ニ而、於当地は代銀之手当全ク難相調、暖地地性も不宜訳ニ候哉、出産之米品位別而不宜、売払候而も御内地之米より直段半減位も相劣、那霸市中相場之米と申候得は皆鹿兒島辺より致輸入候品ニ而、藩米之相場ト申セしかと無御座、諸品差登繰合を以上納仕度儀ニ候間、旁之情実被聞召取、御見合ヲ以於大坂御定直被召立、年々彼表ニ而代銀上納被仰付被下度奉願候、左様御座候得は追々は窮民撫育之道も相調一藩

御恩沢浴シ、難有御奉公筋精勤仕度奉存候、乍恐奉願候条件御許容被成下候様、偏ニ奉仰御仁惠候、已上、

明治六年四月十二日

是迄琉球藩より鹿兒島県江之上納米別紙之通ニ御座候、然処鹿兒島県土族高ニ相掛賦米御免許相成候段内承仕候、琉球藩より上納之賦米も鹿兒島県土族高賦米同一之儀ニ御座候間、当年より上納方御免許被成下候様仕度此段奉願候、以上、

癸酉六月

在勤 与那原親方

琉球惣高九万四千貳百三拾石七斗九夕四才ニ掛出米  
一米七千六百三拾貳石六斗八升七合

同賦米

一米千三拾六石五斗三升八合

八千六百六拾九石貳斗貳升五合

内

三千六百八拾石

代砂糖九拾七万斤余上納

右は天保二年鹿兒島県より式千八百石之代り砂糖七拾五万斤致上納候様申付相成、上納いたし来候処、連々琉球困窮罷成、懇願之趣有之、嘉永六年代砂糖上納免許相成、

其後文久二年より命令ニ依り前条員数砂糖ニ而致上納、

元治二年ニ至り外ニ砂糖四拾四万斤余米納之代りニ上納いたし候様布令御座候得共、全体琉球之義土地狭り、民間之食料は唐芋而已ニ而、砂糖作相重候而は別而民苦ニ

罷成候間、致哀訴半減之処ニ而御請いたし、式拾式万斤

余砂糖上納相重、都合内書員数当分相納来申候、

差引

現米上納

四千九百八拾九石式斗式升五合

内賦米

千三拾六石余

右賦米と申は、鹿兒島県支配中之百姓殿役之夫賃飯米ニ

差向之由、寛永年間初而定式出米之外上納仕、夫遣之多少ニ依り年々増減有之、手形相渡り上納仕候処、宝永年間高壺石ニ付壺升壺合宛ニ被相定、都合本行通ニ相及、外ニ運賃米相添年々上納いたし来候、

一琉球藩之儀は二十六七度ニ当り候暖地、毎年正月中稲苗植付来候、然処当年は稀なる災旱、昨冬より当春三月迄降雨無之、挿秧不相調、適時付之苗も多ハ枯果、

民間之食料ニ充候唐芋も難植付段は、私共實際目撃致候、殊ニ数百里外致隔絶候孤島、運漕不便利之事ニも

候間、年々之貢物期限被召延候ハ、代銀取立等も都合能相調、一藩感喜可致候、

一砂糖上納之株も皆米ニ引直し度と之願其根本を申候得

は、慶長年間島津氏琉球征討之折、其管轄中之諸島田畑竿入いたし、惣高頭ニ割付、出米之税米一式ニ定為

致上納来候処、鹿兒島藩便利を以去ル文久二年・元治

二年両度ニ掛、初而三千六百石之代りニ砂糖九拾七万



斤余為致上納候、其節ニ砂糖作は土地を撰事ニ候得は、庶民食用之芋類植付之場所狭く相成及民苦候間、可致用捨不一方故障申立候得共、押而申付置候事ニ御座候間、米納ニ御引直し之方名実至当ニ可有之存候、

一 貢米之代価大坂相場ニ定め、於同所上納いたし度との願、余県ニ準し可申候得共、洋中之一小藩内地と一例

ニ難見做儀ニ茂可有之、且藩産之米は品位至而悪敷、

那覇市中之米相場と申は鹿児島下より運輸之米ノミ

ニ有之、藩内通融之金銀貨幣逆も無之、藩産大坂江輪

出売払之上貢納之代金取立ル事候得は、願通年々大坂

相場平均ヲ以於同所致上納候筋ニ被相定度存候、

一 賦米は全ク正税之外ニ而、是迄鹿児島藩管轄中之土族

以上之高前ニ賦付、藩用ニ充て候為ニ為致上納候訳ニ

候間、是又御用捨相成候様仕度と存候、此段申上候也、

明治六年七月

伊地知貞馨

外務省  
御中  
琉球藩  
与那原親方印

琉球貢米之内直成替ヲ以致上納来候砂糖之義、以来名分通米ニ御引直被下度、先達而奉願候通ニ而追々收納之節季差運候間、何分御片付被仰付迄之間、取納并輪登方等琉球蔵方計被仰付度奉存候事、

明治六年十月三十日

右大臣岩倉具視殿

外務卿寺島宗則

琉球藩貢納御採用之義ニ付同藩之書面差出方

琉球藩貢納御採用之義ニ付、同藩之書面差出方特別之御

詮議ヲ以、願意御採用相成候ニ付、同藩使臣深く奉感荷

不取敢別紙等之通紙面差出候、就而は為御心得差進候也、

明治六年十二月十日

明治七年三月八日

太政大臣三条実美殿

外務卿寺島宗則

琉球藩開墾之儀ニ付、別紙之通り在勤親方与那原良傑より出願候処、抑同島之儀は往々風旱之殃有之候得共、藩内救荒之預備未立適罹災之時は上下窘乏周急之術なきニ至る、然れ共元来昔時鹿兒島藩管轄之比は、庶事輒束ニ過キ、新地開墾等開手候へは税法随而起り、功勞不償より自然不足ニ安し候民風ニ慣行、一昨年来

朝廷之優待愛護之旨趣へ、一藩耳服ニ候へ共、兎角前事ヲ回顧し来るを狐疑し人氣凋頽いたし候顛末は、即チ伊地知貞馨見込書ニも縷陳候通りニ有之、就而は特別之御評議ヲ以万民憤勉精業之道ニ従事いたし候様御沙汰有之度、即書類相添此段上申候也、

明治七年三月八日

(朱)  
一上申之趣琉球藩之義は、年貢米八千二百石被定、其土地ハ全ク藩王ニ被委任候義ニ付、新地開墾・物産繁殖等ハ藩王之見込ヲ以テ、励精着手可致旨可相達事、

明治七年六月二十三日

太政大臣  
三条実美印

琉球藩租之儀、自今米八千貳百石ヲ以定額ト被相定候段既ニ蒙御達、誠以難有次第奉存は、抑本藩之義ハ全体地凶狭く土産乏く候得共、尚敷島之内ニは夫是犁鋤ヲ入レ候場所無之とも難申、然ニ従前之開拓并養蚕、其外国益ニ可相成製産等折角申勸候得共、兎角前米之風習ニ凝り開地物産相広り候ニ随ひ、租税自ラ被召重、却而勞して無功儀ニ形行候ニ付、終ニ致固滯、富国之道開兼申候段、幾重ニも残念奉存候、然るニ忝も

朝廷御直営被仰付、右通貢納之定額ヲも被召定候上は、自今増税等不被仰付候間、上下共無疑惑、勉勵仕候義ニ候得は、前書敷島之内從來鹵莽之地面等開拓いたし、尚養蚕等種々産業ヲ広候様申勸度、然る処元来貧藩之儀ニ候得は、御内地府県ニ而被為執行候開墾産業等之御規則通りニ而は、迺も人氣進ミ兼候、特別之御詮議ヲ以開地除税之御判物被成下候へ、挙藩一同難有奉感戴、内地ハ勿論管轄島々ニ至り夫々精業往々富国之策相起、然らハ從而御奉公之道も相立可申儀候間、何卒右御判物被成下

度奉懇願候、右は先達而より伊地知貞馨殿江も委細内願  
申上置候通之情態ニ御座候間、幾重にも願意御採用被為  
在度、偏ニ奉依頼候也、

明治七年三月

琉球藩

与那原親方印

外務省

御中

琉球藩所轄ノ諸島ハ土地余アツテ戸数稀疎ナリト雖モ、  
藩王ノ居住セル沖繩島ハ人烟稠密、山頂ヨリ海畔ニ至ル  
マテ開懇、農事モ亦行届ケリ、然レトモ南海中叢爾タル  
小島ナレハ、海風吹起リ屋壁ヲ頽シ、作毛ヲ荒シ、数月  
ノ艱苦一時ニ蕩尽スルコトアリ、且其島タル南北三十五  
六里、東西ハ広キ所十里、狭キハ僅カ二里ニモ足ラサレ  
ハ、河水ノ土田ニ灌クヘキナク、多クハ天水ヲ仰ケリ、  
故ニ天久ク雨降ラサレハ田地龜坼稻秧枯果テ、秋熟ニ至  
リ其半ヲシテモ得ルコトアタハス、三四年間ニハ必ス風  
旱ノ災ニ罹ル共、防キニ各村耕スヘカラサル地ニハ蘇鉄

ヲ植付樹心ヲキサミ水ニテ晒シ、凶荒ニ備ユレトモ、毒氣アツ唐芋ノ粉ト混和シテ食ス  
テ其為ニ満身澎張死スル者アリ、官救荒ノ備アレトモ素  
ヨリ余資アルニ非サレハ、漸ク千五百石ノ米ヲ藩庫ニ備  
ヘ、各郷三四石ヨリ三十余石ニ至ル迄ノ米雜穀ヲ社倉米  
ノ如クニシテ用意シ置タルマテナレハ、九牛ノ一毛ニモ  
アツルニ足ラス、明治五年一月鹿児島県庁ノ命ヲ受ケ、  
奈良原繁同行渡琉ノ節、部落ヲ巡回セシニ、窮士農ニ至  
ツテハ府県窮民ノ比ニ非ス、矮小ノ茅屋ニ屈居、身ニ全  
衣ヲ纏ハス、足ニ草鞋ヲ着セス、土間住居セル者多ク、  
愍然ノ情ヲ起サ、ルヲ得ス、之ヲ救フノ術ヲ思ヒ良法ヲ  
得ス、僅カニ島津氏ヨリノ旧債ヲ与ヘ切ニシタル金ヲ本  
ニシ、其年々消却スヘキ管ノ錢ト琉官ノ計ヲヒニテ撰  
政・三司官ノ俸禄減少、諸士高禄ノ者ヨリ出米ヲ出サセ、  
此二株ヲ以テ年々各村ニ割付、極窮離散ニ至ル者ヲ扶助  
スルノ道ヲ立テタルマテノコトナリ、今般幸ニ琉藩貢納  
ノ願意御採用相成タレハ、当座撫育ノ道ハ立ヘント感喜  
ノ至リニ禁ヘス、然レトモ隔絶ノ僻地往来自由ナラス、

今日ニ至ツテハ蒸氣船ノ便アリト雖トモ、彼地ニ備ヘ置ケルニモ非ラス、往復ノ中急難ヲ救フコト能ハサルモ計リカタク、且時々賑貸ヲ仰クモ如何ナリ、上ヲ仰カス下ヲ妨ケス、永年ニ至リ連続スヘキ救荒ノ予防無ルヘカラス、彼ノ地ヲ熟視スルニ、人口多キノ故ヲ以テ寸毛ノ除地ナシトイヘトモ、海畔灣曲ニ至ツテハ僅々ノ資金ヲ費シ海水ヲ防ケハ、田トシ畠トスヘキ地敷所ニ之アリ、又首里那覇ノ間ハ人家殊ニ櫛比徒手日ヲ送ルモノ多ク、自然生ノ桑アリ、養蚕ノ通ヲ了知セル者モアリ、加ルニ各家ノ周圍路傍水畔ニ幾百万株ノ桑苗ヲ移シ植ヘ、門閭ノ婦女遊手徒食ノ者ニ勸メ、養蚕ノ道ニ力ヲ尽サシメハ、藩産倍蓰スヘキト思ヒ、奈良原ト談合シ此二事ヲ勸メ、書面ヲ以テ達ストイヘトモ、琉官曰ク、新田ヲ開クヘキ地アルヲ知ラサルニ非ス、養蚕ノ益アルヲ知ラサルニ非ス、然レトモ寸地ヲ開ケハ随テ租税加ハリ、一産ヲ益セハ随テ一法立チ士民益困却セリ、今之レヲ論ストイヘトモ一人モ応スル者ナシ、依テ曰ク、今日マテハカ、ル事

アルヘシ、以来ハ兩人ニテ請合讓リニ税ヲ益シ、商法ノ妨トナルコトハ決シテナサ、レハ、此二事ハ必ス起サルヘシト、千變万化說得スレトモ兩人進退死生ノ程モ計リカタク、士民ヲ安ンスル道ナケレハ承諾シ難タシト肯カハス、是ヲ以テ婦郷ノ上臬官ニ説キ、民心ヲ安ンスル程ノ一紙ヲ与ヘ之ヲ起サシメント思ヘリ、兩人婦臬後間モ、ナク琉球藩御直管トナレルヲ以テ、因仍今日ニ至レリ、當時在京ノ琉官ニ之レヲ勸ムレトモ、謝スルニ前ノ詞ヲ以テシ、且曰ク、若シ

朝廷ヨリ士民安堵スル程ノ一紙ヲ下シ賜リナハ之ヲ以テ信トシ、人氣ヲ鼓舞シ、海畔ノ田畠ヲ開キ養蚕紡織ノ業ヲ盛大ニシ、上下ノ力ヲ以テ凶荒ノ備ヘ等モ立置キタシ、是レ切ニ希望スル所ナリ、然ラサレハ手下スコト能ハストイヘリ、一ト向ニ申セハ自由勝手ノ詞ニ近シト雖トモ、是マテ鹿兒島ヨリ那覇港内ニ産物会社ヲ設ケ、人民ノ咽喉ヲ扼シタル如キ商法ヲナシ居タル後ニモ之アリ、僻陬ノ地ニ成長シタルモノハ世上ノ情態ニ疎ク、自然疑

念深キモノナレハ、固陋頑愚ノ士民斯ク思フモ無理トハ申シカタルヘシ、未タ清國ノ交リヲ絶タシムルニモ至ラス、士民保護ノ実事ヲ施シ、一藩ノ人心ヲ攬リ置タキモノナレハ、願クハ非常ノ特典ヲ以テ別紙如キノ書面ヲ賜リタク、然ルトキハ人々安着一寸ノ地ヲ開ケハ一寸ノ私有地トナリ、一品ノ産ヲ起セハ一品ノ私有産トナルヘシト思ヒ、各奮勵其分ニ応シ海灣ノ田畠ヲ開キ、養蚕紡織ノ業ニ力ヲ尽シ、上ノ扶助ヲ仰カスシテ家々儲蓄ノ道相立チ、遂ニ凶荒ノ予防モ備ルヘシ、其富饒ノ時ニ至リナハ之ヲ裁制スルノ道ハ何様トモ旋シ安カルヘシ、現今肆上ノ枯魚唯大海ノ余滴ヲ蒙ラシメンコトヲ欲スルノミ、情実御洞察御採用ノ程伏シテ懇願スル所ナリ、

明治七年一月

伊地知貞馨

琉球泊沖江英国軍艦来着、金時計・金鎖(欠損)送出艦、且

宮古島江チャアマネ国之商船漂着破船、馬鑑船賞請罷帰

候段、別紙式閉之通申越有之候間御届申候也、

明治七年一月八日

琉球藩

与那原親方

外務省

御中

一 今月十七日七時分、蒸気船一艘当地泊沖来着付撰政并三司官一人・物奉行一人・鎖之側其外役々差越、左候而小管直達殿当藩通事係船江差越、本国来着之次第相尋候処、英国軍艦人数八十人乗合、去年同国船当地外洋ニ而破船難民致救護候為謝礼、政府より金時計・金鎖寄贈之為上海より出艦之由、尤英人二人、上海詰六等書記生和野雄次郎殿那覇表江上陸、御在番所江參候中途、御在勤福崎季連殿行逢親見世江被招入候処、明日於城元藩王対顔之上彼国政府より之賜物差進候段申立有之候由、然ル処藩王病氣故対顔は相断於城元撰政・三司官相逢、贈物も藩王名代撰政江被相渡候様申入候方季連殿へ得御相談、翌朝季連殿より其通被相達候付無異論聞濟、同日七時分翻訳文壁利南艦長早芝と

申者外英人三人・水主三人・雄次郎殿・直達殿付添入  
城付、西之殿江招入候処、去年当地外洋ニ而本國商船  
破船難民致救護候御礼として政府より藩王へ差進候と  
申、金時計・金鎖差出候付藩王江可致伝達と申、相請  
御厚ク謝礼申述、右様難民御救向等之義國役当然之義  
ニ而、不及謝礼候間、将来之義は其心得有之度申達、  
左候而季連殿並撰政・三司官相伴ニ而茶菓子・吸物・  
酒肴馳走、濟而手渡品差進候処、堅致遠慮受納無之、  
六半時分本船江罷帰申候、

付

一 水主等は別座へ招入、茶菓子致馳走候、

一 季連殿は御肝煎御頼申上置候付、英人等入城前以

出張被致候、

一 右贈物受納之証書丁相渡旨英人等申候ニ付、季連殿得  
御相談別紙之通我々名前清國駐劄之ウーエト宛ニテ、

謝礼之書翰相渡申候、

一來着之翌日糧食用として那覇官よりと申豚・羊・庭鳥

・唐芋・玉子・野菜差贈候処、段々遠慮有之候得は、  
此儀先例候間是非請取吳度相達候付致受納、謝礼申述  
候、

一 英人入城之時別紙御届申上候嘆咭利國之内チャアマネ  
國之商船、当七月屬島宮古島ニ而破船、男五人・女一  
人・清國人二人致上陸居候由、当八月島方より届有之、  
今迄在島之所は不相知候得共、成行知達申之旨相達候  
処、同十四日英人兩人、雄次郎殿付添御在番処へ罷出  
帰帆之砌、彼島回艦可列帰候間、水先兩人雇相達候様  
申立有之、船功之者兩人乗付候付同日九時分如宮古島  
致出艦候、然処翌十五日彼島より之飛船到来、右漂着  
英人等事、当八月馬艦船貰受為致帰國段申来、行違相  
成候ニ付疾ク為致出帆候様、

右之通当藩御在勤福崎季連殿以御相談諸事取計仕申候、  
此旨御届可被申上候、以上、

明治六年酉二月十七日

池城親方

宜野灣親方

与那原親方

伊江王子

琉球藩

琉球藩之義、未だ形勢事情ニ通達不致、追々鎔陶之積有之、實際上為致目撃候ハ、同藩開化之一端ニ可罷成候間、藩邸詰頭役者在勤中藩用之余暇本省へ為致出勤候、此段申進置候也、

其藩撰政・三司官任免ノ儀、自今人撰具状其時々伺出之

明治七年一月九日

上、宣下候条、此旨相達候事、

明治七年一月廿四日

外務卿寺島宗則殿

内務卿大久保利通

太政大臣三条実美

其藩撰政・三司官自今奏任官ニ被準候、此旨相達候事、

琉球藩

琉球藩へ自今年々六回之郵便船航通之義御確定、弥本月十六日同船品海開行、駅通寮官員同藩へ出張為致候ニ付別紙之条件及御協議候条、御異見無之候ハ、夫々被御達方御取計、且至急御回答有之度候也、

但シ撰政は四等、三司官は六等官ニ準シ候事、

明治七年一月十二日

明治七年一月廿四日

太政大臣三条実美

大政大臣三条実美殿

外務卿寺島宗則

琉球藩邸詰頭役本省へ為致出勤候届

一首里并那覇港ニ於て土人中より其任ニ可相当者を相撰郵便取扱役を申付、本邦及同藩往復郵便之事務を管掌可為致積、  
一同藩ニ於テ郵便懸官員を置き、同地郵便一切之事務を

管掌セしむへき旨御達、且同藩在留御省官員之義も、

当分之内郵便之事務篤く相心得候様御達有之度、

一 首里及那覇港郵便役所へ追而建築之筈故ニ、当分之間

は右郵便取扱役之自宅或は郵便蒸氣船会社出張所は仮

ニ郵便役所と可致置積、

一 同藩内地へ適宜郵便線路を通し、沿線各所ニ郵便役所

或は取扱所を置き、其郵便取扱役は前条之如く土人中

より相撰、当分其者居宅を以郵便仮役所或は取扱所ト

可為致積、

一 同藩内地之郵便調整之上は、本邦ト同く郵便罰則を施

行し、官民之信書悉皆之ニ依らしむへき積、

一 同藩内地之郵便費用は総て本邦政府之経費ニして、駅

通寮定額金より可為仕払、故ニ内地之郵便税は本邦之

郵便切手を以て同寮へ収納せしむへき積、

付紙一

琉球藩ノ義上下一般未タ世上ノ情態ニ不通、小児ヲ  
養育スル心持ニテ、漸ヲ以致教化候積り、前途ノ目

的も相相立居、当分ノ情実手續も有之、郵便船取起

ニ付若哉不熟之義有之、人氣を損スル様ノ事到来候

而は、是迄致施行候事共水泡ト相成義無之共難申、

万事駅通寮より本省其関係之者へ打合相成度、適被

取起候事業不致永統候而は遺憾之至ニ候間、今般同

寮官員琉球へ派出ニ付而は、本省よりモ奏任官之内

老人同船一時出張、何篇熟談之上致治定度義と存候、

伊地知六等出仕

付紙二

適宜之線路を通するハ最肝要なれと、軽行以て彼を

疑ハしむるなきを要す、

付紙三

郵便罰則を施行し、官民之信書悉皆同之といふ廉は

余程注意せされハ、必ず彼疑懼を生せん、蓋し一藩

其便を充分納得せし上ならて、仮りニも施行すべか

らす、

森山茂

付紙之趣主要なり、先ツ黙止一藩其便を納得セン



後罰則相立度事ニ候、

伊地知六等出仕

明治七年一月廿日

太政大臣三条実美殿

外務卿寺島宗則

琉球藩官員人撰之上、一兩名当省出仕申付度儀

琉球藩之義偏僻固陋旧法を確守致し候風習ニ而、御直管  
以来迎も未御国之形勢事情ニ通知不致、去り迎俄然釐革  
之場合にも至り兼候ニ付、漸を以鎔陶之目途ニ有之、就  
テ實際上目撃為致候ハ、同藩開化之一端ニ可罷成、幸此  
ノ節郵便船渡航当省官員一名彼地出張為致候間、現地之  
振合ニ従ひ同藩官員之内人撰之上、一兩名当分之内上京  
為致本省出仕申付、諸務習練為致度、此段及上申候間、  
早々御沙汰相成度候也、

明治七年一月廿日

〔朱〕  
上申之通、

明治七年一月廿五日

太政大臣  
三条実美印

明治七年四月廿三日

外務大少丞  
御中

史官

今般全国経費取調ニ付、民費之廉々別紙雛形之通取調可  
差出旨、使府県へ御達有之候処、即今琉球藩之義は一般  
府県ト同様難取調義も有之ニ付、御達ニハ不相成候得ト  
も、相分り候箇条も候ハ、右ニ准シ取調、本年ヨリ以後  
追々差出候様、同藩出張之官員へ御通知有之度、仍テ別  
紙相添此旨申入候也、

明治七年四月廿三日

第五十三号

府県

民費課出ノ義ハ其多寡増減ニ因リ大ニ民情ニ關係シ、地  
方官ニ於テモ別シテ注意スヘキ事ニ候、就テハ今般全国  
経費取調一般へ可相示候条、明治六年民費ノ分別紙雛形  
ノ通取調、来ル八月限り可差出、尤今後右ニ準シ毎一年

取調、翌年三月限り可差出、此旨相達候事、

但明治五年ノ分モ取調出来次第可差出事、

明治七年四月十八日

太政大臣三条実美

一 国ヲ全轄スルノ書式

某府使  
某府管轄何国一円 郡若干

大区若干

小区若干 村若干 町若干

反別若干 内田反別若干  
畑反別若干

但元石高若干

民費総計簡条

○某郡 大区若干 小区若干 村若干

町若干

反別若干 内田反別若干  
畑反別若干

但元石高若干

民費簡条

一 国ヲ分轄スルノ書式

某府使  
某府管轄何国ノ内 郡若干 大区若干

小区若干 村若干 町若干

反別若干 内田反別若干  
畑反別若干

但元石高若干

民費総計簡条

○某郡 大区若干 小区若干 村若干

町若干

反別若干 内田反別若干  
畑反別若干

但元石高若干

民費簡条

○某郡ノ内何箇村 大区若干 小区若干

町若干

反別若干 内田反別若干  
畑反別若干

但元石高若干

民費簡条

但災害ニテ潰損地并開墾地・塩浜等有之分ハ、其反

別ヲ書載スヘシ、尤開墾地ハ牧蓄・樹芸・耕種ノ概

数ヲ書載スヘシ、

民費

一 府県庁及出張所并 倉庫等營繕費	金若干	一 戸藉調費	金若干
一 懲役場・囚獄舎營繕費	金若干	一 徴兵下調費	金若干
一 道路・堤防・橋梁修繕費	金若干	一 学校費	金若干
一 布告并布達類入費	金若干	一 病院費	金若干
但筆墨紙并順 達夫賃等ノ費		一 病院費	金若干
一 管内限達事ニ付調費	金若干	一 道路掃除費	金若干
一 諸御用ニ付各庁正副戸長等出願旅費	金若干	一 用悪水道費	金若干
一 区扱所諸費	金若干	一 暴漲水防費	金若干
一 正副区戸長以下ノ給料	金若干	一 井堰守給料	金若干
一 国幣社并府県社・郷村社營繕費	金若干	一 消防入費	金若干
一 祭典并遙拜式費	金若干	一 番人給料并諸費	金若干
一 府県社・郷村社神官給料	金若干	但右ノ經費兩年ニ跨リ候分ハ、凡積ヲ以テ其年限リ 引分テ書出スヘシ、	
一 検見下組及内見其外一切費	金若干	右箇条ノ外民費有之分モ書入レ、総テ一國一郡ト引分 ケ取調ヘシ、	
一 貢米金取集ヨリ納済迄諸費并 貢米五里内運賃其外諸費共	金若干	右明治何年一月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ民費書載ノ 通相違無御座候也、	
一 山林調費	金若干		
一 里程調費	金若干		
一 地券調費	金若干		

明治何年某月某日

某府使  
某縣長官氏名印

明治七年五月五日

明治七年五月五日

史官

御中

外務大少丞

当藩撰政・三司官任免之儀、自今人撰具状其時々伺出之上、宣下御座候段、且奏任官ニ被準撰政は四等、三司官は六等官ニ準候旨被仰渡趣承知仕難有仕合奉存候、右御受為可申上如斯御座候也、

明治七年三月廿七日

伊江王子

外務省

御中

宜野灣親方

浦添親方

池城親方

今般全国経費取調ニ付民費之廉々別紙雛形之通取調可差出旨、使府県へ御達有之候処、即今琉球藩之義は一般府県ト同様難取調義も可有之ニ付、御達ニハ不相成候得共、相分り候箇条も候ハ、右ニ准し取調、本年より以後追々差出候様、同藩出張之官員へ可致通知旨、去月廿三日付を以御懸合ニ候処、一体琉球藩情ハ百事隠蔽之風習ニテ、今如斯綿密なる義を達する時は、我か囊中を探らるゝ歎と疑訝し、容易ニ正準を得かたし、且人氣ニも関係致候故、今暫く達方見合置候方可然と存候、尤御回之御達面ハ同藩出張当省官員心得迄ニ可相達と存候間、此段御承知置有之度候也、

明治七年六月廿九日

太政大臣三条実美殿

外務卿寺島宗則

琉球藩之義内務省ニテ管理為致度旨上申

琉球藩之義先年内付之名義を被正、冊王賜封之折柄、一時当省管理被仰付、当省ヨリ官吏派出、即今ニ至ル迄右事務取扱来居候得共、一体其君主ハ華族ニ列シ、其土地

ハ府県ニ比シ、何事モ御国内同様ニ御座候故、其事務ハ却而外務省之管理ニ帰候事於条理不相立候而已ナラス、自然外国ヲ以テ視候姿ニ相当リ、一体之御主意ニ於テモ不都合被存候ニ付、爾来同藩之義ハ内務省ニテ管理致し相当ニ可有之奉存候間、其段早々同省へ御達有之度、此段上申候也、

明治七年六月廿九日

〔<sup>奉</sup>〕上申之趣聞届、別紙之通内務省・琉球藩へ相達候条、此旨可相心得事、

明治七年七月十二日

太政大臣三条実美印

内務省

琉球藩自今其省管理被仰付候条、諸般外務省へ打合可受取、此旨相達候事、

但別紙之通同藩へ相達候事、

明治七年七月十二日

太政大臣三条実美

琉球藩

其藩事務自今内務省ニ於て管理候条、此旨相達候事、

明治七年七月十二日

太政大臣三条実美

先年琉球人蕃地於て虐殺せられ候際、其遁難之民を護送せし清官へ琉球王より福建総督へ懸合、三百両謝金として差贈候よし、福島領事探索承知致候旨、柳原特命全權(前光)公使より申越候処、右は実事ニ候哉、至急御報知有之度此段及御懸合候也、

七年八月二日

外務大少丞

内務省

御中

先年琉球人於蕃地虐殺せられ候際、其遁難之民を護送せし清官へ琉球王より福建総督江懸合、三百両謝金トして

差贈候儀実事ニ候哉御掛合ニ付、琉球藩出役之者取調候  
処、別紙之通申出候間、此段及御回答候也、

七年八月四日

内務大少丞

外務大少丞

御中

先年琉球人於著地虐殺せられ候際、其遁難之民を護送せ  
し清官へ琉球王より謝金差贈候義実事ニ候哉、外務省よ  
り御糾之書付御取添御達之趣承知仕候、同時難民を助候  
台湾寄留之支那人へ謝金として一昨年秋、支那行之琉船  
より福州官所へ差遣銀子差贈候儀別条無御座候、尤銀子  
員数并委細之手続は爰許へ書留無之相分不申候、此段御  
返答申上候也、

七年八月三日

琉球藩

津波古親方印

琉球藩事務取扱局

御中

琉球藩より清国福建総督へ懸合、金子贈致之虚実及御間  
合置候処、琉球藩出役之者御取調之趣を以、出役之者よ  
り差出たる書翰添御回報有之候得共、右書面之文意明瞭  
ならず、加之字体読兼候間、今一応御調査被下度、此段  
更ニ及御懸合候也、

七年八月五日

外務省大少丞

内務省

御中

琉球藩より清国福建総督へ掛合金子贈致之儀御掛合ニ付、  
琉球藩出張之者へ取調候処、別紙之通申出候間、過ル四  
日御回報ニ及ヒ置候処、右書面文意明瞭ナラス、字体読  
兼候段重而御懸合之趣致承知候、尚又出役之者へ致調査  
候処、同藩より為謝礼金子為差贈義ハ相違無之候得共、  
其手続及員数等之義ハ相分り不申段申出候、是非御見合  
相成ものニ候ハ、一往藩元へ問越候様可致候、此段重  
而及御回報候也、

七年八月廿二日

内務大少丞

外務省

御中

清国福建総督へ謝礼トして金子贈送之義ニ付、別紙之通外務省より懸合有之候条、右金子員数及ヒ年月手続等於藩元ニ詳細取調、至急可申立様可被取計、此旨相達候也、

七年八月廿九日

内務大少丞

琉球藩

御中

琉球藩より清国福建総督へ掛合金子贈致之虚実及御問合候処、謝礼として金子差送り候義は相違無之候得共、其額并手続等ハ不相分旨津波古親方返答書添、御回答之趣致承知候、就而は員数手続等詳細取調度候条、御申越之如く本藩へ御達、早々申出候様御取計有之度、此段乍御手数更ニ及御懸合候也、

七年八月廿七日

外務大少丞

内務省

御中

琉球藩宮古島人於台湾逢殺害候者之死骸埋葬并右骨肉之者三四名為墓參、今般船便ヲ以渡湾可為致之旨等、御趣旨之趣ヲ以出京之藩人呼出、懇々申聞候処、別紙之通敬承之旨申出候ニ付、此段致上申候也、

七年七月廿七日

内務卿

太政大臣殿

当藩管内之宮古島人一昨年於台湾殺害ニ逢候者之死体御埋葬被下、右親子兄弟骨肉之者墓參可仕御達之趣承知仕、御仁厚之御取計幾重ニも難有奉存候、早速藩元へ委細掛合越申候、就而台湾行之御船琉球へ御寄船被下、琉役一両人右御船へ乗船、宮古島へ差越、難有御趣意之程懇ニ申聞、殺害ニ逢候者之尤身近者三四人為惣代御船ニ便船させ候様ニと之趣モ承知仕、是又藩元へ可申越候、自ら

藩元之評議も可有之候得共、不取敢此段申上候也、

七年七月廿五日

津波古親方印

内務卿大久保利通殿

琉球藩

佐久川筑登之

右於台湾逢殺害候琉人共遺骸募参として類族共致渡著候様被仰達候一条、摂政・三司官へ事情為演達、台湾行之御軍艦へ便船琉球へ差下候様被仰付被下度奉依頼候也、

明治七年七月

琉球藩

津波古親方印

内務卿大久保利通殿

明治七年七月十七日

太政大臣三条実美

台湾蕃地御処分之儀ニ付、別紙琉球藩江之御達書及御廻候条、御伝達可有之、此旨申入候也、

明治七年七月十七日

史官

内務大少丞

御中

台湾蕃地処分被

仰出候御趣旨之儀ハ、本年第六十五号達書之通、都督西郷従道渡蕃ノ後勲撫其所ヲ得、往々軍門ニ降服シ、即今殆ト全蕃平定ニ及ヒ、曩ニ其蕃人民ヲ劫殺致候兇徒ハ、專ラ捜探中ニ有之候、尚都督率兵在蕃候間、横死之類族共彼地ニ就テ遺骸ヲ祭リ度素願モ有之候ハ、聊無掛念渡蕃可為致航海、船便之儀ハ長崎出張蕃地事務局へ可申立、此旨相達候事、

琉球藩管内証券印稅施行之儀、大蔵省より伺出候ニ付御下問之趣致審按候処、同藩之儀は既ニ藩屏ニ列シ、制度及ヒ布令等都而他府県同一之御取扱ニ相成候ニ付、証券印稅規則之義モ他府県同様ニ施行可相成は勿論ニ候処、從來其国タル我邦支那ト之間ニ在テ兩屬之姿ヲ為シ、維



新之際始テ名分判然我カ版図ニ属シ候得共、其日尚浅ク就而は正租ヲ収之外雜稅等分賦可仕旨御達モ無之、右は施政之順序ニ於テ御深慮可被為在候義ニ可有之、然ルニ此際他府県同一之振合を以印稅規則御施行相成候而は、施政之順序ニおゐて其得失果して如何可有之哉、因而先ツ御施行之義ハ御見合相成候而、追而教化洽ク被行、藩地整備ニ及候上漸次御施行相成候方施政之順序宜ヲ得可申哉と存候、因而別紙返進此段上陳仕候也、

月日

内務卿

太政大臣殿

別紙大藏省伺琉球藩管内証券印稅施行之義及下問候条、意見早々可申出候也、

明治七年九月廿三日

太政大臣三条実美

内務卿兼

参議伊藤博文殿

琉球藩之義は是迄正稅ヲ納ムル之外諸雜稅等ハ未タ分賦可仕御布令モ無之、右は未タ畢竟置藩已來施政之御順序モ有之、御深慮被為在候義トハ被存候得共、昨明治六年六月一日より御施行相成候証券印稅規則之義は、同藩管内之義モ外府県ニ等しく御施行不相成候而は、同國貿易交際同一ナラサル訳ニ立至り、畜ニ不都合ノミナラス、自然外府県管下人民取締向ニモ相関シ候義ニ御座候条、前書証券印稅規則之義今般御更定相成候折柄ニモ有之、旁来ル明治八年一月一日より同藩管内ニ於テモ御施行相成可然哉、御許可之上は其段当省并ニ同藩江御達御座候様仕度、仍之此段相伺候也、

明治七年九月廿日

大藏卿大隈重信

太政大臣三条実美殿

琉球藩管内証券印稅施行之義ニ付及御尋問度義候間、明五日午前右心得候者名出院候様御達有之度候也、

七年十月四日

左院内務課  
岩村二等議員

内務大少丞  
御中

往年於台灣暴殺被致候琉球人民觸體之義、別紙甲号之通  
長崎支局より電報本日到来候間、即刻乙号之通及回答置  
候、依而此旨及御打合候条、御意見至急御回答有之度候  
也、

七年十月十七日

伊藤内務卿殿

大隈蕃地事務長官

〔朱〕

琉球ノトクロノコト琉球ハンエタツス、マツ長崎ニヲケ、

七年十月十七日

蕃地事務局

長崎支局  
御中

〔朱〕

牡丹社首長差出申候琉球觸體四十四頭高砂丸より到着ス、  
此ハ東京江運送スベキヤ、長崎ニて仮埋葬取計ベキヤ、  
年経シ觸體故臭氣等ノ憂ナシ、如何可致哉、至急御返事  
可被下候、

十月十六日午後十二時廿五分発ス

横山租稅權助

林 海軍大佐

大隈長官殿

過日御懸合有之候琉球人觸體之儀、別紙之通御指令相成  
今廿三日出帆之天祥丸へ積入、尤駅通寮官員折田量蔵護  
送之積ニ相達候間、兼而無差支長崎表ニおゐて引渡ニ相  
成候様御通知置相成度、此旨御回答旁及御懸合候也、

七年十月廿三日

内務卿

大隈蕃地事務局長官殿

別紙蕃地事務局照管之趣致熟考候処、琉球人民保護之御  
篤趣ヨリ起り候義ニ付、此上共尚御主意貫徹、向後御教  
化之一端ニも相成候様有之度、仍而は藩地迄護送之上御  
引渡相成可然存候処、折柄幸ヒ長崎より鹿兒島迄郵便船  
取設有之、昨日天祥丸ト申船駛通寮官員鹿兒島県郵便を  
折田量蔵ト申者請取、五六日中爰元出船回崎帰島之賦ニ  
有之、此船ニ積入鹿兒島詰琉球役員へ御渡ニ相成候ハ、  
御入費も相減シ可申、且本日藩邸詰琉人呼出申談候処、  
右之方別而便宜ニも有之赴申出、旁右之通御取計可然、  
尤一応正院へ御伺相成候様有之度、正院へ御伺案、蕃地  
事務局御回答按共左ニ相伺申候也、

正院伺案略之、

往年於蕃地暴殺被致候琉球人民鬪體之義ニ付、御照管之  
趣致承知候、右は別紙之通正院へ相伺候条、右御指令有  
之候上御確答可申進、此旨御廻答申進置候也、

七年月日

内務卿

蕃地事務局長官殿

往年於台湾暴殺ニ逢候琉球人民鬪體之儀ニ付、別紙之通  
蕃地事務局ヨリ照会有之候処、右ハ琉球人民保護之御篤  
趣ヨリ起候儀ニ付、此上御主意貫徹向後教化之一端ニモ  
相成候様、藩地迄護送之上引渡可然義ニ候処、今般長崎  
ヨリ鹿兒島マテ郵便船取設相成、駛通寮官員折田量蔵ト  
申者乗込、五六日中出帆仕候間、右船へ積入鹿兒島詰琉  
球役員へ引渡、同所ヨリ藩費ヲ以運送為取計可申ト存候、  
尤右出帆差迫リ居候義ニモ有之候間、御即決御指令有之  
度、此段相伺候也、

明治七年十月廿日

内務卿伊藤博文印

大臣大臣三条実美殿

〔朱〕  
一伺之趣聞届、蕃地事務局江相達候条、長崎支局ニテ請取方可  
取計事、

明治七年十月廿二日

太政大臣  
三条  
実美印

往年於台灣暴殺ニ逢候琉球人民(欠損、體四カ)十四頭蕃地ヨリ長

崎港迄着致候処、右明(欠損)三日出帆之天祥丸へ積入、且其

寮官員折田量蔵出張之序護送為致、在鹿兒島琉球藩役員

へ引渡候様可取計、此旨相達候事、

七月月日

内務卿

駒通頭殿

琉球藩

往年於台灣暴殺ニ逢候其藩人民(欠損、體四カ)十四頭、蕃地ヨリ

長崎表迄送越候ニ付、鹿兒島表迄駒通寮官員折田量蔵護

送為致候条、其地ヨリハ藩費ヲ以テ琉球表へ差送候様可

取計候事、

七月月日

往年於台灣暴殺ニ逢候琉球人(欠損)十四頭、其地迄着致

候分、此度駒通寮官員折田量蔵護送鹿兒島迄運送之儀、

正院伺済相成候ニ付、爰元御本局ヨリ御通達ニ相成、御

承知ニ可有之候得共、此度右船其港へ向出帆致候間、右  
同人へ御渡有之度、此旨及御懸合候也、

七月十月廿三日

内務大少丞

在長崎蕃地事務局

御中

冊子原寸 縦二六糎 横一九糎 一三九枚

一覽 久光公建白採用ノ有無ニ付意見書草案

宛名不明

秋冷之砌御座候処、

聖上倍御安全被遊御座恐悅御儀奉存候、閣下ニも御清安

被成御勤仕奉大慶候、然は当夏云々、貴卿

三条公  
徳大寺卿

秋冷

秋冷之砌愈御安康奉欣喜候、然ハ山本孫九郎帰着今御地

之次第細詳承申候、殊ニ

御下問之儀被為在候ニ付、乍病中押而上京仕候様承知仕

候得共、

御採用之有無承知不仕候而は、（実則） 迎も勉強難相整、此義は

徳大寺卿江も委由申述置候事ニ而今更相替義も無之候、

且三条公よりも御口達御座候由、依之三条・徳大寺之両（実美）

公卿江別紙草案之通書状差出候間、左様御承知可被下候、

尚細事ハ法元太郎左衛門より御聞取可被下候、先ハ右申

上度如此御座候、

從三位様

申九月十二日

文書原寸 縦一六・八匁 横三四匁

一 久光公ヨリ三条徳大寺両卿へ

十四箇条ノ建言ニ就テ

（端裏書）  
「壬申九月三条徳大寺江之書状」

当夏

御巡幸之節、猷芹之微衷箇条書ヲ以申上候処、

御前ニ被留置、

還幸之上

御熟覽被遊

御下問被遊度儀モ被為在候間、乍病中押而上京仕候様被

仰渡謹而拜承仕候、右ハ其節徳大寺卿エ委細演舌仕候ニ（貴卿江）

付、御失念は無之筈と奉存贅言不仕候、殊ニ

御下問之御事モ及再度申出置候得共、何之御返答モ承知

不仕大ニ失望仕罷在候、到今

御採用之有無モ承知不仕候得は、海陸之遠路病体勉強難

仕、別而当惑仕候、尤快氣之上は自ラ上京仕、再三之

召命奉拝謝含御座候得共、若此涯

御下問迄之御事ニ御座候ハ、要路之官人一兩輩爰許エ

下向可被

仰付、然ラハ所存十分論談仕度奉存候、実以自由之至恐

入奉存候得共、病体

御憐愍之一筋ヲ以

御許容被為在候様

御執奏偏ニ奉伏願候、誠惶敬白、

壬申九月

島津久光

十月七日

実美

文書原寸 縦一七櫃 横一三二・五櫃

島津従二位殿

猶以追々寒氣ニ相向候、御所旁如何被為在候哉、厚御保護奉遠祈候也、

一六〇 三条太政大臣ヨリ島津従二位殿へ

文書原寸 縦一七・二櫃 包紙原寸 縦二七・八櫃

久光公ノ上京ヲ促ス

横八六・三櫃

横四〇・二櫃

(包紙ウツ書)  
「島津従二位殿

三条太政大臣」

一六一 徳大寺実則卿ヨリ島津従三位へ

久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ウツ書)  
「島津従三位殿

実則

緘

」

秋冷之節倍御壯康大賀之至存候、然ハ先般御建言之義ニ付、為御下問御上京之義被仰出候処、御所旁御勝不被成候ニ付、御理之義縷々御紙面之趣委細領承仕候、然ル処此節御上京被仰出候ハ、全国事親敷御諮詢も被遊度御趣意より被仰出候御義ニ付、是非御上京之上ならてハ御下問も難相成候間、何分ニも少々ニ而茂御快方ニ御座候ハ、御上京相成候様有之度存候間、其刃篤と御諒知有之候様仕度存候、仍右御答旁猶又愚札陳述仕候、先ハ右御報迄草々如此候也、

寒冷之砌御座候処、皇上益御清健被遊御座、御同情恐悦御儀奉存候、次ニ貴官愈御安康被成御消光奉遥賀候、陳ハ当夏御献言之儀ニ付、為御下問御上京之儀御沙汰候処、御宿痾御勝不被成御断之趣、縷々紙表之旨委細承知仕候、然処此節被為召

候は全国事親敷御諮詢も被遊度 思召ニ而被召候義ニ付、  
何分御上京之上ならてハ御下問も難相成義ニ付、少々ニ  
而も御快方ニ候ハ、御上京相成候様有之度存候、其辺  
篤と御了解有之候様致度存候、貴酬旁一翰令呈候、恐々  
謹言、

十月十二日

徳大寺実則

島津従三位殿

文書原寸 縦 一七・五寸

包紙原寸 縦二七・七寸

横 一三・七寸

横 四〇寸

一五九 久光公ノ十四ヶ条建言ニ付和田正道講述  
〔後編〕  
「御献言講述」

題辭

明治五年夏六月

御巡幸ノ挙アリ、此時ニ当リ新政未タ挙ラス、億兆未タ  
安ンセス、然シテ鹿兒島ニ

御行在中、

島津従三位久光卿憂国ノ至誠ニ堪ヘ玉ハス、奮然上疏  
シ玉フモノ凡ソ十四条、嗚呼悉ク明体適用ノ事旨、実  
ニ方今世ヲ匡スノ緊要是ヨリ大ナルハ無シ、見ル者以  
テ誰カ感激仰欣セサラン、然シテ其条旨惟其枢要ヲ挙  
ケ、約シテ以テ未タ其蘊奥ヲ詳ニセサルカ故ニ、其意  
味深長ナル者童蒙未タ貫通セサルアラン、於レ是乎予  
自ラ揆ラスシテ窃ニ聞ク処ヲ述テ以テ註釈トシ、之ヲ  
童蒙ニ示シ、惟々

卿ノ賢明愈々崇奉敬服スヘキヲ知ラシメハ、庶幾クハ  
世ニ少補アラント云レ爾、

明治五年冬十月

和田正道謹自題

至尊御学問之事

愚窃ニ按スルニ、凡ソ

天子ノ道其最モ要ナル者ハ、古ノ聖学ヲ講習シ、善惡  
ノ帰ヲ明ニシ、忠邪ノ分ヲ弁シ、晬然トシテ道ノ正ニ

趨カセ玉フニ在リ、故ニ

天子ノ志先ツ定ルニ在リ、

天子ノ志先ツ定テ而シテ後天下ノ治成ル也、所レ謂志

ヲ定ルトハ心ヲ一ニシ、意ヲ誠ニシ、善ヲ択ンテ固ク

之ヲ執ルヲ謂フ也、然シテ義理先ツ尽サ、レハ、則多

ク聞テ惑ヒ易シ、志意先ツ定ラサレハ、則善ヲ知テ或

ハ変ス、是ヲ以テ惟聖人ノ訓ヲ以テ必スマサニ従フヘ

シトシ、先王ノ治ヲ以テ必ス法トルヘシトシ、当世狡

黠ノ説ニ牽制セラル、ヲセス、流俗詐偽ノ論ニ遷惑セ

ラル、ヲセス、自ラ知ルコト明ヲ極メ、自ラ信スルコ

ト篤キヲ極メ、賢ニ任シテ疑フコトナク、邪ヲ去テ顧

ルコトナカルヘキ也、然シテ天下ノコト患ヒ、常ニ忽

微ニ生シテ志モ亦漸習ニ戒ム、是故ニ古ノ賢君起居出

入左右前後、必ス直臣正士ニ非サルハ無シ、是レ其德

業ヲ成ス所以ノ具也、仰キ願クハ今

天子親ク老鍊高德ノ師儒及ヒ方正剛直ノ貴卿ニ礼命シ、

師傅保ノ職ニ任セシメ、日ニ親ミ篤ク信シ、常ニ君道

ヲ講磨シ、政事ヲ講論シテ、以テ

聖徳ヲ輔養セシメ玉フヘシ、然トモ今也

国朝靡然トシテ日ニ洋夷ノ卑説ニ溺レ、道義ノ学既ニ

地ニ墜チ、礼義行ハレス、廉恥立サル也、是レ恐クハ

方今ノ

朝廷徳ヲ尊ヒ、道ヲ樂ムノ風已ニ喪ヒ、道德・仁義ノ

教終ニ壞レハ也、於レ是乎断然夷習ヲ掃ヒ、惟聖人ノ

訓ヲ稽ヘ、先王ノ治ニ法トリ、心ヲ一ニシ意ヲ誠ニシ、

乾ノ剛健ヲ体シテ之ヲ力行シ玉ハ、則

聖智益々明ニ、

王猷允ニ塞リ、天下億兆亦修治セン、古人云、君ハ臣

ノ綱也、君正ケレハ則臣正シ、未タ綱ヲ正フセスシテ

能ク其目ヲシテ正シカラシムル者アラス、然レハ則人

君苟モ自ラ乱レハ、則安ソ能ク其臣ヲシテ治ラシメ

ンヤ、

立ニ国本ニ張ニ綱紀ニ事

愚窃ニ按スルニ、国本ヲ立ルトハ、



皇国ノ本体ヲ建立スルヲ謂フ也、夫レ

皇国ノ本体ハ、則

神聖統ヲ垂レ、万古革命ナク、綱常明カニ彝倫正シク、節義ヲ崇ヒ、廉恥ヲ重ンシテ以テ其

国体ヲ立、民心ヲ維スル、正ニシテ且大ナル者ニシテ其本体固ヨリ万国ニ比倫ナキ也、然トモ今也

皇道衰微ニシテ夷説方ニ熾ナリシヨリ、竟ニ夷ヲ以テ

皇ヲ乱リ、以テ国本ヲ傾敗スルニ至レリ、是ヲ以テ更

ニ紀綱ヲ張り、以テ

皇国ノ基礎ヲ確立スヘキヲ謂フ也、紀綱ヲ張ルトハ綱ハ網ノ大繩、紀ハ網中糸縷ノ目ニシテ其大ナル者ヲ張り、其小ナル者ヲ治ムルヲ謂フ也、夫レ

朝廷ノ政其大綱ナルハ、君臣ノ礼ヲ正フスルヨリ大ナ

ルハ無シ、君臣ノ礼正シテ以テ貴キヲ貴ヒ、重キヲ重ンシ、上下道立チ輕重分定ル也、上下道立チ輕重分定

ツテ以テ王道修明、国治リ天下平ナルヘキ也、

定ニ服制ニ蔽ニ容貌ニ事

愚窃ニ按スルニ服制容貌ハ、貴賤ノ品ヲ分チ、

皇夷ノ弁ヲ蔽ニシ、上下輕重ノ別ヲ明ニスル所以ニシ

テ、国務ノ要典、人治ノ大經、最モ忽諸ニスヘカラサル者ト謂フヘシ、是故ニ古ヨリ聖賢之ヲ重シ、秩然トシテ序アリ、截然トシテ制アリ、以テ人類ノ差等ヲ判

別スル処也、然シテ今也衣冠容貌悉ク旧典ヲ破リ、貴賤等ナク上下分ナキノミニ非ス、甚シキ者ハ醜夷ノ服

ヲ着シ、醜夷ノ冠ヲ被リ、醜夷ノ劍ヲ帶ヒ、醜夷ノ杏ヲ履キ、雜然トシテ

皇夷貴賤ノ分ヲ乱ルニ至レリ、然シテ上

天子ヨリ下庶人ニ至リ、恬然トシテ之ヲ用テ恥トセス、群然トシテ之ニ由テ憂トセス、嗚呼既ニ名分大義地ヲ掃ヒ、礼制淆乱シテ以テ

皇夷ノ弁ヲ蔽ニスルノ大經大法蕩然磨滅スルニ至レリ、

是故ニ痛ク禁革ヲ加ヘ、儼然

皇国ノ容儀衣冠ヲ整正シ、内ハ貴賤ノ品級ヲ明ニシ、

外ハ

皇夷ノ判別ヲ嚴ニシ、以テ尊キヲ貴ヒ、卑キヲ賤シテ、  
皇ヲ内ニシ、夷ヲ外ニスルノ大分限ヲ確明ニシ玉フヘ  
キ也、

### 正ニ學術ニ事

愚窃ニ按スルニ、古ヨリ学校ヲ設、オヲ養ヒ、士ヲ造  
ス者必ス聖賢教學ノ道ヲ以テセリ、然シテ聖賢教學ノ  
道ハ則忠信ヲ主トシ、礼義ヲ先ンシ、徳業純一言行相  
応シ、經国ノ大才ヲ養成センコトヲ要スヘキ也、然ト  
モ方今既ニ聖道衰微、夷学横流、

朝廷ノ上学校ノ中駸々然トシテ之ニ陷溺シ、奇技淫巧、  
其性分ノ外ニ出ルヲ知ラス、反テ一種巧妙ノ学トシ、  
流俗大ニ之ヲ主張シテ

皇朝ノ正学ヲ雜乱スルニ至レリ、亦方今ノ一大患ト謂  
フヘシ、是ヲ以テ更ニ学政ヲ一掃シ、

皇道ヲ興復シ、最モ高踏ノ士、學術大ニ明ニ徳義尊フ  
ヘキ者ヲ礼ヲ厚フシテ延聘シ、以テ天下ノ教ヲ統ヘ、  
盛ニ正学ヲ講明シ、所レ謂洋学ノ如キ唯技芸ノ末流ニ

於テハ則チ之ヲ余力ニシテ可也、彼モ亦長スル処ナキ  
ニシモ非スト雖トモ、畢竟商工ヲ專トシ、姦智ヲ養フ  
テ以テ利欲ヲ逞フスルノ尤道ニシテ、固ヨリ禽獸ノ種  
類ニシテ、人類ニ遠カルコト亦言フニ足ラス、假令ヒ  
砲艦ノ如キ長処アリト雖トモ、固ヨリ真善ノ道具ニ非  
ラス、断然用ヒスト雖トモ亦可也、宜ク其利害<sup>得</sup>得喪、  
是非邪正ノ弁ヲ嚴明ニシ、純正ノ道学ヲ盛大ニシ、天  
下億兆ノ学者ヲシテ悉ク道德ヲ修メ、風俗ヲ正フスル  
ヲ以テ最モ急要トシ玉フヘキ也、

### 慎ニ人材ニ事

愚窃ニ按スルニ、凡ソ治ヲ為スノ要ハ則人ヲ用ルヨリ  
先キナルハナシ、然シテ人ヲ知ルハ聖賢モ難シトスル  
処也、故ニ之ヲ毀譽ニ求レハ、則愛憎ニ出テ以テ善惡  
混淆ス、之ヲ功状ニ考レハ、則巧詐横生シテ以テ真偽  
相冒ス、其本ヲ要スルニ至<sup>公</sup>至明ニ在ルノミ、慎マス  
ンハアルヘカラス、夫レ一君子ヲ進レハ則衆君子進ミ、  
一小人ヲ進レハ則衆小人進ミ、此レ治ヲ致ス者必人ヲ

用ルニ慎ム所以也、易曰、鼎折足覆公餗其形渥凶ト、今也上

朝廷ヨリ下府県ニ至リ、小人卒爾ニ登庸セラレ、素ヨリ其任ニ堪ヘスシテ政ヲ乱リ国ヲ誤ル者、猶鼎ノ足ヲ折ルカ如キ也、古ノ人君ハ必ス能ヲ量リ徳ヲ度リ、然シテ後其官ヲ授ケ、人臣モ亦自ラ力ヲ量リ徳ヲ省ミ、然シテ後其任ヲ受ク、百工胥吏ト雖トモ猶然リ、況ンヤ大臣重職ヲヤ、君ト為テ人ヲ扱フニ明ナラス、臣ト為テ自ラ扱フニ審ナラサレハ、必ス自ラ亡シ、国ヲ誤リ天下ヲ乱ルニ至ル、皆其任ニ勝ヘサルノ故ニ由ル也、人臣自ラ扱フニ審ナラサルハ一身一家ノ禍ノミ、人君人ヲ扱フニ明ナラサレハ、則其禍豈タ、一身一家ノミナラン、上ハ以テ

祖宗千載ノ基業ヲ敗リ、下ハ生靈億兆ノ身命ヲ戕ヒ、国天下ヲ乱ルニ至ラン、昔シ漢土宋ノ神宗、韓琦・富弼ヲ捨テ、王安石ヲ用ヒ、祖宗ノ旧法ヲ変革シテ以テ靖康ノ禍乱ヲ馴致スルカ如キ、是レ其明驗ナランカ、

謹ニ外国交際ニ審可レ弁ニ彼我之分ニ事

愚窃ニ按スルニ、古ヨリ

皇夷ノ弁儼然トシテ經史ニ了々タリ、夫レ

皇国ノ夷狄アルヤ猶君子ノ小人アルカ如シ、君子ヲ内

ニシ、小人ヲ外ニスルヲ泰トス、小人ヲ内ニシ君子ヲ

外ニスルヲ否トス、然トモ今也

皇道既ニ衰ヘ、夷狄勢ヒ猖獗、竟ニ

国朝ニ入テ雜居シ、蹄輪相交リ、室廬相望ミ、混然ト

シテ

皇夷ノ弁アルヲ知ラサルニ至レリ、交際ハ止ムヲ得サ

ルニ出ルト雖トモ、猶

皇夷ノ弁ニ於テハ則益々之ヲ敵ニシ、彼我ノ分ヲ明ニ

シ、之ヲ待ツニ誠信ヲ以テシ、之ニ交ルニ礼義ヲ以テ

スヘシ、誠ノ言タル真実無妄ノ謂ニシテ、仮初ニモ危

疑ヲ抱キ、其言ヲ夸大ニシ、其事ヲ侈耀ニシ、虚偽ヲ

為サスシテ聴ク者情ニ感シ、心ニ悦ヒ誠ニ服スルヲ要

スルナリ、礼ノ言タル節文儀則ノ謂ニシテ彼我ヲ弁シ、

内外ヲ定メ制度ヲ立品節ヲ設ケ、截然トシテ威アリテ  
犯スヘカラス、秩然トシテ儀有テ紊ルヘカラサルヲ要  
スル也、是古今華夷綏和ノ常典ト謂フヘシ、

### 振興兵氣ニ正軍律ニ事

愚窃ニ按スルニ凡ソ良將ノ軍ヲ統ルヤ、己ヲ恕シテ人  
ヲ治メ患ヲ推シテ恩ヲ施シ、接スルニ礼ヲ以テシ、勸  
ムルニ義ヲ以テセハ則自然ニ兵氣日ニ振興シ、戦ヘハ  
勝チ攻レハ取ルノ勢ヲ得ヘシ、然トモ今兵ヲ設ケ隊ヲ  
立ルヤ、或ハ英式ニ倣ヒ或ハ仏式ニ依リ、悉ク醜夷ノ  
糟粕ヲ墨守シ、戎衣法律ノ制ヨリ隊伍進退ノ節ニ至リ、  
一般彼カ説ヲ主張シ徒ニ形ヲ以テ彼ニ猥倣シ、兵家ノ  
所レ謂為ニ人<sub>ノ</sub>所<sub>ヲ</sub>致モノニテ、固ヨリ实用エ供スルニ足  
ラス、殊ニ無稽ノ甚シキ者ハ惟烏合ノ兵ヲ驅ルノミナ  
ラス、兵ヲ落シテ卒トナシ、之ヲ視ルコト犬馬ノ如ク  
苛法ヲ以テ之ヲ虐ス、故ニ亦卒ノ將ヲ視ルコト寇讎ノ  
如ク怨讎既ニ起リ、離叛亦興ントス、豈患ヘサランヤ、  
是ヲ以テ更ニ

皇漢洋ノ良法ヲ折衷シ、適宜ノ軍政ヲ設ケ、専ラ士卒  
ヲ愛遇シ、法律ヲ嚴明ニシ、号令ヲ整正シ、必ス己レ  
ニ得テ事ニ施シ、身ヲ率テ衆ヲ励シ、上ハ殊恩ヲ降シ  
軍威ヲ示シ、下ハ赤心ヲ推シ忠奮ヲ尽シ、以テ王室ノ  
干城トナルヲ要スヘキ也、

### 明貴賤之六分ニ事

愚窃ニ按スルニ、天ハ上ニアリ、沢ハ下ニ在ルハ天地  
自然ノ象ナリ、故ニ人道モ天地ノ象ニ奉ケ順ヒ、尊ハ  
以テ賤キニ臨ミ、下ハ以テ上ニ奉シ、然シテ後貴賤上  
下ノ分確然相定リ、君民相保チテ以テ国家治安ス、然  
トモ今ノ  
朝也制度日ニ紊レ、紀律月ニ壞レ、車馬ヲ見ルニ貴賤  
ヲ弁セス、衣冠ヲ見ルニ尊卑ヲ知ラス、衆庶公律ニ陵  
侮シ、  
皇威下ニ移リ乾綱紐ヲ解キ、正名ノ典蕩然トシテ地ヲ  
掃フニ至レリ、是故ニ更ニ品級ヲ定メ、儀則ヲ制シ、  
儼然貴賤ノ分ヲ明ニスヘキ也、

遠利欲ニ重節義ニ退詐術ニ貴誠実ニ事

愚窃ニ按スルニ、凡ソ天下ノ道ハ二ツ唯義ト利トノミ、  
 義ハ天理ノ本然、利ハ人欲ノ邪穢、所レ謂利欲ヲ遠ル  
 ハ天理ヲ存スルノ謂也、節義ヲ重ンスルハ人欲ヲ遏ム  
 ルノ謂也、又政事ノ道二ツ詐ト誠トノミ、詐ハ人ノ術  
 覇政ノ方法、誠ハ天ノ道王政ノ本体、所レ謂詐術ヲ退  
 ルハ姦ヲ掃フノ謂也、誠実ヲ貴フハ政ヲ正フスルノ謂  
 也、今也官吏陰詐ヲ専ニシテ以テ利門ヲ張り、唯身ノ  
 為メニ謀テ国ノ為メニ尽サス、凡ソ利ニ就キ義ヲ去ル  
 ハ小人ノ常也、利己レニ在レハ人ニ利セスト雖トモ之  
 ヲ為ス、家ニ利アレハ国ニ利ナシト雖トモ之ヲ為ス、  
 今世頗ル如レ此宜ク紀綱ヲ正フシ制度ヲ嚴ニシテ以テ  
 頽俗ヲ一掃シ玉フヘキ也、

嚴ニ禁淫乱ニ明ニ男女之別ニ事

愚窃ニ按スルニ、凡ソ風俗ヲ乱リ典常ヲ敗ルノ弊ハ、  
 淫乱ヨリ大ナルハ無シ、淫乱ハ酒色ヨリ甚シキハ無シ、  
 酒色ニ耽レハ則放肆横乱宴安逸樂、竟ニ綱常彝倫ヲ欠

クニ至ラン、今

朝廷ノ習俗酒色ヲ恣ニシ淫佚ニ走り、甚シキニ至テハ  
 父母妻子ヲ遺シ、相競フテ以テ市井無頼ノ妓娼ヲ愛恋  
 シ、或ハ自ら迎ヘテ妻ニ易ヘ或ハ妾トシ、愛玩不法ニ  
 シテ閨門ノ常ヲ紊リ、物情離怨ヲ生シ、既ニ恩愛ノ情  
 ヲ壞リ、意ニ偏愛嫉妬ヨリシテ父子相離レ、夫婦相戕  
 フノノ禍害ヲ醸スニ至ンコト豈果然ナラサランヤ、是  
 故ニ痛ク法制紀律ヲ嚴正ニシ、以テ禁革ヲ加フヘキ也、

開ニ言路ニ事

愚窃ニ按スルニ、言路ヲ開クハ、  
 王政ノ要道治安ノ原太平ノ基此ニ在ル也、虞舜ハ誹謗  
 ノ木ヲ設テ以テ帝徳広シ、晋文ハ輿人ノ誦ヲ聽テ以テ  
 覇業興リ、又大雅ニ芻蕘ニ詢フノ言アリ、洪範ニ謀庶  
 人ニ及フノ言アリ、是レ則聖賢治ヲ成ス、務メテ衆心  
 ニ詢ヒ、敢テ細微ヲ忽ニセサル処アリ、今ノ

朝也姦惡有テ賢明ヲ畏レ、正言ヲ忌ミ専ラ言路ヲ塞キ、  
 聖明ヲ蔽ヒ政權ヲ擅ニセント欲ス、国家ノ弊患是ヨリ

大ナルハナシ、是故ニ言路ヲ塞クノ姦邪ヲ掃ヒ、普ク士庶人ヲシテ上書直言ヲ競ハシメ、衆思ヲ集メ忠益ヲ広フシ、

皇猷ヲ弘闡シ鴻業ヲ更張シ玉フヘキ也、

### 慎ニ獄ニ正ニ賞罰

愚窃ニ按スルニ、獄獄トハ訴訟ヲ聽断シ、情法ヲ評決スルヲ謂フ也、ソレ獄ヘヲ聴キ法ヲ議スルハ政道ノ重典ニシテ、聖賢深ク之ヲ告戒スルアリ、故ニ法官ハ殊ニ意ヲ公ニシ心ヲ正フシ、道ヲ直フシ状ヲ明ニシ、上ニ冤獄ナク、下ニ冤民ナク、上下俱ニ憾ミ無キヲ要スヘキ也、然シテ賞罰ハ国家ノ大典、所レ謂紀綱是レ也、苟モ賞ヲ施スニ功アル者ニ及ハス、功ナキ者ニ濫リニスル時ハ賞勸ムルニ足ラス、罰ヲ行フニ罪ナキ者ニ及ヒ、罪アル者ニ失スル時ハ罰懲スニ足ラス、凡ソ賞罰ノ典、必信ヲ貴ヒ嚴明ヲ專ニスル者、上ハ以テ殊恩ヲ降シ威命ヲ示シ、下ハ以テ赤心ヲ尽シ畏敬ヲ專ニシテ紀綱張り、政事整フヘキ也、今也賞罰ノ典亦夷法ニ倣

フノミナラス、法吏其人ニ非ラサルヲ以テノ故ニ、議処当ヲ失ヒ、横恩濫冤少カラストス、豈憂痛セザランヤ、是故ニ法官ヲ精フシテ以テ法典ヲ正フシ、監官ヲ扱フテ以テ賞格ヲ貴フシ玉フヘキ也、

### 輕レ租薄レ斂事

愚窃ニ按スルニ、凡ソ乱ヲ致スノ道多シト雖トモ、重斂横稅ヨリ甚シキハ無シ、稅ヲ重クシ斂ヲ厚フスレハ則民ノ貧キ者何ヲ以テ命ニ堪ンヤ、貧キ者以テ命ニ堪ルコト能ハサレハ、則民其死ヲ惜マズシテ衆ヲ集メ党ヲ結ヒ、億兆潰叛スルニ至ラン、豈慎マサルヘケンヤ、然トモ今ノ

朝也聚斂ノ臣下ヲ剝シテ上ニ媚ヒ、誅求漁奪日ニ甚シク、嗟乎編戶市井ノ細民、何ヲ以テ命ニ堪ヘ生ヲ保ンヤ、然レハ則タ、民以テ生ヲ保ツヘカラサルノミニ非ラスシテ、国モ亦以テ国タルヘカラサラシ、是ヲ以テ断然之ヲ禁革シ、更ニ官府薄ク取テ用足ルノ政ヲ施シ玉フヘキ也、必竟夷說ノ熾ナリシヨリ貪官汚吏猥ニ侈

大富溢ノ異政ヲ主張シ、費出経ナキノ致ス処ナリ、思ハサルヘケンヤ、

詳量ニ出納ニ事

愚窃ニ按スルニ、古人云、地力ノ物ヲ生スルヤ大数アリ、人力ノ物ヲ成スヤ大限アリ、之ヲ取ルニ度アリ、之ヲ用ルニ節アレハ則常ニ足ル、之ヲ取ルニ度ナク、之ヲ用ルニ節ナケレハ則常ニ足ラス、物ヲ生スルノ豊敗ハ天ニ由ル也、物ヲ用ルルノ多少ハ人ニ由ル也、是ヲ以テ先王程ヲ立量レ入為レ出ト云、如レ此ナレハ則假令舊難ニ遇フト雖トモ下困窮スルナシ、然トモ治化既ニ衰レハ則之ニ反セリ、夏桀ハ天下ヲ用テ足ラス、商湯ハ七十里ヲ用テ余リアリ、是乃チ用ノ盈虚唯節スルト節セサルトニアルノミ、節セサレハ則盈ルト雖トモ必ス尽ク、能ク節スレハ則虚ト雖トモ必ス盈ツ、是レ誠ニ国用ヲ制シ国計ヲ為スノ大經大法ト謂フヘシ、今也一般夷法ヲ尊ヒ修大富溢ノ政ヲ主張セシヨリ、王政量レ入為レ出ノ良法ヲ謂テ反テ迂儒ノ常論トシ、妄費溢出

ノ暴政ヲ謂ツテ雄偉ノ活法ナト、自称セリ、固ヨリ不学無識ノ官吏、天下ノ務メヲ知ラサルノ致ス処、豈亦憂ヘサルヘケンヤ、

冊子原寸 縦二七種 横二〇種 二八枚

一書 愚案二冊

筆者不明

貿易通商ノ本義ト米価ノ高低ニ就テ

一九五〇ノ一

(表紙)  
「愚案」

米価ノ下直ハ下民營生ニ易ク、活計ニ安穩ナリト昔ヨリ云伝フレドモ、当春以来世上ノ形勢ヲ見聞スルニ、諸商売トモ人氣寐入テ引タ、ス、甚タ不景氣ナリ、之ヲ以テ見レハ、米価ノ安キハ放蕩遊惰ノ者ニハ便利ナレトモ、精力勉勵ノ民ニハ由断ヲ醸シテ、動モスレハ懦弱ニ導カル、ノ弊ヲ生スルナリ、昔ヨリ米価高ケレハ人民困窮シ、安ケレハ安堵スト云ヘルハ、全稲作豊熟ナレハ食物潤沢

ニシテ人民安堵シ、凶作ナレハ不足ヲ患ヒテ困窮スト云  
意ナリ、豊作ニハ直段安シ、凶作ニハ高シ、然ルニ下民  
ノ横着心ヨリ、稲作ノ豊凶ヲ云スシテ、只直段ノ高安ノ  
ミヲ云シナルヘシ、既ニ凶作ヲ恐レ、之ヲ困苦スルハ上  
下同一ナレトモ、直段ノ安キハ上下共ニ弊害アリ、米価  
ノミ下直ニシテ外品ト不釣合ナルハ、実ニ上下ノ大害ニ  
シテ、其弊計リ算フヘカラス、上ノ歳入ハ米ノ一品ニシ  
テ、歳出ハ千種万様ト成ル、一品ノ米下直ナレハ万種ヲ  
償フニ足ラス、上ノ足サルハ下民ノ力為ニ租税ヲ増納メ  
サルヲ得ス、此時ニ方リテハ、下民モ亦此不釣合ニ因テ  
一切ノ業事不繁昌ノ折ナレハ、亦如何トモ為スヘカラス、  
尤米ヲ除キテ他物ニ価ノ不平均ハ、人ノ氣勢ヲ引立テ大  
ニ融通ヲ増シ、助ルコトナレハ、欧米ノ説ノ如ク都テ物  
価ノ自然ニ任セルコト至当ノ理ナレトモ、特リ米価ノ不  
釣合ニ於テハ、高安トモ補助ノ道無ンハアラス、欧米各  
國ノ如キハ、商税ヲ以テ國ヲ立テ、又食物モ異ナレハ、  
米麦ノ熟不熟ハ深く上ニ關係セサル道理ナレトモ、我國

ハ、農収ヲ以テ歳入ノ本トシテ、米麦ヲ以テ食物ト為ル  
コトナレハ、之カ熟不熟ハ人民ノ生命ニ罹リ、又上ノ會  
計ニ關係スル全國ノ一大事ナレハ、米価ノ至テ高キト安  
キトハ、上下心ヲ一ニシテ必ス補助ノ方ヲ立サルヘカラ  
ス、今此理ヲ以テ上ヘ歎キ懇フルハ、条理無キニ似タレ  
トモ、下民ニ於テハ之カ法ヲ確立スル能ハス、且準備ノ  
事ヲ知リツ、モ、衆議ノ此ニ及ハサルコトハ、猶往還ノ  
道スチノ如ク、己レ一人ノ与ルコトニ非ス、天下衆人ノ  
為ナレハ、荏苒トシテ消光スルノミ、是故ニ官ニ忠告シ  
テ愛憐ヲ希フ外ハ、更ニ方法無キコトナリ、  
米麦ノ高直ハ必ス凶作ニ因テノコトナレハ、之ヲ救フニ  
外國ヨリ買入レハ足スヘシ、然レトモ此時ニ臨ミテハ、  
貧民ノ心勞殊ニ甚シク、諸業ニ響キ一体ノ衰微ニ至ルナ  
リ、故ニ凶作ノ手当ハ豊作ニアルコト勿論ナリ、然シテ  
午未ノ兩年ハ大豊作ナリ、又今年モ相應ニ上作ノ由ナリ、  
人ノ食料都下村落ノ別アリテ、農家ハ昔ヨリ穀物ニ雜物  
ヲ交ヘ食フヲ平常トシテ、幼稚ヨリ之ニ習ヒテ苦シムコ



ト無シ、然レトモ道理ヲ論スレハ戻レルニ似タリ、夫レ上下億兆ノ人勞シテ后ニ衣食ヲ得ルハ天下ノ通義ナリ、然ルニ特リ農ノミ勞力他ニ過テ、衣食ハ反テ他ニ劣レリ、何ヲ以テ如是ナルヤ、或人ノ説ニ云、是古風ノ存セルモノニシテ、則歐米ニ所謂農ハ、分業ノ法ヲ用ル能ハサルヲ以テノ故ナリト、此言実ニ然ルヘシ、然レトモ勞力他ニ過テ衣食他ニ劣ルコト、天下ノ道理ニ於テ中ラサル所ナリ、今也開化文明ノ秋ニ方リテ、依然トシテ旧ヲ守リ、固執シテ変更無キトノミ思フハ、思ヒノ足サルナリ、自然ノ時節来レハ、歐米ノ国々ニ於テハ黒奴カ人間ニ蘇生シ、我國ニ於テハ穢多・非人ノ稱ヲ廢セラレ、平民ニ苗字ヲ許サセラレシ等ノコトニ至ルナリ、之ヲ以テ見レハ、辺鄙山野ノ土地マテモ日新ノ化ヲ被リ、従来ノ陋習ヲ大ニ変更スルニ就テハ、先ツ衣食ヨリ始マルヘキナリ、遠国農業ノ食物ニ変更セシヤ否ハ知サレハ、暫ク之ヲ闕キ、近国ノ事ヲ伝聞スルニ、十年前マテハ食ニ奢レリト衆人ノ云ヘリシハ、麦七分・米三分ノ雜飯ナリ、漸々米

ヲ交ルコト多ク、一昨年頃ハ米五合ニ麦五合ナリシカ、昨年ヨリ米七合・麦三合ト成シナリ、尤算当ヲ見レハ山谷原野ニ近クシテ、柴薪ニ乏シカラサレハ、聊ニテモ麥ヲ交ル方徳用ナレトモ、柴薪ニ乏シキ場所ニテハ、聊麥ヲ交ルヨリ米ノミヲ食フ方便利ニシテ且徳用ナリ、畜此算当ノ損徳ノミニ非ス、全クハ寒暑ノ候ヲ厭ハス、自カラ勞力シテ耕耘セシコトナレハ、須臾モ此勞力ヲ忘レス、自カラ憐レミ、自カラ愛ムカ故ニ、收穫シタル米麥ハ一身ノ宝ト尊重シテ苟且ニ費耗セス、是亦人情ノ然ル所ナリ、方今諸物価米価ノ鈞合悪ク、米ノミ下落スルヲ以テ衆人米ヲ蟲略ニ思フコト古来未タ聞サルナリ、今時ニ若シ米ハ人間生活ノ本ニシテ、食用第一ノ品ナレハ、凶作ノ手当無シハアラスト論ヲ立レハ、忽チ流行ニ後レ時勢ヲ知サル徒ト訾笑セラル、ノミニテ、一体ノ人氣カ金ニノミ偏倚リテ、米ノ有無多少ニハ着意セサルコトニ押移リシナリ、既ニ海外へ輸出又ハ米穀ヲ以テ油ヲ絞ルコト、又田畑ニ

ハ成タケ穀類ノ作り方ヲ減セヨトノ仰渡サレ等ヲ、仮リニ農家ト成テ之ヲ考レハ、目前直段ハ安シ、従来宝トモ思ヒシ米穀ハ衆ニ嫌ハル、如クニテ、俗ニ云ほろなえガシテ自カラ捨ルニ忍ヒス、吾モ亦吾力ヲ食フヘシト、米麦ヲ食用スルニ至レルモ自然ノ勢ナリ、一度美味ニ箸ヲ下セハ、再ヒ雜物ハ食フニ堪ス、之ヲ日月ニ慣習シテ、タトヒ常食ニスト雖モ、自身耕耘シテ作ル所ノ品ナレハ、他ニ求ルニ及ハスシテ、之ヲ食フニ難カラス、是ヲ以テ兼テ尊重ノ意モ薄ラキ、往々全国人民ノ常食トナルモ、全ク開花ノ初歩ニシテ、農ノ勞力シテ衣食ノ美ヲ服スル時ノ至来ト云ヘキ歟、

米ハ食用第一ノ品ナレハ、此品無レハ忽チ死ヲ免レスト雖モ、多ケレハ又之ヲ持困フニ困ルナリ、嵩高ニシテ腐敗シ易キ品ナレハナリ、是ニ因リテ豊作続ク時ハ、直安ナリト知リツ、モ、眼前飢餓ノ患ヒ無レハ、買持スル者無ク、若シ凶作ト見ル時ハ、忽チ生命ニ拘ハルヲ思ヒテ、面々ニ争ヒ競ヒテ、直段ニ拘ハラス一時過分ニ買困ント

ス、此機ニ臨メハ狡猾ノ商人等己レカ利ヲ得ン為、人氣ヲ煽動スルニ至ルナリ、然レトモ従来農家ニ蠱雜ノ品ヲ交ヘ食セシヲ以テ、自然ニ他ノ不足ヲ補ヒシカトモ、方今ノ如ク農家一旦米麦ヲ食フコトニ馴レシ後、若凶作ニ遇フコトアラハ、従来ノ振合ト大ニ違フコトアルヘシ、昔ヨリ豊凶ニ定リ無キ稻米ヲ以テ、人間生活ノ本トスルコトハ、全人民ヲシテ事業ニ怠惰無ラシメン為、単ヘニ勉強ヲ勸メタマフ天意ナルヘシ、故ニ非常ノ凶作ヲ思ヒテ、之カ準備ヲ為シコトナリ、今也海外諸国ト通商アルヲ以テ、昔ノ如ク凶作ニ因テ餓死スルコトハ決シテ有マシケレトモ、凶作続キテ外国ヨリ米麦ヲ買入ル、コトトナレハ、之カ為全國下民ノ業、大ニ衰微スルニ至ルヘシ、既ニ巳午兩年ニ外国米ノ来リシハ、我國至極高直ノ時ナリ、昨年・今年輸出ナルハ、是亦近年ノ所ニテ至極下直ノ時ナリ、手近ク之カ算ヲ見テモ夥シキ損失ナリ、右來歴ノ実地ヲ徴スルニ、近ク甲子以來ノコトヲ回顧セハ、其概略ヲ知ルニ足ルヘシ、甲子ノ年ヨリ己巳ノ年マ

テハ、全国平均シテ欠作ナレトモ、全国ノ人民飢餓ノ為ニ死亡セシコト無シ、是国々農家ニ雜食シテ、自然ニ他ヲ補ヒシニ因テナリ、一昨庚午ノ年ハ豊作ナリ、昨年未ノ年ハ五十年来例シナキホドノ大豊作ナリ、其上諸藩從來ノ准備米ハ払ヒ出シトナリシナリ、故ニ甲子ヨリ己巳ノ際タノ割合ヲ以テ、午未兩年ノ豊作ト諸藩払米ト合算スレハ、今申年ハ麦米トモ、タトヘ一粒ノ出来作ハ無クトモ、明酉年新穀秋入マテ人民ノ食用ニ不足無キコトニ思ハル、道理ナリ、然ルニ今申年モ全国凡平均ヲ聞クニ、豊作ニハ至ラサレトモ麦米トモ上作ナリ、然シテ今年止<sup>上</sup>納ノ模様ヲ聞クニ、過半金納ナリ、然レハ今年ハ新穀初登ヨリ、俗ニ云、米の山米はらノ勢トナルヘキニ、反テ新米ノ出方多カラス、是ニ因テ見ル時ハ、昨年・一昨年ノ両豊作ノ米穀ハ、世間ノ蠱略ニ習ヒ覚ヘス知ラス、農家ニ於テモ俱共ニ喰減セシナリ、然ルニ非レハ今冬ハ阪府ハ固ヨリ諸国ニ於テ、從來米商繁昌ノ場所ハ、実ニ米の山ヲ成スコト必セリ、然シテ塵芥ノ如キ取扱ヒト成ル

ヘカリシナリ、

当申年ハ昨年ニ校フレハ、反別ニ付凡膏俵ツ、取劣リノヨシナリ、全国田数式千万反ト見テモ、之ヲ算スレハ則チ式千万俵、此石高八百万石ノ減ニアタルナリ、此算当ヲ深ク思ハサルヘケンヤ、

明治五申十月

冊子原寸 縦二七種 横一九種 一〇枚

一九五〇ノ二

(表紙)

「愚案」

外国ト通商貿易セハ、内外ノ人民互ニ利益トナルヘキコト既ニ諸書ニ審カナレハ、贅言スルニ及ハサレトモ、我國ハ昔ヨリ貿易ノ為メ海外諸国ヘ航行為サリシ故、未タ貿易ノ道理ニ委シカラス、故ニ貿易ト云ヘハ只引取・売込ニ携リ、渡世スル者而已ノ業ナリト、疎忽ニ貿易ノ名ヲ看過セシ下民甚タ多シ、夫レ外国通商ハ、我國ノ物品

ト外国ノ物品ト貿易スル大業ナリ、此大業開クルニ就テ、  
我国従来所有ノ物品ニ自カラ有る不足ヲ生シ、此響キ一  
切ノ事業ニ押移リ、相共ニ一時ハ不平均ノ弊害ヲ被ラサ  
ルヲ得ス、然レトモ習熟ノ久シキ、遂ニハ適宜ノ平均ヲ  
得テ、所謂彼我共ニ大利益ヲ被ルニ至ルヘキナリ、是故  
ニ全国ノ人衆ハ士農工商ノ別無ク均シク貿易中ニ優遊シ  
テ、相共ニ不知不識事物ヲ融通シ、便利ヲ相達スルノ人  
ナリ、唯ノ人モ此大体ヲ知ラスンハアラス、故ニ此業ニ  
於ル特ニ商売ノミノ掌ル所ニ非ス、況ヤ僅少ナル貿易商  
人ト称スル者、此大業ヲ進退スヘキニ非ス、従来此弁ニ  
暗ケレハ、開港後数年ニ及ヘトモ、未タ新ナル人造物ヲ  
以テ彼方へ輸出セシコトヲ聞カス、是貿易ノ名ニ酔テ実  
ヲ過チタルカ故ナリ、

マテニテ、濟シコトモ有レハ、欲シク成テ各喜ヒ好ム所  
ヲ生シ、之ニ易ルニ前々ヨリ有るノ品有テ、積ミ蓄ヘシ  
コトニ非レハ、此代リ品モ彼レカ喜ヒ好ム所ヲ新ニ調ヘ  
サルヲ得ス、是故ニ生糸・蚕種紙・茶其れ余追々増殖スル  
コトトナレトモ、彼レモ亦随テ新製ノ物品ヲ月ニ日ニ齎  
シ来ル、是ヲ以テ我国ニ物品ノ増殖スルコト従来ニ倍蓰  
シテ全国ノ繁昌ナルヘキニ、貿易ノ道理ニ暗ク、其大意  
ヲ過チシヲ以テ開港後数年ニ及ヘトモ、今ニ全国農工商  
賈ノ事業ト未タ至当ノ平ヲ得ル能ハス、加之奸民有テ俗  
ニ云どかもふけスルコトアリ、之ヲ見テ良民ハ反テ業ニ  
進ムヲ得ス、遂ニ褒貶地ヲ易ヘ良民ヲ指テ因循者ト謗リ、  
奸民ヲ見テ奮発者ト称スルコトトナレリ、故ニ下民ノ業  
自然ト偏頗シ、諸物価ニ不平均ヲ生シ、殊ニ甚シキハ、  
米価ト諸物価トノ釣合ヲ失ヒ、是カ為メ人氣寐入テ引タ  
、ス、甚タ不景氣ナリ、是ヲ一ト通り見ル時ハ巳年以來  
米始メ諸物価ノ下落セシト、金札ノ狂ヒ價金ノ煩ヒ、金  
利息ノ高カリシ等、夫是ノ損毛当節ニ押移リシ故ト思ハ

ルレトモ、全ク是貿易通商ノ大体ニ暗ク、之ニ因テ起リシ弊害ナリ、

どかもふけスル徒モ心神ヲ苦シメ新發明ノ事物ニ因テ利ヲ得ルナラハ、タトヒ何程大利ヲ得ルトモ、是ハ此レ其心神ヲ苦シメシニ報ヒシ利得ナレハ、世界万国ニ於テモ公平至当ノ理ト称スヘケレトモ、旧來ノ風習ハ新發明ニ因テ利ヲ得ルコトニ疎ク、既ニ成製化熟ノ物品ヲ以テ利ヲ謀ルナレハ、甚シキハ其弊ヘ権ヲ弄シ、威ヲ仮リ、上ヲ覬ヒ下ヲ誣ヒ、巧ニ枉邪ノどかもふけヲ勤ルニ至ルナリ、奸民時ヲ得テ良民所ヲ失ヒ、世間只奸民多シト云フハ、良民隠レテ見ハレサレハナリ、貿易ノ利益タルヤ物ノ有形無形ニ拘ハラズ、都テ事物ノ有益ヲ通シ、互ニ便利ヲ達シ、双方心ニ満足ヲ得テ相共ニ損害アルコト無キナリ、即チ無形ノ産物ハ智能才力ノ発見ニ因ルコトナレハ、予シメ期スヘカラスト雖モ、有形物品ハ之ニ相当スル直ヒノ大略ヲ推サスンハアラス、凡ソ物品ニ美麗精密ノ巧アリトモ、原質ハ山海原野ヨリ

産出スル天物ニシテ、金鉄珠玉ト雖モ価ヒ有ルコト無シ、然レトモ天物ノ假ニテハ世用ニアタラス、タトヒ一小物ト雖モ人工ヲ歷テ世用ニ供スルナリ、人工ヲ歴ルニ多少ノ手数アリ、是価ヲ生スル本ナリ、故ニ物価ノ原質ヲ糾セハ人ノ骨折ナリ、骨折ニ心神ヲ勞スルアリ、身体ヲ勞スルアリ、概シテ此骨折ニ相報ユル賃カ物品相当ノ価ト成ルナリ、

諸物品ノ価其レ々々同シカラサルハ、概ムネ人ノ骨折セシ多少ニ因ル理ナレハ、骨折多キ品ハ其価高ク、少キ品ハ安キコト至当ナレトモ、流行後レノ品ハ望人少キ故、タトヒ骨折多クトモ価安キナリ、流行ニ先タチテ人氣ニ適ヒタル品ハ、望人多キカ故ニ骨折少クトモ価高シ、故ニ物価ノ原質ハ人ノ骨折手間賃ナル意ヲ知ルト雖モ、亦流行不流行ノ理ヲ知ルニ非レハ、勞シテ利ヲ失フニ至ルナリ、

流行不流行ノ本ハ時勢ノ變更ヲ知ルニ在リ、故ニ欧米ノ經濟書ニモ、時ト処トニ意ヲ用ルコトヲ屢云ヘリ、

又貨殖伝ノ首ニモ老子ノ言ヲ以テ時節ノ変更ヲ明セリ、是等ノ意ヲ実地ニ引当テ見ルヘシ、三十年以前ト今ノ時勢ヲ比スレハ、其差ルコト世ヲ隔タルカ如シ、近ク十年前ト今ヲ較フルニ、一切ノ便利自在ナルコト挙テ計ルヘカラス、中ニモ著明ナルハ蒸氣船・車・伝信機・郵便馬車・人力車其余衣食器什及ヒ人ノ耳目マテ改新セシカ如シ、是外国ト通商始マリシニ因テ広く世界ノ情態ヲ知り、旧来ノ陋習ヲ脱シテ日新開化ノ界ニ進歩セシカ故ナリ、此時ニ方リテ利損モ亦甚タ速カナリ、是故ニ時勢ヲ知りテ世上ノ人氣ヲ察セサレハ、今日ノ流行ハ明日ノ不流行ト移リ易リテ、常ニ後レヲ取ノミナリ、流行不流行ヲ未萌ニ覺知セル者ハ、常ニ流行ニ先キ立テ事ヲ始メ、物ヲ仕入レ、時ニ後レスシテ事ヲ終リ、品ヲ捌クナリ、故ニ勞少クシテ利ヲ得ル多シ、此ニ拙キ者ハ常ニ時ヲ失ヒ、流行ニ後レ、或ハ時ヲ見テ稍事ヲ始メ、物ヲ仕入ルヲ以テ毎モ売捌ニ後ル、故、勞多クシテ利ヲ得ルコト稀ナリ、此巧拙ハ時勢ノ変更

ニ心ヲ用ルト用ヒサルトノ差別ニシテ、商人懸引ノ標準ナリ、尤心ヲ用ルニ良ト奸ト別アリ、時勢ノ変更ニツレ、世上ノ人氣自然ニ移リ易ル所ヲ己レカ中心ヨリ熟慮スル者ハ良商ナリ、又黠智巧言ヲ以テ事ノ早聞ニ心ヲ用ル者ハ奸商ナリ、奸商ノ風俗行ハル、時ハ約リ全国ノ厚福ニハ至ラサルナリ、

貿易ノ適當ナル所ハ畢竟勞々相易ルモノニシテ、早く云ヘハ骨折シ手間賃ノ取遣リニシテ、骨折ノ手間賃ノ交易ナリ、然ルニ従来貿易ノ有サマハ、我ハ座シテ彼ヨリ来ルヲ待ツノミナリ、我座ナカラニシテ勞少ク、彼ハ数千里ヲ航海シテ勞多シ、勞多ケレハ之ニ報ハサルヲ得ス、既ニ従来商ヒノ品代ニ籠リテ、之ヲ償ヒ払ヒシコトハ眼ニ見エサレトモ、黙シテ算スレハ自然ト売込ミ、引取りノ品代ニ平均セラル、コトナリ、是ヲ以テ見レハ従来ノ商風ニテハ、何程ニ勉厲スルトモ全国一体ノ富ハ得ラヌナリ、

従来貿易ノ情態ヲ見ルニ、引取物ニ就テ利ヲ思フ者アリ、

売込品ニ就テ利ヲ思フ者アリ、引取物ニ就テ利ヲ思フ者ハ、外国人ヨリ割安ニ買入テ、之ヲ内国ヘ高ク売ント欲シ、売込品ニ就テ利ヲ思フ者ハ、内国ニテ割安ニ買入レ、之ヲ外国人ヘ高ク売ント欲ス、此両格ノ商人思念ヲ遂クル時ハ、何レモ利ヲ得ルコト必セリ、然シテ此利ハ外国人ヨリ得タルカ、内国人ヨリ得タルカト推シ見レハ、全ク内国人ヨリ得タルニテ、外国人ヨリ得タルニ非ス、何ントナレハ、彼レカ売出スニモ買入ル、ニモ利得アレハコソ、商ヒヲ為ルナレ、然ラサレハ売買ハ為サルナリ、之ヲ以テ見レハ彼レハ毎モ我ヨリ取ル利ニシテ我ニ得シ、利ハ我国人ニ高ク売リ、安ク買入レシ利ニシテ、外国人ヨリ得シ利ニハ非ルナリ、是所謂財ヲ生スルト利ヲ奪フトノ差別ニ暗ク、常ニ着眼スル所ノ異ナルヲ以テ然ルナリ、然シナカラ是ハ只眼ニ見ル所ヲ論スルノミニシテ、未タ実地ノ損利ヲ知ルニ足サルナリ、実地ノ損利トハ所謂勞力ト称スル身体手足ヨリ知能才力ノ骨折ヲ彼レヘ高ク売込安ク売込、又彼レヨリ安ク買込高ク買フマテノ懸

引ナリ、我カ骨折ヲ安ク売リ、彼レカ骨折ヲ高ク買フ時ハ約リ我国ノ損毛ニシテ、遂ニ全国ノ疲弊トナルナリ、我国ノ商人ハ欧米各国ノ商人ヨリ、知能才力トモ劣レリト一概ニ論スレトモ、是ハ思ヒノ足ラスト云ヘシ、財ヲ生シ利ヲ得ルノ道ハ、彼方ノ国風習俗ニシテ、従来巧ナル所ナリ、我国商人モ利ヲ得ル道ニハ相応ニ巧ナレトモ、国々ノ習俗ニ因テ各着眼スル所ニ違ヒアリ、我国人ハ成熟ノ物品ヲ以テ利ヲ得ルコトヲ思ヒ、彼国人ハ新ナル物品ヲ造リ出シ、以テ利ヲ得ンコトヲ思フノ違ヒナリ、畢竟双方トモニ利ヲ得ンコトヲ思ヒテ競ヒ厲ムハ同一ナレトモ、我国人ノ為ル所ハ既ニ成熟ノ物品ニ就テ、相場ノ上下流行ノ先後ヲ争フノミナレハ、事僅少ニシテ、然モ得ル所ノ利ハ他人ノ利ヲ奪ヒテ、己レカ有トスルニ均シケレハ必竟区内ニ相闘クモノニテ、城外ヨリ取来レルニ非ス、云ハ、博奕ニテ利ヲ得タルモ同シ道理ニシテ、事実世上ニ物品ヲ増殖スルニ非サルナリ、タトヘハ米・油・棉・銅ヲ買置テ利ヲ得ルノ類ナリ之ヲ俚語ニ思ハク、見コミ商ヒト云、彼国人

ハ常ニ新製ノ物品ヲ造出シテ、利ヲ得ルコトヲ専ラ務ルヲ以テ、意ノ如キヲ得ハ、自他共ニ大利益ヲ被ルニ至ルナリ、此差別ニ因テ知能才力マテ及ハサルカ如ク見ユルナリ、跬歩ニ失スレハ千里ヲ差フトハ夫レ是ノ謂歟、今也日新開化ノ秋ナリ、從來他人ノ利ヲ奪フノ風習ヲ一変シテ、彼国人ノ風習ニ倂ヒ、事實利ノ生スル本ニ意ヲ用ヒスンハ有ヘカラス、然ラサレハ遂ニ外人ニ誹謗セラレ、未開ノ商人ト嘲ケラル、ニ至ルナリ、

西人ノ説ニ文明諸国ノ産物ハ大体器械ヲ用ヒ、製造スルヲ以テ、勞費少クシテ利ヲ得ルコト多シ、物品皆精巧ヲ極ルナリ、夷俗ノ国ニハ器械ヲ用ルコトヲ知ス、専ラ人力ヲ以テ物品ヲ製スルカ故ニ、勞多クシテ利ヲ得ルコト少ク、物品ハ麤惡ナリト云ヘリ、我國ハ昔ヨリ知巧ヲ以テ器械ヲ作ラス、器械ヲ以テ物品ヲ製セス、山海原野ニ出ル諸産物ヨリ、一切ノ雜具ニ至ルマテ、専ラ人力ヲ以テ製造シ来レトモ、從來余リ有テ足サルコトノ無キハ、全是土地ノ豊富ニ因テ然ルナリ、今之

ニ加ルニ欧米ノ法ニ倂ヒ、器械ヲ用ルコトヲ為ハ、全國ノ利益広弘ニシテ計ルヘカラサル理ナリ、尤器械中ニ於テ蒸氣機關ヲ以テ最トスル由ナリ、然ルニ我國今ニ於テ此器ヲ用ヒテ物品ヲ製セス、偶マ之ヲ用ルコトアレトモ、其主宰タル人ハ平民ニ非ルヲ以テ、農工商賈ノ輩ハ真實利損ノ程度ヲ知ル能ハス、故ニ只是ヲ用レハ損失ナリト論シテ、未タ實地ヲ知ル者稀ナリ、全ク是右器械ヲ買入ル、ニ其価ヒ高ケレハ、此金利ト石炭ノ入費且人夫ノ傭賃等ヲ算スルニ、器械ヲ用ルヨリ人力ヲ用ル方割安ニシテ、便利ナル算當ト成ルヘキ故ナラン歟、從來我國ハ人多ケレトモ、文字ヲ讀ミ文字ヲ書クモノ少ク、是カ為ニ人夫ノ傭賃安ク、且物品捌ケ方少カリシ故モアラン、夫レ物品精巧ニシテ廉価ナル時ハ、望ミナカラ買得サルモノモ買得ルコトトナリテ、自然ニ捌ケ方多クナルヘキ道理ヲ覺知スルトキハ、器械ヲ以テ物品製造シテ、自他トモニ利益ヲ被ルニ至ルヘシ、



商人ニ種々ノ差ヒアレトモ大別シテ、都会ト国々トニ分ツ、国々ノ商人ハ其土地ノ産物ヲ集メテ、之ヲ都会ニ捌キテ渡世トス、故ニ之ヲ元方商人トモ山方商人トモ称スルナリ、都会ノ商人ハ元方商人ヨリ出ス物品ヲ買受ケ、之ヲ売捌キテ渡世トス、斯ク渡世スル中ニ商ヒノ巧拙アリ、商ヒノ巧拙ハ天稟ノ才不才ニモ因ルト雖モ、概シテ云ヘハ懸引ノ巧拙ニアリ、所謂機ニ臨ミ変ニ応スル大事ナレハ、常ニ此一事ニ心ヲ苦シメサル者無ク、殊ニ有力ノ商人ハ都鄙トモニ思ハク見コミヲ立ルヲ以テ、懸引ノ至極トス、此見コミヲ立ルニ其目的トスル所、大体ハ旧習ニ因テ利ヲ奪フ一方ニ着眼シテ、財ヲ生スル方ニ着眼スル者少シ、故ニ懸引ハ臨機応変ニアリト常ニ知リナカラ、昔ト今ト形勢ノ大ニ變更セシ所ニ心ヲ用ヒ、意ヲ働カス者稀ナリ、就中阪府ノ人民ハ商ヒニ巧ナルコト全国ニ冠タリト雖モ、旧習ニ染ミ着キ、夫ノ財ヲ生スルト利ヲ奪フトノ畦界ニ暗ク、座ナカラノ商業ヲ墨守スル而已ニテ、従来取引セシ内國諸方ヘ往來シテ、元仕入スル商

風ニ變更スル能ハサルモ遺憾ノコトナリ、斯ク云ヘハトテ従来ノ商風ヲ惡キト云ニハ非ス、之モ亦物品捌方ノ便利トナリ、大ニ融通ヲ助クルコトナレトモ、願クハ都会ノ大商有力ノ人ハ見コミ商ヲ立ルニ現当見ル所ノ物品ニ因テ、利ヲ得ルコトノ一方ニ片寄スシテ、内外人民ノ好ム新製ノ物品ヲ増殖スルコトニモ心ヲ用フレハ、亦国々元方商人モ之ニ心移リテ自然ニ都鄙ノ商人心ヲ一ニスルコトト成テ、遂ニハ新發明ノ物品ヲ生スルコトニ至リ、共ニ利ヲ得ルコト弘大ナルヘシ、国々元方商人モ常ニ心ヲ尽シ、精々流行ニ適ヒタル物品ヲ製出スト雖モ、毎モ流行ヲ見テ仕入ルヲ以テ時ニ後ル、コト多シ、故ニ都鄙ノ商人心ヲ一ニスル時ハ、時節ニ適ヒ流行ニ後レサル物品ヲ製出スルコト成リ、常ニ利ヲ得ルコト多キニ至ルハ必定ナリ、是外國ノ新製物品ヲ増殖スル初步ニシテ、遂ニハ内外ニ喜ヒ好ム物品ノ増殖スルコト際限無キニ至ルヘシ、是所謂業ヲ分ツノ効驗ナリ、従来我國分業ニ心ヲ用ヒサリシハ、物品ノ捌方多カラサリシ故ナリ、今也

海外諸國ト通商盛シノ時ナレハ、諸業トモ成タケ精密ニ業ヲ分チ、物品増殖ニ心ヲ用ヒ、内外共ニ通商ヲ盛大ニシテ利ヲ得ヘキ秋ナリ、

貿易ニ就テ利損ノ廉々種々ナレトモ、座ナカラニシテ貿易セハ金利ヲ得ルコト能ハサルナリ、然レトモ未タ外国通商ノ情態ニ委シカラスシテ出店等ヲ為ルハ、勝算ヲ得スシテ利ヲ望ムニテ、所謂先ツ戦而後ニ勝ヲ求ルニ均シケレハ、通商ノ道理ヲ熟知スルマテハ、外国出店ノコトハ暫ク急カスシテ、内國所々ニテ地ヲ開キ、生糸・茶ヲ始メ其余内外人民ノ喜好スル諸産物ノ増殖ニ尽力セハ、其身ハ元ヨリ全国ノ為ニモ利益有テ損害無キノ良法ナリ、故ニ官ヨリモ厚ク御世話アラセラル、コトナリ、然シ西洋事情ニ記スル如ク、拿破崙<sup>(ナポレオン)</sup>ノ魯國<sup>(プロシヤ)</sup>へ襲入セシ時ノ兵糧運送ニ精力ヲ尽セシト、蘇格蘭<sup>(スコットランド)</sup>ノ鄙人カ毎ニ牛羊ヲ逐テ、龍動<sup>(ゴードン)</sup>ノ市ニ來ルトノ如ク、御用ト私用ト其違ヘルコト甚シ、人皆之ヲ知サルニ非レトモ、此業ハ先ツ五七年ヨリ十年ノ功ヲ積サレハ、益ヲ見ルニ至ラス、其際ノ入費夥

シク、且手元ニモ常ニ入費有ルコトナレハ、善キト知りツ、目前金融通ニ支ヘテ発起スル者無シ、殊ニ利息高キ時ハ成功マテ算スルニ、其得ル所費ス所ニ足ラス、譬ヘハ一所ヲ開クニ就テ入費十萬兩トシ、利息一ヶ月半トスレハ、十年ヲ経テ元利合凡五十萬兩ト成ルナリ、下シテ月一分ノ利息トシテモ凡三十萬兩ト成ルナリ、已ニ如是ナレハ、利息ノ高直ニテハ逆モ開地殖産ノ業ハ起ラス、開殖ノ業起ラサレハ、タトヒ貿易ニ巧ヲ尽シ精力ストモ、全國ノ富強ニハ至リ難シ、今開殖ノ業ヲ盛シニセシニハ、金利下ルニ非レハ行レス、金利ノ下ルハ融通ノ宜キニ在リ、融通ノ宜キハ四民業務ハ異ニスレトモ、心ヲ一ニシテ上情下ニ通シ、下情上ニ達シ、毫モ辟路無ク、所謂自主自由ノ權義ヲ分ニ応シテ保チ安シシ、交互意ニ挟ムコト無ク、普ク公行セシムルニ非レハ能ハサルナリ、下民ハ元ヨリ寸地ノ領無ク、斗米ノ禄ナケレハ利ヲ以テ利トスルニ非レハ生活スル能ハス、故ニ利損ノ道理ヲ尽シテ、其身ノ分ニ応スルモノナリ、其大略ヲ云ヘハ全國

ノ人民凡三千万人ト積リ、貧富・老少・男女ヲ平シ、衣食住ニ就テノ入費一日分一人前金二朱ツ、トシテ算スレハ、三百七十五万円ナリ、一ヶ月ニ一億一千二百五十万円、一年合計十三億五千万円ト成ルナリ、然シテ全国凡三千万石ト積リ、一石五円米トシテ此皆代一億五千万円ナリ、此内ニテ御年貢上納スヘキハ勿論ナレトモ、暫ク之ヲ闕キテモ差引残り十二億円ツ、八年々足サルナリ、此不足ヲ上ヨリ償ヒ遣ハサル、コトハ無レトモ、此中ニ於テ冠昏喪祭ノ作用ヲ遂ケ、子孫ノ増殖スルコト年々盛ンナリ、是ヲ以テ見レハ、利損ノ道理ニ委シキコト知ルニ足リスヘシ、且從來ノ不足ハ如何シテ償ヒ、如何シテ渡世セシモノ欤、其実境ニ就テ之ヲ推シ見ルニ、全ク山海原野ヨリ産出スル無価ノ天物ヲ各自ニ撰ミ取り、之ヲ製作シテ相共ニ融通交易シテ相利用シ、相生活スルモノナリ、是ニ由テ見レハ人ノ生活スル種子ハ、畢竟働キカ元手ナリ、其働キノ中ニ心ノ働キヲ以テ衣食スルアリ、手足ノ働キヲ以テ渡世スルアリ、心ノ働キハ學術・技芸

ニシテ、欧米ニ所謂無形ノ産物ヲ仕込ム人ナリ、手足ノ働キハ有形産物ヲ製スル人ナリ、然ルニ我國ニ從來學術・技芸ニ専門ノ教無キヲ以テ実学行レス、多クハ有名無実ノ学派ニ流ル、ナリ、是学芸ノコトニ欧米ノ如ク分業無カリシ弊ナリ、是故ニ何ヲ学フニモ習フニモ、専門ノ教師無レハ亦如何トモ為ルヲ得ス、諺ニ習フヨリ慣ル、ト云場ニモ至ラサルハ遺憾ナリ、都テ学芸習熟ノ本ハ勉強ニ出ルト雖モ、平常ニ慣習フヨリ、性ト成テ自然ニ万事万物ヲ窮理スル根氣ニ至ルナリ、且先前ハ学芸ノ上ニモ株式有テ押ヘ扣ヘノ束縛力強カリシモ、手伝ヒテ自然ニ人ノ氣勢寐入テ引タ、ス、張り合ノ技シニモ因ルナリ、今也昔年ト同シカラス、世界万国ト交通シテ、智ヲ磨キ利ヲ競ヒ、各自由ノ權ヲ有チ八方束縛無キノ時ナレハ、心ヲ勞シ力ヲ勞シテ我國勢ヲ張大スヘキナリ、此ニ注意セスンハ有ヘカラス、

文明諸国ノ風ヲ聴察スルニ、衣食屋舎ハ勿論、耳目ニ適スル巧機美麗ノ物品多シ、是他ニ輸出スルノミニ非ス、

自分ニモ使用スルカ為ナリ、則人ノ氣勢ヲ引立セ、勉強ヲ勸メ、知識ヲ弘メ、発明ヲ鼓舞スル道具ナリ、仮令是等ノ道具有ト雖モ、權利義務ノ二途正シカラサレハ、真ノ開化ト云ヘカラス、御一新後、下民ヘ追々御教諭有セラレ、殊ニ先年穢多・非人ノ称ヲ廢サセラレ、平民ニ苗字ヲ許サセラレ、既ニ全国協力一致ノ基ヲ立サセラレシコトナレハ、人衆ハ相共ニ所謂己レノ欲セサル所人ニ施サス、己ノ欲スル所人ヲ誣ス、己レノ權利ヲ以テ他人ノ通義ヲ妨ケス、相共ニ職業ヲ盛大ニスヘキ上意ヲ奉戴シテ、日新開化ノ域ニ進ムヘキ時ナリ、然ルニ旧來ノ弊風未タ挽回セス、教導在セラル、ヲ呵責セラル、如ク、保護セラル、ヲ束縛セラル、如ク、兎角畏縮逡巡シテ、一令一号ノ出ル毎ニ上下隔ヲ増スカ如キハ、厚ツキ御趣意ニ悖逆スルナリ、

人皆裸体ニテ生レ、裸体ニテ死スルハ貴賤一般ナルカ中ニ、下民程哀シキモノハ有ラス、生涯辛苦艱難シテ夭寿ヲ保スルナリ、人ノ命数平均五十才トスレハ、其内苦楽

ヲ受ルハ畢竟三十年ハカリナリ、只三十年ノ苦楽ノ身ニシテ常ニ束縛ヲ受レハ氣勢引立サルナリ、氣勢引立サレハ開化ノ域ニ進ミ難シ、欧米ノ説ノ如ク命数ノ平均三十年ト云ヘハ、益哀シキ限りナラスヤ、然ルニ政府ハ天地ト寿ヲ同フシテ死スヘキモノニ非ス、死セサル政府ヨリ死スヘキ下民ヲ束縛スルコトナラハ、人意ニ適セサルコト多クシテ苦シムコト甚シク、何レノ日カ開化ノ光リヲ輝サンヤ、試ニ政府ハ死スヘキモノ歎否ル欤、又人民暮シ方ノハカナキ哀レナルヲ解部分析スルコトアラハ、事物トモニ明白ニシテ人民開化ノ捷徑ナラン、是ヲ以テ下民ニ自由ノ權ヲ充サレ、束縛ヲ放解除シテ億兆ノ志ヲ遂シメラル、ナラスヤ、猶例ヲ引キ論ヲ設テ、曖昧トシテ枯死スルハ、固陋愚蒙ノ至リト謂ヘシ、寸虫タモ神魂アリ、況ヤ人タル者ニ於テヤ、各人此ニ奮発シテ上下一致ノ皇風ヲ仰カハ、全国ノ富強期セスシテ来スヘキナリ、

冊子原寸 縦二七櫃 横一九櫃 二二枚

一五 大内晴巒「ニコライ」問答ヲ読ムノ感

記泥格頼問答

六月七日、先是渡辺脩齋東曰、嚮君訪泥格頼、渠甚敬服君、每恨談論未罄、君有閑請過、未牌乃赴築地、再訪泥格頼、脩齋導至其室、脩齋謂泥格頼曰、聞教部方講究創世經、泥格頼笑曰、耶蘇之說豈書中之所能悉乎、教部而講耶蘇、即是教部之說、而非耶蘇之說也、予聞天道淵源中三德一体之說於脩齋、答曰三德雖異、本是一体、曰既稱父子、即是兩体、何為一体、脩齋不能答、質之泥格頼、泥格頼正色謂予曰、先生果欲聽耶蘇之說乎、願卜日而來、某將齋戒沐浴而語、夫耶蘇之說豈可付之一場茶話乎、先生若就某聽耶蘇之說、二月則大意可耳、而後有疑則某將叩其兩端、今卒然而問、卒然而答、是慢神之甚也、今日則先生請勿論之、予曰、渡辺有耶蘇之談、故僕亦偶然問其

大内晴巒曰、所疑於渡辺耳、非敢論之於君也、幸勿深咎、是政體耳、這體耳、咄々、不知也、

又曰、皇國所以異外國者、重於父子之情矣、聞汝外國教導之人也、汝依何教而放言、無稽之又曰、參議諸公、若汝今日之難辛、汝外之露斥、我王事、我之功臣、比之於不忠、義之叛臣、不義不禮之甚哉、林外唯謂獅子身中

既而予問曰、貴邦帝王一系、立君獨裁、是為國體、頗似与我邦相近者、曰弊邦誠如貴論、但至貴邦、則某未知其為立君獨裁也、窃察近來之政、只是參議諸君相議為政、而使天之耳、曰可東遷、即東焉、曰可西巡、即西焉、一政一事未聞一釁慮可否之、臣之視君、殆如傀儡、獨至日誌中、始擡頭、天皇之字耳、是豈所謂立君乎、故方今貴邦之政、是謂衆裁役君、五大洲中恐無此國體、如斯國體、而可以維持永久者、某未聞之也、幸是若西鄉、若木戶、若大久保、若板垣、若大隈、英傑輩出、才力相抗、是以互相回觀、未有一人大逞其意者、他日若衆傑周謝一傑獨存、則其人必將掌握天下之權、即是清盛賴朝之禍、復見於今日也、而先生以為立君獨裁、將与弊邦並論、某窃不取也、予曰、夫帝王長於深宮之中、不能

之虫也、嗚呼、悉通民間之情、周達天下之事、於是拔擢衆賢、

又曰、咄汝、委任宰輔、以治天下、是古今通義也、豈可謂

誤國體、又不知帝道、之衆裁役君乎、即如貴邦、亦必並置宰輔、以

以中、古、以、來、贊國政、君主必不以其一身任万機之政、而稱

之大弊、為、其、甚、哉、其、旨、也、立君獨裁、何也、曰、至我則悉通下民之情、

周達天下之事、其知見亦出群君臣之上、故雖

使群臣議政、至其可否、則帝專決之、而群臣

唯奉行其命耳、是謂立君獨裁、予曰、若共和

州、推一世之賢、以為君主、則其知見出於群

臣之上亦宜、今貴邦帝王一系、則安得世々生

賢明之主乎、如君言則是天獨鐘賢聖之君於俄

一國也、天降才恐無此不公平也、曰不然、弊

邦能以道養君、使之為賢明之主、請論其道、

夫帝子年二三歲、方知戲嬉、則自耕織之具、

以至凡百之事、皆製玩具、使之知天下之事、

年既十二三、則使之為一書生、周遊學校、試

以航海一術言之、先使之為水夫、而後為士宦、

而後為船將、当其水夫若士宦之時、則船將使

役之、比之常人、加一等嚴刻、航海既熟、則

又轉為陸軍、其法亦如航海、既通諸學、則又

使之周遊俄邦山川之險易、民俗淳漓、必一々

体究之、而后又使漫遊各國、既歸則冊為親王、

既為親王、則延衆教師、々々十余、每候座上、

一師僅退、一師又進、自興至寐、殆無休暇、

而宮中又置田園、倦則躬執耒耜以健身體、以

習民事、其習帝道如此、故至其即位、則自

耕稼陶渙、以至應接戰鬪之事、自々國之風俗、

以至各國之形勢、莫不熟知、莫不諳練、是蓋

伯德祿帝以來之法也、而世遵守之、今如貴邦、

試以此法養其 天皇、則縱不至如 神武天皇、

亦可以世々釀出如 応神仁德諸帝者、者夫人

才不可不養、況至帝王、則億兆之命係焉、豈

可不尽力以養之乎、而貴邦似未盡其道者、未

聞其君不賢明而能與其邦者也、我帝所謂立君

又曰、又是小兒之痴言、以對外人、國辱何有大焉

又曰、外國之妖僧、業已知我有徳、而林、外、以、不、能、悉、通、周、達、為、帝、者、之、通、義、汝、當、慙、死、矣、

又何所容而

豈以語於外國之人乎、以某觀今日形勢、大權旁落、而大亂之機、恐不出十年也、不知先生

又曰、是何謂哉、抑皆如林外愚人之語、其陰謀我君者、亦非林外之完而誰耶、我四千萬民、汝既誠見之否、汝此書、唾棄誰見如汝妖僧可笑矣、嗚呼、可歎矣

獨裁、詔命一下則沛然如決江河、闔國奉戴、無敢沮格、其威權如是、而其偶出也、從者一兩輩、從容散步、野老脫帽而拜、則帝亦脫帽答拜、其真卒簡易一如家人、是以闔國之民、無一人不思死於其上者也、今視貴邦上下之情、  
○否○隔○不○通、○陽○尊○其○君、○而○陰○蔑○之、○人○心○洶○々、  
○謗○議○載○途、○未○見○一○人○心○服、○天○皇○者○也、○弊○邦○立○法○之○嚴○自○貴○戚○始、○數○年○前○皇○姑○之○宅、○少○侵○農○民○之○地、○民○訴○之○於○地○方○宦、○則○立○檄○皇○姑、○召○之○梟○庁、○皇○族○則○許○代○人、○々々○至○則○判○返○侵○地、○罰○以○贖○金、○而○俄○人○無○復○怪○之○者、○今○貴○邦○則○達○宦○貴○族、○往々○乘○權○凌○下、○而○庶○人○腹○誅、○莫○敢○訴○之、○紀○綱○之○不○振、○如○是、○何○足○以○為○政○乎、○而○吾○視○諸○官○員、○意○氣○揚々○自○得、○以○為○王○室○中○興○天○下○一○新、○文○明○開○化、○將○与○各○國○並○立、○是○未○可○以○瞞○自○國○之○民、○豈○以○語○於○外○國○之○人○乎、○以○某○觀○今○日○形○勢、○大○權○旁○落、○而○大○亂○之○機、○恐○不○出○十○年○也、○不○知○先○生

聽此不祥之言、以為如何、某不能諂諛直抑心胸而已、言或觸不忠之外臣、忌諱、幸海涵之、予曰、今當年草創之運、治不禮之小人、而腰間動有聲、網未至遽張、自外人視之、宜哉有此議論也、俄國之僧、今日廟堂之所以宵旰者、將又悉除諸弊、致其來於我國、真治、然是豈可責効於一時乎、君徐々觀之、下、蓋我人則疑團亦當水積、抑君論我國事、盡言不隱、教耶、未可知、是我輩之所欲大聽也、當時々未候、以承高論、帝盟之、大義、在我國辱我君、實不禮、雖然、莫是外、如林外我民、而位在於政、府與不狂、知恥而已、不談論、不唯人、知恥而已、不承高論、美、不忠之臣、罪無所道者、皇國生如此、堪啼泣之至

見勁敵如泥格賴者、談論之間、不覺流汗盜背矣、省軒曰、今日治部助、佐藤輩、皆為朝廷所信用、而泥格賴、獨未得其志、故發此憤懣之論耳、君若訪治部助佐藤、則其談論必當有與之大異者、抑如泥格賴、亦可謂棄石也、余始得此書於友人某也、一讀不堪憤嗟、既將唾棄、然而以為是事已在於六月七日、再來流布人間、殆半歲、未聞有一人駁之者、

世人恐有誤會者、因其虛妄所甚者、左旁朱  
点、上層駁評、以贈同志、

時壬申十一月五日也、礪川勉土晴齋切齒而  
誌、

冊子原寸 縦二五・二種 横一八種 五枚

### 一壘 徵兵ニ関スル詔書及太政官布告

一九五二ノ一

#### 詔書写

朕惟ルニ古昔郡県ノ制、全国ノ丁壮ヲ募リ、軍団ヲ設ケ、  
以テ国家ヲ保護ス、固ヨリ兵農ノ分ナシ、中世以降、兵  
権武門ニ歸シ、兵農始テ分レ、遂ニ封建ノ治ヲ成ス、戊  
辰ノ一新ハ、実ニ千有余年来ノ大変革ナリ、此際ニ当リ、  
海陸兵制モ、亦時ニ從ヒ、宜ヲ制セサルベカラス、今本  
邦古昔ノ制ニ基キ、海外各国ノ式ヲ斟酌シ、全国募兵ノ  
法ヲ設ケ、国家保護ノ基ヲ立ント欲ス、汝百官有司、厚  
ク

朕カ意ヲ体シ、普ク之ヲ全国ニ告諭セヨ、

明治五年壬申十一月廿八日

一九五二ノ二

#### 徵兵告諭

我

朝上古ノ制、海内挙テ兵ナラザルハナシ、有事日、  
天子之ガ元帥トナリ、丁壮兵役ニ堪ユル者ヲ募リ、以テ  
不服ヲ征ス、役ヲ解キ家ニ歸レバ、農タリ、工タリ、又  
商賈タリ、固ヨリ後世ノ双刀ヲ帶ビ、武士ト称シ、抗顏  
座食シ、甚シキニ至ツテハ、人ヲ殺シ、官其罪ヲ問ハザ  
ル者ノ如キニ非ズ、抑  
神武天皇、珍彦ヲ以テ葛城ノ国造トナセシヨリ、爾後軍  
団ヲ設ケ、衛士防人ノ制ヲ定メ、神龜天平ノ際ニ至リ、  
六府二鎮ヲ設ケ始テ備ル、保元・平治以後、朝綱頽弛、  
兵権終ニ武門ノ手ニ墜チ、国ハ封建ノ勢ヲ為シ、人ハ兵  
農ノ別ヲナス、降テ後世ニ至リ、名分全ク泯没シ、其弊



勝テ言フベカラズ、然ルニ太政維新、列藩版図ヲ奉還シ、辛未ノ歳ニ及ビ、遠ク郡県ノ古ニ復ス、世襲座食ノ士ハ其祿ヲ減ジ、刀劍ヲ脱スルヲ許シ、四民漸ク自由ノ權ヲ得セシメントス、是レ上下ヲ平均シ、人權ヲ齊一ニスル道ニシテ、則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ、是ニ於テ士ハ従前ノ士ニ非ズ、民ハ従前ノ民ニ非ズ、均シク皇国一般ノ民ニシテ、国ニ報ズルノ道モ、固ヨリ其別ナカルベシ、凡ソ天地ノ間、一事一物トシテ税アラザルハナシ、以テ国用ニ充ツ、然ラバ則チ人タル者、固ヨリ心力ヲ尽シ、国ニ報セザルベカラズ、西人之ヲ称ジテ血税ト云フ、其生血ヲ以テ、国ニ報ズルノ謂ナリ、且ツ国家ニ災害アレバ、人々其災害ノ一分ヲ受ケザルヲ得ズ、是故ニ人々心力ヲ尽シ、国家ノ災害ヲ防クハ、則チ自己ノ災害ヲ防クノ基タルヲ知ベシ、苟モ国アレバ則チ兵備アリ、兵備アレハ則チ人々其役ニ就カザルヲ得ズ、是ニ由テ之ヲ見レバ、民兵ノ法タル、固ヨリ天然ノ理ニシテ、偶然作意ノ法ニ非ズ、然而シテ其制ノ如キハ、古今ヲ斟酌シ、

時ト宜ヲ制セサルベカラズ、西洋諸国數百年來研窮實踐、以テ兵制ヲ定ム、故ヲ以テ其法極メテ精密ナリ、然レドモ政体地理ノ異ナル、悉ク之ヲ用フベカラズ、故ニ今其長ズル所ヲ取り、古昔ノ軍制ヲ補ヒ、海陸二軍ヲ備ヘ、全国四民男兒、二十歳ニ至ル者ハ、悉ク兵籍ニ編入シ、以テ緩急ノ用ニ備フベシ、郷長里正、厚ク此御趣意ヲ奉ジ、徵兵令ニ依テ民庶ヲ説諭シ、国家保護ノ大本ヲ知ラシムベキモノ也、

太政官

冊子原寸 縦二八釐 横一九釐 四枚

一五三 佐田介石等太陽曆不可ノ建白

（表紙） 『明治五年十一月建白仕候』

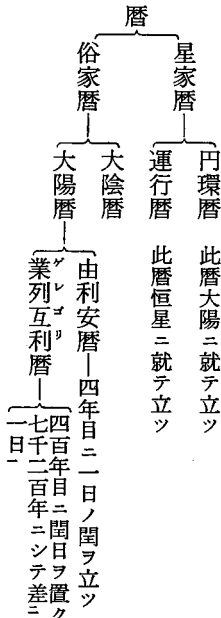
太陽曆名義不正シテ害アル旨建白

臣等象齋介石

欽テ恭ク建言仕候、夫レ下トシテ上ヲ議ス、豈安ソ畏レ

ナキコトヲ得ンヤ、況ヤ

繪言ヲ議シ奉ルヲヤ、天地大ナリトイヘトモ、ソノ罪ヲ遁ル、トコロアラシヤ、然レトモ今般御改曆ノ儀ハ大ニ万民ノ融通ヲ妨ケ、国家ノ困窮ヲ生ス、是レタゞ今歳ニ限ルノミナラス、万世ノ大害タリ、ソノ大害タルヲ知テ忠告セザルハ、国民ノ本意ニアラス、罪万死ニ当ルモ何ソ避ケンヤ、抑々民ニ曆ヲ頒チ布クコトハ、時ヲ授ルノミニテ事足ル、星象ヲ觀推歩ノ微差ヲ争フコトハ、星学曆理ヲ学徒ニアリ、民ニ関ルヘキコトニアラス、曆理天象ノ難キ洋人トイヘトモ、之ヲ究ムルモノ幾クモナシ、夫レ曆ノ種類カノ西洋ニ於テ数別アリ、



此図中ニ星家曆トイフハ、天学者天度ヲ測リ、星象ヲ觀

ル上ヘニ限ル曆法ナリ、俗家曆トイフハ、民間ニ頒チ布ク上ヘニ用ル曆ナリ、今度御改曆ニ相成リタル曆法ハ、コノ図中ノ星家曆ニテ運行曆ニ当レリ、コノ運行曆ハ、ソノ曆法恒星ニ就テ立ルユヘ、実ハ恒星曆トコソ云ヘキ筈ナレ、月ニ就テ立ル曆ヲ大陰トイヒ、日ニ就テ立ル曆ヲ大陽曆ト云トコロヨリ申サハ、星ニ就テ立ルトコロノ曆法ハ、是レ星曆ニシテ大陽曆ト云ヘシ、コノ理ヨリイヘハ、今般ノ御改曆ハ是レ星曆ナリ、之ヲ運行曆ト名ク、コノ曆法ガ冬至後凡ソ十余日ニシテ元日トナルノ曆法ナリ、ソノ円環曆ハ毎歳動カス万代不易ノ曆法ナレトモ、コノ運行曆ノ如キハ恒星ノ躔次ヲ逐テ立ルユヘ、毎年少シツ、差ヲ生シテ、終ニハ春分カ元日ニ成ルコトモアリ、秋分ガ元日ニ移ルコトモアルヘシ、故ニ春ノ耕種ノ最中ニ元日ガ来リ、或ハ夏ノ麦秋最中ニ元日カ来リ、或ハ秋ノ収納最中ニ元日来ルコトニ相成ルヘシ、然ニ元日ハ一歳ノ首メニテ、祝酒ヲ酌ミ盛宴ヲ開キ、共ニ集テ歡樂ヲ究ムヘキ古今ノ約束ナリ、故ニ老少貧富ノ別ナク、元日

ヲ以テ一年中苦勞ヲイタスヘキ目的トス、ソノ元日ノ樂  
 ミヲ目的トシテ勉勵スルユヘ、苦勞ヲ致ス中ニモ張り合  
 ヒアリテ、苦勞ヲ忘ル、コトナリ、因テ正月衣裳ト申シ  
 テ両親ヘモ見苦シカラヌ様ニ迎拵ヘテ遣ハシ、子供ヘモ  
 余所ノ子供並ミノ飾リヲ致サセ、婦<sup>カ</sup>ヘモ帶ヤ湯卷キノ一  
 ツモ拵ヘテ遣ハシ度ト心配致セハコソ、年中痛艱<sup>ツライ</sup>苦ヲモ  
 忍フコトナレ、カ、ル元日ヤ五節句ナドヲ農商共ニ売り  
 買ヒヲ致ス時節ト定メタル仕来リニテ、諸産物ヲ捌クヘ  
 キ道ヲ開キ、融通ノ道ヲ通ス、コノ融通ノ道ハ各府各県  
 毎戸ニ亘ルコトユヘ、コノ大節季ト正月元日トノ間ノ融  
 通ハ、一年中ノ片タ担ト相成リ申スヘシ、然ニ農務最中  
 ニ元日ガ旋リ来ラハ、元日ラシキ元日致スモノ天下ニ一  
 人モナキコトニ相成リ、民間融通ノ路サツパリ塞ガルヘ  
 シ、然ニ西洋ニテハ運行曆ヲ用キテ妨ケナキユヘンハ、  
 カノ國ハ肉ヲ食シテ穀ヲ食セス、故ニ我 皇國ホドニ農  
 時ヲ争ハス、因テ元日ノ来ルモ節季ノ来ルモノノ時節ニ  
 拘ハルコトナシ、我 皇國ヤ支那ノ如キハ、穀食ノ國柄

ヲユヘ農時ニ妨ケナキ時ヲ以テ、節季元日ヲ定ルヲ万民  
 ノ最便トス、是レ久ク大陰曆用ルユヘンナリ、已ニ三代  
 ノ時夏ハ一旦太陽曆ヲ用キタレド、民便ナラサルユヘ終  
 ニ之ヲ廢シテ、周ニ来テ大陰曆ヲ用ユ、ソレヨリ以来數  
 千載<sup>(歲)</sup>、大陰曆ヲ用キ来ルモノハ、大陰曆最モ民間ニ便ナ  
 ルトコロアルユヘニ非スヤ、因テ今コ、ニ運行曆ト大陰  
 曆トノ農民ニ便ナラザルトコロ有ルヲ語ルヘシ、夫レ農  
 民ノ便利ヲ取ルヘシ、今若シ運行曆ニヨリテ冬至後僅  
 カ十余日ニシテ歳首トスルトキハ、農民大ニ節季仕舞ニ  
 困マルコトニ相成ルヘシ、ソノ仔細ハ農務ハ僅カ一県一  
 國ノ間タニ於テモ、氣候風土ノ替リニヨリテ種エ付ケ、  
 収納ニ遲速アリテ、ソノ収納後レタルトコロハ、十月下  
 旬ヨリ稻ヲ刈リ初メ霜月半バニ及フ、ソレヨリソノ稻ヲ  
 野外ヨリ數日ヲ経テ運ヒ入レ、ソレヨリソノ稻ヲ拖<sup>ヒキ</sup>、ソ  
 レヨリソノ稻ヲ日ニ乾カシ、ソレヨリ籾磨リイタシ、ソ  
 レヨリ俵ヲ編ミ、ソレヨリソノ磨リ米ヲ括リ俵ニ拵ヘ、

ソレヨリ貢米ヲ納ムルニ付ケテモ僻地山奥ノ如キハ三里  
四里ヨリ五六里ホドノ遠方マデ運輸イタス、ソレトモ舟  
車ヲモ通スヘキ処ハ舟車ニテ運輸イタセドモ、舟車ノ通  
セザルトコロハ牛馬ヤ人力ヲ以テ負担シテ相運ビ候フユ  
ヘ、纒、バカリノ上納米タリトモ何ホド手数相カ、リ可申  
ヤ、尚ソノ上ヘソノ上納米ニモ刎ネ俵ト通り俵ト申ス二  
タ様アリテ、折角四里五里運輸仕り候ヘドモ、都合悪シ  
ケレハ二度モ三度モ刎ネ俵ニ遇フモノアリ、又ソレヨリ  
麦蒔致スニ就テモ、先ツ田ヲ耕シ、種ネヲ播スニモ数日相  
ヒカ、リ、然ニ麦蒔ハ天氣都合悪シケレハ、二十日モ三十  
日モ日数ス相カ、リ申スヘシ、故ニ十二月ニ及テモ麦蒔  
イタスモノアリ、又十一月ヨリ十二月初メノ間タニハサ  
マ、ノ農務アリコノ中ニハミナ旧曆ヲ以テ月ヲ称ス、或ハ薩摩芋或ハ里芋ヲ  
掘リ、又冬至前後ニハ蘿蔔ダイコン引キ、蔓菁カンゾウ引キヲイタシ、或  
ハ菅笠処ハ菅苗ヲ植エ、或ハ蘭庭処ハ蘭苗ヲ種エル等ノ  
農務サマ、ノアリ、然ニ大陰曆ナレハ右様ノサマ、ノ  
農務相ヒ仕舞、正月マデノ間ダニ二十日三十日ホドノ農

隙アルユヘ、ソノ間タニ農民ハ農民相応ノ節季仕舞ノ手  
当テノ内職ヲ営ミ、或ハ七五三飾リ手掛ケノ具等ノ百般  
ノ正月儀式入用ノ品ヲ拵ヘ、下ハ三兩五兩ヨリ上ハ百兩  
二百兩千住近郷ノ百姓一家トイヘトモ正月ノ飾ノ品ヲ売リ出シ、  
品ヲ売出スモノ頭ラハ三百兩余ニ及ノ品ヲ売リ出シ、  
以テ商人等ノ貨幣ヲ農家ニ取り入レ、又ソノ金ヲ以テ年  
中ノ諸弘ヒ致シ、或ハ借財ヤ或ハ借財ノ利息ヲ払ヒ、或  
ハ両親ヤ小供ノ正月衣裳ヤ下駄・草履ナドヲ求メ、或ハ  
婦カノ帯ヤ湯巻キ着類等ヲ拵ヘ、或ヒハ正月ノ儀式ノ品ヲ  
整ヘ、節季仕舞仕り候フユヘ、農民ト商価ト銀主トノ三  
方ノ融通相開キ、双方立行キ可申仕法相立チ来リ候フ処、  
今度御改曆ニ就テハ農務ト元日節季ガ毛抜キ合ハセニ相  
成リ、尚ソノ上ヘ農務手後レイタシタルモノハ、農事最  
中ニ元日節季ガ来リ候フユヘ、節季仕舞ノ沙汰ドコロニ  
アラス、然トコロ農民ノ金詰カネツマハソノマ、商民ノ困窮ナリ、  
商価ノ品ハ農工ノタメニソノ店ヲ張ル故ニ、農民ノ金乏  
キトキハ商価随テ窮スルコト響ノ声ニ応スルカ如シ、別  
シテコノ節季ノ受ケ取渡シハ一年中ノ片荷ト相成ルホド

ノ大融通ナリ、因テコノ節季ノ受取り渡シハ一郷一県ノ  
 コト、イヘドモ、並ミノ融通ニアラス、況ヤ天下ノ  
 各府各県ニ亘ルコトヲヤ、五千万金ヤ七千万金位ノ融通  
 ノ塞ガリニハアラス、幾ンド一億万ニモ及フホドノ融通  
 ノ障リタルヘシ、尚冬至後僅カ十余日位ニテ節季元日カ  
 来ルトキハ、先ツ第一御不都合出来申スヘキハ農稅ニア  
 リ、ソノ仔細ハ農稅ハ富郷豪邑サヘモ、霜月限りニハ皆  
 濟ニ至リ兼候フ処、窮郷寒村ハ十二月大晦日ノ夜中ニ及  
 ビ、元日界ヒ至レトモ皆濟ニ至ルコト能ハス、其故ハ貧  
 人ハ一日凌キ仕リ候フユヘ、ソノ日々々々ガ暮シカヌル  
 苦シサユヘニハ、ソノ上納米ヲ密カニ或ハ売り、或ハ質  
 ニ入レルモノ多シ、ソレユヘ役方タヨリ雨ノ降ルホド敵  
 シキ催促ヲ受ケ、或ハ逃ケ出スモアリ、或ハ縛ラル、モ  
 アリ、故ニ不納ノモノ多キ処ニハ縛リ杭ヲ立テ、不納ノ  
 モノヲ縛繋スル例少カラス、右様ノ儀ハ豊年トイヘトモ  
 免レザルモノアリ、況ヤ凶年ヲヤ、然ニ凶年ニモ大中小  
 ノ三種ノ凶年アリ、ソノ中凶年小凶年マデハ豊年並ミニ

御上納ノ儀ハ一合引カズニ御取立テニ相成リ、而シテ作  
 方<sup>カ</sup>ハ上納米ニサヘ足ラス、然ルトコロ御取立テハ敵シケ  
 レトモ、固ヨリ上納米ニサヘ不足スルホドノコトユヘ、  
 如何ホド御催促ヲ受ケテモ整ハス、実ニ謂ハレサル混雜  
 ニ及ビ、不<sup>コト</sup>得<sup>レ</sup>止<sup>ル</sup>。敵酷ナル役方タノ処置ニ相成リ、ソ  
 レヨリ貧民申シ合ハセ、役方タ<sup>ダ</sup>泥<sup>ダ</sup>ニ叩キ込ミ、或ハ暗  
 打イタスコトニモ至ルヘシ、右ハ是レマデ元日ト農務ト  
 ノ間タニ極月一ヶ月ホドノ農暇アリテ、農民ノ金ネ作り  
 スヘキ内職イタサレル時サヘ如<sup>レ</sup>此、況ヤ冬至後僅カ十  
 日余ニテ元日ト相成リ、節季ヲ越エ元日過キテ御上納御  
 取立ト成行キ候ハ、中人已下ノモノハ、ソノ上納米ヤ上  
 納金ヲ節季仕舞ノ入用ニツカヒ込ミ、如何ホド敵シキ御  
 催促タリトモ力ヲ及バサルトコロヨリ、遂ニ下々ノ御役  
 方タニテ敵酷ナル振舞自然ニ起ラサルコトヲ得ス、  
 年<sup>コト</sup>ノ<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>詠<sup>ム</sup>ヘカラス、大、ソレヨリシテ下必ス上ヲ怨  
 望シ、怨言スルニ至ル故ニ、民間ニ頒施シ玉フ曆ハ大陰  
 曆ヲ用キサセラレ、今般御改曆ハ天学者ノ上ニ御用キニ

相成り度、左様相成り候ハ、御改曆ノ廉モ被爲立、又民間ニモ障リナキコトニ相成ルヘシ、或ハ真ノ大陽曆冬至ニ至ルヲ以テ一年ヲ定ルヲ真ノ大陽曆トスヨリ儀モ亦然ルヘシ、今般ノ御改曆ハ名ヲ施サハ前ニイフ如ク、恒星曆トイフヘシ、実ハ大陽曆トハ申シガタシ、天文学家ニテハ日月星トモニ西行ヲ主トセス、東行ヲ以テ曆算ノ概要トス、月ハ二十九日半余ニテ東行一周天シ、日ハ三百六十五日六時ニテ東行一周天シ、恒星ハ二万五千九百二十年ニテ東行一周天ス、ソノ月ノ東行二十九日半ノ日数ヲ十二ヶ月ヲ合セテ一年ヲ定ムルヲ大陰年トシ、又日ノ東行三百六十五日余ヲ二十四氣トシテ一年ヲ定ルヲ大陽年トシ、又恒星ノ東行二万五千九百二十年ヲ以テ、ソノ一年丈ケノ東行ノ数五十一秒ヲ歳差トシ、今年ノ歳差ヨリ明年ノ歳差歳差トハ恒星ノ年々東行ノ里数ナリ、之ヲ二万五千年余ヲ積テ恒星夫ヲ東行一周廻スニ至ルヲ恒星年トス、大陰ノ東行ニ就テ立ルヲ大陰曆トシ、大陽ノ東行ニ就テ立ルヲ大陽曆トス、コノ理ヨリ推シテイハ、恒星ノ東行ニ就テ一年ノ曆ヲ定ルハ、是レ恒星

曆トイフヘシ、タトヘ八月ハ毎月東行一周天スルニ、洋曆ニ於テ出入月ト周天月ト恒星月ト高卑月ト併月ト申ス五箇ノ月名ヲ立ツ、ソノ中ニ恒星ノ東行ニ就テ月名ヲ立ルヲ恒星月トイヘル例ヨリイハ、恒星ニ就テ年ノ名ヲ立テ曆ノ名ヲ立ルハ、屹度恒星年恒星曆トイフヘシ、コノ恒星曆ハ毎年恒星ノ運行ニ差ヒアルユヘ、之ヲ西洋曆ニ運行年トイフ、タゞ独リ万代差ハザルモノハ廿四氣ヲ立ルトコロノ大陽曆ナリ、故ニ大陽曆ニヨリテ春分ヲ以テ元日ト御定メニ相成り候ハ、春分ハ氣候モ不寒不熱百花遍ク開キ、草木萌芽ヲ伸ヘ、且ツ農時ニモ障リナン、又大陽曆ノ名義モ正ク相立ヘシ、去リ乍ラ祖先ヲ祭ルコト大陰曆ニ及クハナシ、カノ耶蘇ノ国ハ祭祀ヲ立ザル処柄ユヘ、祭日ノ動不動ニ關係ナケレトモ、祖先父母ノ追孝ヲ重ンスル国ニアリテハ、祭日定マリアリテ動カサルヲ貴フヘキニ如カス、是レ一時頑固ニ似タレトモ、常日ヲ失ヘハ常心ヲ失フニ至リ、終ニ祭日ヲ忘レ、終ニ祭祀ヲ廢スルニ至リ、ソレヨリ却テ耶蘇ヲ進ムルノ端ヲ開ン、

前來不肖ヲ顧ス御改曆ヲ妄議シ奉ル罪百磔ヲモ購ヒカタシ、惟伏シテ

仁恕ヲ乞ヒ奉ル、誠恐誠惶謹言、

申十一月

冊子原寸 縦二四・七種 横一七・五種 一〇枚

一蓋 西郷隆盛ヨリ久光公ヘノ謝罪上書

私儀

御巡幸之砌供奉被仰付、御当地御滞在中ニハ是非

御機嫌伺として拜謁可奉願処、等閑ニ罷過候義、全朝官

ヲ甘し再生之御鴻恩忘却仕候場ニ立至、

御嫌忌を奉蒙候仕合、実ニ恐懼之次第御座候付、如何様

共其罪を可奉謝賦ニ而罷下候付、右之段宜敷被仰上被下

度奉願候、以上、

十一月

西郷吉之助

文書原寸 縦一六・三種 横六八種

一五蓋 「ニコライ」教信者ノ氏名ト動靜

露人「ニコライ」著「洗礼式」

右二冊

一九五五ノ一

宮城県士族

大島文輔

壬申十一月廿八日ニコライ事情 真山 某

右兩名生徒數十人誘引登京ニコライへ入舎但県地ニテ修業ノ者共也

水沢県参事増田

右平生ノ説ニ曰、民ヲ治ムルニ耶穌ニ過タルハナシト、

県下へ示教スルコト、同人從弟宮城県士族何某ノ話也、

此者ハニコライ方ニ在リ、但増田ノ宗学フロテスタント

教也、

中津ノ人

中村矯一郎

右ノ者高橋兵三郎・水科清ト同行、九州ニ発行ス、從生

三四名ト十二月二日第一時品海出帆ス、

第一月十六日報知ノ内大坂事情

一大坂天主堂埋伏仕罷在候浦上元助ト申者有之、同人之

悴先年より奈良県ニ罷在候ニ付、頃日悴見舞トシテ罷

越候処、県吏付送、坂府ニ而捕縛ニ及候、就而ハ教師

クウサン外務局へ屢応接仕事ニ御座候、子細ノ事情ハ聞得不申、定テ奈良県より言上ニ可相成候、就夫米利堅教師も甚苦心中也云々、

一第七月七日影山耕三ノ話ニ学校ヲ立ル等社ヲ結び、凡人計入社セリ、各開化ノ手伝ノ積也、近日ハバイブルヲ信迎シ、某杯ハ不及程也云々、

一学校生徒六十人ニ及ヘリ、塾屋狭キニ付近日大宅ヲ借受ル積リ也、又第五月ヲ期シテ、別ニバイフル塾ヲ開ントス云々、

一関忠三近々大坂ギヨリキニ来住ス、同人曰、開化ノ助ケト存シ教師ヲ入京サセントセシ処、不計幽囚サレタリ、然シ大概官ノ御所置振ハ知レタリ、此上ハ身命ヲ擲テ尽力スル心得也、朋友共ヨリ神戸へ来レト申セトモ、大坂ハ第一官員ニ知己多ク、殊ニ藤村ト別懇ユヘ、ヒソカニ示談シ、十分恢張ノ策ヲ運ハン、且官員ノ救助アレハ自然ノ災モ無之、願クハ足下ト同心協力シテ

横浜同様ニ開度モノ也云々、

ニコライ塾事情ノ内

一酉一月六日エビバンヤ耶蘇降世十三日目ニ東方より三皇来朝ノ日大祝日ニ付、

宮城南館義十郎・岩手仙岩石岩古青木秀俊ト改名セリ・宮城窪田敬

止授洗、

一同夕六時ヨリ十時マテ放遊ノコト、

一同七日司教来泊ス、

一同八日司教生徒ヲ慰撫ス、暫時説論、陸軍始ニ付放学

ス、

一教法大略成功ノ徒ニハ語学伝習セシム、宮城佐久間健

治・宮城今泉三之助・宮城目黒順蔵外来生一人、七日

ヨリ相始ム、

一同九日宮城県勝田京之・沼辺悦三郎・北岡幸三郎・坂

本清各々廿以下四名宮城区竹内寿貞周旋ニテ入堂ス、

一同十二日浜松県内藤正道三四五才之蕃臣ニ番丁辺住居ノ処、土地以來四ツ谷辺住居ス入堂

ス、是レハ未年横浜より箱館迄マリント同船セシ因ヲ

以テ来ルコト、



一同十五日石川利政旧町奉行石川河内守ノ子也細淵源一郎ノ周旋ニテ入門ス、

第一月廿二日ノ内大坂報知也

一 関忠三曰、昨春教師ヲ西京ニ入込度存、内々知参事ニ説キ、語学ト唱ヘバイブル習読ヲ始メシニ、東京監察ヨリ申来リ、忠三国禁ヲ犯セシト申立、知参事モ承知ナレトモ、公法ナレハ不得止幽囚セラレタリ、幸所持ノ書類ギヨリキニ預置シユヘ、漸申訳相立タリ、然シ官ノ御所置実ハ不得止ニ出シコトナレハ、恐ル、ニ及ハス、私モ一度幽囚ヲ被リシ上ハ、已来勝ヲ定テ尽力スル積也、

一 又曰、藤村参事ニ近日内談致置、又外務局ノ藤田ハ從弟ナレハ、是亦示談スル積也、

一 ウリヤムス曰、私長崎ニテ洗礼ヲ授シ人、東京ニテ逢シニ、此人今ハ非役ナレトモ、(具視)岩倉公婦朝ノ後ハ必用ヒラレント云ヘリ、尚フルヘツキニヨクノ談シヲケリ、フルベツキノ話ニ、教部省カ有テハ開化ノ妨故、

今度文部省ニ合併シテ、別ニ金モ出サス、追付教部ハ無ニスル上ノ役人衆ノ志也、

日本ノ政府切支丹ヲ黙許スル故、決テ怖ニ及ハス、五月ニハ必公然ト許テアロフト云々、

一 ウリ曰、此頃家ヲ吟味スレトモ未タ得ス、アナタノ名前テ借受、客人ニシテ置コトハ出来スヤ、成丈市中ニ住度思ヒマス、松島ノ竹林寺ヲ借ル約束セシカトモ、婦人共カ嫌テ陰気也ト云々、

一元明石藩丹羽羽東太郎十四五才大坂舟越丁金子ノ塾ニ居シカ、此比モリスニ付テバイブル習読ス、モリス神童ト云テ寵愛スルコト限リナシ、

一 今井曰、石ツチ県ノ清水ロサイト申医師昨秋マテ横浜ニテパラニ就テ学シカ、ヨホト厚信ノ者也ト云々、  
一來廿日ヨリ夜講ヲ始ム、発起ハ関忠三・中村喜一・今井正胤・カコシマハン種島三七也、不遠シテ学校ヲ造立シ、モリス・メラ一午前語学教授、ウリヤムス午後聖書ヲ説、大ニ生徒ヲ集ル積也、

一十三日天主教師クウサン或人ニ語テ曰、二三日前ニフランス国ヨリ来状ニ、日本芝田敬藏ト申者、本願寺ノ和尚ト同道尋来道ヲ聞、和尚ハ外国ノ教法ヲ知ン為ニ来由ナリト申越セリ、芝田ハ石州ノ人弗<sup>（弘カ）</sup>学生ナリ、一影山耕三八元越前糸魚川禪宗ノ僧也、中村喜一ハ同処浄土宗ノ僧ナリ、

一浦上元助、昨十七日大坂府ヨリ司法省ヘ引渡ノ由ナリ、  
仏教師大ニ激怒シ、屢外務局ヘ申出ル由ナリ、

#### 第一月廿七日ノ内ニコライ塾事情

一第一月十八日函館在留教アナドリー沢辺数馬同伴着京ス、

一近来箱館ニテカトリキ教日々盛ニ相見ヘル由、因テ彼ニ先ヲ越サレンコトヲ恐レ、今般衆議ノ上河田安照・田手喜右衛門并小野庄五郎ノ姪某婦人、右三名ヲ市中伝教ノ為メ箱館ヘ遣スニ決ス、依テアナドリー・沢辺来ル、二月一日発足ノ積也、

一教徒等所持ノ書物各国列名ノ処、皇国ヲ敬シ大日本

ノ大ノ字ヲ平出シアルヲ、此大ノ字ヲ残ラス墨ニテ塗滅シアルコト、

一同廿日戸長ヨリ生徒寄留ノ儀申来候ニ付、黒沢森春ヲ使者トシテ、仏公使館付属地マリシ・ミドン隨身廿三人ト認メ差出シ候コト、

同廿四日水沢県曾根鶴隆入門外来ス、

同廿六日教師ミトン長崎ヘ為助教横浜ヘ出港、廿八日

便ヨリ長崎ヘ下ルコト、

#### 第三月十八日ノ内横浜事情

一三月十六日午後ノ会席ニ於テ、教師バララ咄シニ云ク、私シ近日奇代ノ事ヲ聞マシタ、其事ハアメリカミニストル本国ヨリ免職帰国ノ事申来リマシタ、表ニ罪科ヲ云ハス、唯婦レトノ事ユヘ皆々大異シミ、カ、ル善キ人別シテ其職ヲ守リ、日本ノ開化モ此人ノ力ナリト云位ニ評判モヨキ人ヲ、ナゼニ免職スルゾト云フ所ニ、妙ナル処ヨリ其免職ノケ条カ知レテ、皆々肝ヲツフシマシタ、其ケ条ト云ハ外ニモ少ノワケカアレトモ、第一

ノ罪科ハ、先達テヘボン先生ノバイブルヲ日本朝廷ニ  
 献上セシ世話ヲ致シマシタ、其事ヲ第一ニ咎メマシタ、  
 其事トフトシテ分リタナレハ、アメリカニテ或役人カ  
 森弁務使<sup>(有也)</sup>ニ向ケ此事ヲ話シマシテ、夫故森公カ甚タ氣  
 之毒ニ思ヒ、直ニ日本ニ報知シテ、此事ニ付免職ナレ  
 ハ、日本ヨリ早ク挨拶ノ書ヲ達シ玉ヘト申シマシタ、  
 夫故日本政府ヨリアメリカ政府ヘ手紙ヲ遣リマシタ、  
 アメリカ政府ハ日本禁制ノ朝ニ、強テコレヲ納メシコ  
 ト我政府ノ沙汰ナクシテ、私シノ所置甚タ宜シカラス、  
 日本ニ対シテ無礼也、故ニアメリカ政府ノ意ニ非サル  
 ヲ顯ス、日本政府ニ諂フノ意テアリマス、我國ノ政府  
 テアルナレトモ謗ヲサルヲ得ス、甚タツマラスコトテ  
 コザル、アメリカ政府ハ大ニ神ノ道ニ背キ、却テ日本  
 ノ方善クナリマシタ、今度アメリカ政府ノ所置、外国  
 ニ対シテ大ニ恥ツヘキ事ナリ、其故ニ私共ノ仲間ヨリ  
 モ何卒ミニストル帰職致スヘク歎願ヲ致シ、且ツ横浜  
 居留ノアメリカ商人ヨリハ伝信機ニテ歎願ヲ致シマシ

タ、ミニストル大ニ人望ヲ得タリ、ナゼナレハ此人罪  
 トコロテハナク、善キ事ヲ致シマシタ、ナヲコレノミ  
 ナラス、総テ日本如是早ク開化スルコトモ皆此ノ人ノ  
 助ケニテ、先達岩倉殿西洋巡廻ノ事デモ、此節副島卿<sup>(龜思)</sup>  
 支那行ノ事ニ至ルマテ、其外ミナノ日本ヲ助ケマス、  
 其上英國ノ商人迄ガ此人ヲ惜ミマス、此間英國ノ両替  
 屋ナル者、此義ニ付アメリカ政府ニ歎願致シマシタ、  
 ミニストル云ク、アナタ英國人ニテ何ソ我免職ヲ惜ム  
 ヤト問マシタレハ、英人云ク、君アリテ今日日本政府ヲ  
 助ケスンハ、日本政府今時至テ殆キ時ナリ、今日日本万  
 一混雜セハ、我等又安スル能ハス、夫故ニ我君ノ免職  
 ヲ惜ムト申シマシタ、其位ノ人ヲ罪スル、实ニアメリ  
 カ政府ノ大罪テアリマス、アメリカノ人ニ戯レニアメ  
 リカ政府ヲ捨テ、日本ニ就クヘシト申シマス、又云ク  
 日本初メハ至テ穩ニ格別難ヲ受ル人モナク易ク開ケマ  
 シタ、全ク日本ノ国力ノ弱キカ大ナル道ノ幸テコザル、  
 然シナカラ此后大方教法ノ事テ政府モ困ル程ノ騒動カ

起カト、今ヨリ恐レマス、夫故アナタ方聖書ニ云フ如

ク身命ヲステ、耶蘇ニ忠ヲ尽サネハナリマセヌ、

又云、ミニストル思フニハ、此度琉球ノ一件ニテハ軍

カ起ルカモシレヌ、然シコレハ日本ノ大幸ナリ、今日

本ノ形勢若シ外難ナクハ、必ス内乱カ起リマセウ、内

乱アルヨリハ外ニ争端ヲ開クコト日本ノ幸テアルト思

ヒマス、又日本ニハ五年ノ後必ス教ノ軍カアリマセフ、

然シ夫レニテ日本八分ハ耶蘇ニナリマセフ、

第四月十七日ノ内ニコライ事情

一北条県浜崎某出堂ス、

一本国ヨリ司教本月一日来泊ス、

一本月五日宮城県竹内祐平・多田清他兩人是迄横浜天主

堂ニテ仏学致居候処、今般教法公許ノ浮説ニ付、教学

不熟ノ間マリシニ入堂ス、

一明十三日ハヤソ復活大祝日ニ付、生徒教習ノ厚薄ニヨ

ラス、十二日二十六名洗礼ス云々、

岩手県 村木 正仮父宮城県 今泉三ノ助  
三十一

府下 能勢房之助 十三才

大津県 徳田道三郎 十三才

岩手県 原 敬 十七才

宮城県 水野 某 十七才

服田 某

岡山 某 十九才

沼辺祝三郎 十九才

岩手県 於曾半十郎 二十才

宮城県 黒沢森春 二十一才

府下 台 橋市 十八才

府下 石川利政 十九才

群馬県 内山 操 二十才

宮城県 北岡 某 十八才

府下 竹内夢覚 凡五才

新川県 上村善藏 凡六才

十六名

窪 敬止

佐久間健寿

青木秀俊

目黒順蔵

竹内祐平

多田清他

支那産  
ピーチャン

一初学ニテ当日洗礼除ク者、入堂ノ者四人外来生七八名

入堂徒名前左ニ

一府下 内藤正道

凡三十才

一群馬県高木信忠

凡十八才

一群馬県吉木和三郎

二十才

一若松県小野木四郎

六才

一同日新航海司教来泊ス、

第四月十九日ノ内大阪事情

一教師メラー同妻な女教師某ノ十五日入京ノ覚悟也、中

村規一随伴、去歳ギヨリキ一策ヲ追、西京在住ノ志願

也、速ニ中村ヲ錮セスンバ後害ヲ醸セン、中村ハ越後

糸魚川ノ産、浄土宗ノ僧也、少ク仏理ヲ知り、佞媚狡

猾、ギヨリキ・ウリヤムス兩幅間ニ周旋、生徒ヲ誘ヒ

教師ヲ扶ケ邪徒ノ先導タリ、

一ギヨリキ和語稍々進、此頃日曜日ニ説教ヲ始ム、其式

横浜バラノ公会ノ如シ、中村規一其説録ヲ草ス、

一頃日関忠三放逐セララル、初忠三西京ノ婦ヲ娶ル、共与

ニギヨリキニ給仕ス、此頃故ナクシテ妻ヲ出シテ更ニ

新婦ヲ娶ラントス、ギヨリキ弁解懇望、忠三遂ニ肯セ

ズ、ギヨリキ大ニ憤怒シ、(恨)紀律ノ擧ヲ責、遂ニ拒絶ス

ト云々、

一関氏ノ教師ニ属スルヤ畢竟口腹ノ為ニシテ、真信ニア

ラス、狡猾可憎ト雖モ、渠レ等ハ邪徒ノ根拠ナレハ、

今觀流ノトキニ当テ活路ヲ与へ、至誠ニ弁解セハ必挽

回スヘシ、然ルトキハ中村規一・影山耕造・関貫三亦

随テ翻回スヘシ、教師腹心ノ徒一時翻心セバ、渠レノ

布教ニ於テ大ニ妨碍トナルヘシ云々、

四月廿一日ノ内ニヨライ事情

一追々宮城県へ出張セン、有志輩一兩名同伴スヘシ云々、

又佐久間・今泉上野・下総ニ周遊シ、災害ヲ厭ハス尽力

スヘシ云々、又某出張後ハ横浜教師来リ教授スヘシ云

々、又云、府下在住ノ徒ハ有志ヲ引入スヘシ、若シ彼

レ職業暇ナク来堂叶サル者ハ、遠近ヲ厭ハス運足シテ

懇懇ヲ尽スヘシ云々、

一同十七日若松県鈴木莊次郎十才宮城県渡辺常吉十八才

入堂ス、

一同廿日岩手県於曾半十郎帰県ス、旅費四円遣ス 一日金一分百

五十二、

一同岩手県村木正漢学家ニ付、横浜ニテ新潟教師ト同力

シテ支那訳聖書取調トシテ下港ス、

一群馬県内山操近々帰県ノ由、布教ノ為ナリ、

四月廿一日ノ内ニコライ事情

一三月三十一日宮城県柴田文吉・片倉某教法修学ノ為来

ル、

一四月一日水沢県柵瀬乎入門入塾、

一同二日愛智県古瀬伝入門入塾、

一同日下谷御徒町笹山某弟へ影田孫一郎弘教ノ相談ニ到

ル、其議ヲ柵瀬より聞ケリ

柵瀬・影田昔日、  
師弟ノ因アリ

紹介トシテ遠策ヲ司法省ニ回ラシ、勅懲黜陟ノ権アル

省ノ指ヲ以テ、無頼犯度ノ徒罪人ヲシテ耶蘇教ニ浸潤

セシメ、更ニ政府ノ権勢ヲカリ、不日此教ヲ海内ニ盈

溢シ、数十年ノ素志ヲ果サント云々、

一同五日高智県書生山村木郎来テ曰、ニコライハ魯国ノ

間使也トモ、諺ヲ以テニコライヲ詰問ス、且世間往々

足下非常ノ所作ヲ訝ル等ノ問答ヲナス、木郎帰テ後チ

ニコライ講堂ニ出テ歎息赤面シテ曰ク、実ニ無失ノ難

ナリト、怨ムル如ク謝スルカ如ク喋々タリ、而シテ頭

痛甚シト云テ其夜講ヲ廢ス、后チ生徒ヲ戒メテ云、斯

ル非言ヲ発ル者ハ長幼差別ナク即刻擯出セント云々、

一同六日宮城県ヨリ洗礼ノ為メ来リシ者四人授洗ス内二人女

子、

一同七日影田隆郎下総ニ到ル、新田ト云処小学校アリ、

此教師ニ就テ況景ヲ伺ヒ布教セント云々、

一同八日宮城県高橋某入門入塾、

一同日同県酒井某来、此人積年教法ニ随心ト云々、

一同日(境)崎玉県医師戸田徐平入塾、

一八日ヨリ芝辺ノ僧三人外来聴講、

一九日下谷御徒町笹山某前件ノ義ニテ来ル、

一十一日講義ノ時云、魯国ニテハ今モ往々奇蹟アリ、此

コトハ全積功自得ニアレハ深ク怪ムニ足ラス所謂妖怪幻、  
術ノ類也

一十二日講義後ニ曰、諸君勉強セヨ、五十年ヲ過スシテ此

教遍布セシコト必セリ云々 或書生曰、魯国ニテ大司祭ハ祭師、又ハ聖堂ニテハ位皇帝ノ上ニ居ス、司祭亦天子ノ上ニ列ス、又在官人ノ処置シ難キ事件且大事ニ遇ヘハ、大司祭・司祭合議シテ之ヲ決断ス、天主ニ祈テ決スルコト故、之ヲ違背スル者ナシト云々

一十四日夜勿殺人ノ句ヲ講ス、曰、君父ノ仇ト雖モ復報スル勿レ、若シ殺サハ天主ノ命ニ背クコト大靈魂遂ニ墮獄ス、日本ニテ如是挙止ヲ美事トス教ノ弘ラサル過チナリ、仇ヲ報セスシテ却テ彼等為ニ天主ニ祈禱シテ可ナリ云々、講義畢テ議論紛紜タリ、半ハ服半ハ服セス、一十五日朝講ニ云、有限人智ヨリ制シタル神儒仏ノ如キ用ユヘカラス、全智全能限ナキ智ヲ有シタル天主ノ法ニ非サレハ、人智ヲ活発スル能ハスト破弁、到ラサル所ナシト云々、

一十六日宮城県鈴木帰県ス、ヤソノ像ヲ受テ歎ヲ極メ去ル、

一十七日生徒野々山 元本庄高橋亭ニ寄偶スル者 語云、高橋周旋ニテ近日学校ヲ立ルナリ、入費云々、ニコライ死後ノ墳墓ヲ預築スト云、△三位一体ノ意ヲ表ス云々、或生云、彼レ

千里ノ怒濤ヲ除ヘ來テ、此地ニ遊ヒ、剩ヘ墳墓ヲ准備シ （總） 畢命ヲ期スルヲ示スモノハ、其心衆ヲ得ントスルニ有テ、本心ニ非サル必セリ、深ク察スヘシ、

一同日柴田文吉函館ヘ登船ス、費用衣服都テ教ノ為ニ外出スル者ヘハ、悉皆教師ヨリ給之、

一同十七日受洗ノ者十三人其儀式云々、

一同十八日佐藤ト外出、或茶店ニテ憩息中、他県ノ産ナレハ宮城県ニ到テ弘教セヨト云ヘリ 但同県ノ人ナレハ從前難シトノ意ナリ 教信ヲ取ルコト、

一同二十日復活ノ祭儀有リ、後ニ卵ヲ一ツ、教徒ニ与表シアリ、葡萄酒・餅・牛肉等ヲ百名ニ向タル生徒ニ悉ク配与ス、

一上旬ヨリ門標ヲ掲ク、  

魯國公使付屬館 司祭ニコライ
-------------------

  
冊子原寸 縦二七・七釐 横一九・五釐 一八枚

洗礼式

」

神ト仏トノ虚宗ニ属スル成人惟一聖公宗徒ノ教会ニ就テ、而シテ実ニ之ニ合センヲ欲スル者ヲ接シ入ル、規式

問 爾ハ誰ナル乎、

答 救贖ノ道ニ迷ヒ、神ト仏トノ虚宗ニ大ニ昧マサレシ人、

問 何ノ故ニ天主ノ聖教会ニ就ク、此レヨリ何ヲ受ンコトヲ欲スル、

答 天主ノ聖教会ニ就クハ、此ヨリ実宗ヲ学ヒ又タ此レニ体合センコトヲ望ム、

問 実宗ハ爾ニ何ヲ与ヘントスル乎、

答 永生ヲ、

問 此ノ<sup>(ヘリネストス)</sup>合懺スノ聖ナル潔淨ノ宗旨ヲ実ニ中心ニ受ケ、

之ヲ学ヒ命ヲ終ルマテ不退ニ之ヲ持シ、且ツ合懺斯提

阿尼ノ諸徳ニ慣レ及ヒ、死スル迄之ニ居ルヲ望ム乎、  
答 実ニ中心ニ此ノ聖ナル宗旨及ヒ合懺斯提阿尼ノ諸徳

ニ慣レ、且ツ此ノ兩ツノ者ノ内ニ天主ノ聖寵ヲ以テ命ヲ畢ルマテ居ルコトヲ望ミ、且約ス、

問 首メニ爾チニ問フ、天主ニ悖ルノ神ト仏トノ宗及ヒ其ノ諸々不潔ノ思量ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、

答 天主ニ悖ルノ神ト仏トノ宗及ヒ其諸々不潔ノ思量ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 万ノ神ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、  
答 万ノ神ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 其ノ万ノ神ハ山海ヲ生ミ、河嶽ヨリ人ノ住所及ヒ人間万民ニ至ルマテヲ司ル等ノ偽説ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、

答 此ノ偽説ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 神道ノ諸祓及ヒ祈禱神楽其ノ外諸々妄宗ノ行事ヲ人ノ靈ヲ害スル者ト悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、



答 (頭註ニアリ、朱)「本書誤脱テラシカ、故ニ朱字ヲ加ヘテ私ニ補之」  
神道ノ諸祓及ヒ祈禱神樂……悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 謂所ル先聖先師ヲ祭ルコト陰陽鬼神等ノ偽説ヲ悉ク

祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、

答 悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 諸仏菩薩及ヒ其ノ出現ノ妄説ヲ祛テ且ツ之レヲ詛フ

乎、

答 諸仏菩薩及ヒ其ノ出現ノ妄説ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛

フ、

問 其諸仏菩薩三世ヲ司トルノ事、人ノ再世・因果・極

樂・地獄等(先)「獄カ」ノ偽説ヲ悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ乎、

答 此ノ偽説ヲ悉ク祛テ且ツ詛フ、

問 一切ノ仏経及ヒ仏法ノ祈禱修法引導、其ノ外諸々ノ

妄宗ノ行事ヲ人ノ靈ヲ害スル者ト、悉ク祛テ且ツ之

ヲ詛フ乎、

答 皆ナ此ノ靈ヲ害スル者ト悉ク祛テ且ツ之ヲ詛フ、

問 天主ニ悖ル所ノ不潔ノ神ト仏ト之ノ宗諸神諸仏及ヒ之

ニ属スル巨細ノ教悉ク既ニ祛ラレシヤ、且ツ之ヲ詛

ヒ及ヒ之ニ唾スル乎、

答 天主ニ悖ル処ノ不潔ノ神仏ノ宗諸神諸仏及ヒ之ニ属

スル巨細ノ教悉ク既ニ祛テ且ツ詛ヒ及ヒ之ニ唾ス、

問 實ニ毫無疑ヒナク二心ナク靈ヲ全シ、心ヲ全フシテ

眞実ナル主伊々蘇斯合懃斯托斯ニ体合センコトヲ欲

スル乎、且ツ伊レ實ニ生活ノ天主ノ子タルヲ信スル

乎、

答 實ニ毫無疑ヒナク二心ナク靈ヲ全シ、心ヲ全フシテ

眞実ナル主伊々蘇斯合懃斯托斯ニ体合センコトヲ欲

ス、且ツ伊レ實ニ生活ノ天主ノ子タリト信ス、且ツ

伊レ吾レノ造物者及ヒ救者タルニ服拜ス、

問 吾主伊々蘇斯合懃斯托斯天主ノ眞ナル独一子聖言無

始ヨリ父ニ生ル、者、人ヲ救フカ為ニ地ニ降り、

聖神ノ威力ニ因テ永童女瑪竇亞(マリヤ)ニ体ヲ仮リテ、而シ

テ其ノ天主ノ性ヲ脱セスシテ眞ノ人ト為リ、斯ク一

位二性ニ易リナク交混ナク、一トシテ天主ノ子及ヒ

人ノ子眞ノ天主及ヒ眞ノ人タル等ヲ信シ認ル乎、

答 皆ナ是レ此ノ如ク信ス、且ツ疑ヒナク認ム、

問 吾カ主伊々蘇斯合懽斯托斯万民ヲ救フカ為ニ事ニ遁  
マルニ非ス、乃チ自由ニ因テ虚像ナルニ非ス、乃チ  
実ニ其ノ体ニテ苦ミヲ受ケ、其天主ノ性ニテ苦ミニ  
染マス、又タ実ニ人ノ性ニテ死シ瘞ラレ、三日ニシ  
テ其天主性ノ権力ニ因テ復活シ、其体ト共ニ天ニ昇  
リ、天主聖父ノ右ニ座シ、彼コヨリ復將ニ生死者ヲ  
審判スルニ来ラントス、而シテ後チ永世ニ王タリ、  
彼ノ国ハ終リナカラン等ヲ信スル乎、

答 咸ナ是レ此ノ如ク信ス、且ツ実ニ中心ヨリ認ム、

問 吾カ主伊々蘇斯合懽斯托斯其天主ノ権ニ因テ、聖体  
ノ機密ヲ立法シ、吾儕此ニ於餅酒ノ形ノ中ニ  
合懽スノ真ノ体血ヲ領食シテ、以テ其教会ノ真ノ百  
体ト為リテ罪ヲ赦シ、靈体ノ聖ナルコト及ヒ永世ノ  
嗣タルヲ得ル等ヲ信シ、且ツ認ムルカ、

答 信シ及ヒ実ニ中心ヨリ是ノ如キヲ認ム、且ツ自ラ此  
ノ天主ノ機密ヲ領食センコトヲ望ム、

問 爾チ受ケンコトヲ欲スル所ノ聖洗ノ機密ハ諸罪ノ実

ヲ淨メ、且ツ神ニ於ルノ生レナリ、信シテ之ヲ受ル  
者ヲ之レ沈淪ノ子ヨリ天主ノ子及ヒ天国ノ嗣ト為ス  
等ヲ信スル乎、

答 聖洗(未)受ルトアラン本書脱スヲ事ヲ是ノ如ク信シ及ヒ認ム、且ツ自カラ厚ク

之ヲ受ケンコトヲ望ム、

問 至聖童女瑪竇亜其ノ体ニテ

合懽斯托斯吾カ天主ヲ生ム者義ニ応シテ天主ノ母ト  
称ス、故ニ聖寵ニ因テ合余 耶魯微木及ヒ撼肥木ヨリ尊貴  
且ツ上高タリ、又母タルヲ以テ其ノ子吾天主ニ大ニ  
侃々トシテ我儕ノ事ヲ祈禱シ、其ヲシテ我儕ヲ矜恤  
セシム、是ヲ以テ正教ノ衆人宜シク諸ヲ諸々ノ聖人  
ヨリ大ニ尊ヒ、且ツ拜シ並ニ彼等ニ代テ祈禱セシメ  
ンカ為メニ、謹テ之ヲ顧ヘキ等ヲ信スル乎、

答 咸ナ是レ至誠童女天主ノ母瑪竇亜ノ事此ノ如ク信シ、  
及ヒ是ノ如ク認ム、且ツ此レレ天主ノ母タルヲ尊ヒ之ニ  
拜シ並ニ我ニ代テ祈ラシメンカ為メニ謹テ之ヲ顧フ、

問

宗徒先知聖師合懽斯托斯ノ名ニ因テ命ヲ致セシ者、  
苦ミヲ受ケシ者並ニ諸々聖人、合懽斯托斯天主ヲ伝  
テ之カ悦ヒヲ成セシ、聖教会ニ尊ハレ及ヒ祈禱ノ中  
ニ籲ハル、者、実ニ天主ノ聖且ツ忠ナル僕、之レノ  
役及ヒ之ノ親シキ者ナリ、今天ノ第宅ニ楽シンテ彼  
等恒ニ合懽斯托斯ノ教会ニ属スル衆人ノ為メニ祈ル、  
故ニ正教ノ衆人宜シク彼等ヲ尊トヒ、且ツ籲フヘキ  
等ヲ信スル乎、

答

天主ノ諸々聖人ノ事是ノ如ク信ス、彼等ノ天主ノ親  
シキ者役並ニ忠ナル僕タルヲ尊フ、且ツ祈禱ノ中ニ  
彼等ヲ籲フ、

問

四ノ福音経並ニ新約ノ他経ト旧約ノ諸経トノ天主、  
聖神ヨリ人ニ黙示セラレテ作ラレシ者ナルヲ信シ、  
且ツ認ムルカ、之ヲ聖ナリ及ヒ救ヒニ肝要ノ者タル  
ト受ケ並ニ口親スル乎、又タ之ヲ受ケス及ヒ不虔ニ  
誹謗スル者ヲ祛テ且ツ詛フ乎、

答

四ノ福音経並ニ新約ノ他経ト旧約ノ諸経トノ天主ヨ

リ人ニ黙示セラレシ書キ物ナルヲ信シ及ヒ認ム、之  
ヲ聖ナリト受ケ尊ヒ、且ツ口親ス、之ヲ受ケス並ヒ

ニ誹謗スル者ヲ祛テ且ツ詛フ、

問

宗徒及聖神師ノ教、教会ノ聖ナル機密並ニ悉ク偏地  
公ノ教会ノ持スル所ノ成法ト祈禱トヲ聖ナリ、及ヒ  
救ヒニ肝要ノ者タルト信シ、且ツ認ムル乎、並ニ之  
ヲ受ル乎、

答

威ナ是レ聖ナリ、及ヒ救ニ肝要ノ者タルト信シ認ム、  
且ツ之ヲ受ク、

問

吾カ主伊々蘇斯合懽斯托斯体ニテ釘セラレシ所ノ十  
字架ハ已テニ詛ヒト死トノ器ニアラス、乃チ自由永  
世及ヒ魔ト死トニ勝ツノ号ナリ、此ノ請ケ及ヒ画シ  
ハ此レニ釘セラレシ所ノ合懽斯托斯ノ力ニ因テ魔  
ヲ驅テ、正教ノ者ヲ其ノ邪逆ノ羅ニ脱スル等ヲ信シ  
且ツ認ル乎、

答

主ノ十字架ノ事是ノ如ク信シ且ツ認ム、此ノ救ノ号  
ヲ以テ己レヲ魔ノ羅ニ防ク、而シテ十字架ニ釘セラ

レシ所ノ合懺斯托斯天主ノ力我ヲ此ノ羅ニ救ヲ信ス、  
 天主ノ聖主ノ聖言ノ体ニ於テ世ニ顯ハレシコト、又

タ天主ノ聖母天神及ヒ諸々ノ聖人ヲ像トル所ノ尊像  
 ハ、実体ヲ像トリ及ヒ尊敬スヘキ者ナリト受ケ尊ヒ

口親スル乎、之ヲ不虔ニ偶像ト名ツクル者ヲ祛ル乎、

答 天主ノ聖言ノ体ニ顯レシコト、天主ノ聖母天神及ヒ

諸々ノ聖人ノ尊像ハ、尊敬スヘキ者ナリト受ケ尊ヒ

口親ス、之ヲ受ケス且ツ偶像ト名ツクル者ヲ不虔ノ

者トシテ祛ツ、

問 威ナ之ヲ是ノ如ク認ムルハ実ニ心ヲ全シ、靈ヲ全シ

願ヲ全シテ靈ヲ救フカ為ニスル乎、実ニ毫モ謫リ無

フシテ合懺斯托スノ宗ニ就キ及ヒ救ヒノ洗ヲ受ンコ

トヲ望ム乎、

答 認メシコトハ実ニ是ノ如ク我ノ心ヲ全フシ、靈ヲ全

フシ願ヲ全シテ認ム、及ヒ命ヲ終ルマテ認メシコト

ヲ約ス、実ニ毫モ謫リ無フシテ合懺斯托スノ宗ニ就

キ、救ヒノ洗ヲ受ケンコトヲ望ム、

教主曰、若シ是レ実ナラハ則チ爾チ就キシ所ノ主天主ノ

前及ヒ衆教会ノ前ニ誓ヲ以テ爾カ言ヒシコトヲ堅メヨ、

此人読ムコトヲ能セス、則左ノ書物ヲ手ニ持シテ読ム、不学ノ者ナレハ、則チ其ノ代父或ハ奉隊ノ中一人、徐々トシテ読ム、次第ニ其ノ人

就テ口ツカラ辭ゴ  
トヲ確ト復シ言フ、

我レ某シ今神仏ノ不法ヲ祛テ、合懺斯托スノ宗ニ就ク者、

当時認メシ所ノ見サルコト無ク、知ラサルコト無キ主天

主ノ前及ヒ其ノ聖教会ノ前ニ將ニ言ハントスル所ヲ実ニ

認ム、及ヒ誓ヲ以テ此ノ我レノ認メラ証ス、即チ何レノ艱

難或ハ窘急ニ逼ルヲ以テスルニ非ラス、何レノ利益ノ為

メニ非ラス、又タ詭譎或ハ二心ヲ以テスルニ非ラスシテ、

我レ今天主ニ悖ル不法ノ神仏ノ宗、及ヒ悉ク之ニ関スル

所ノ教ヲ祛ツ、而シテ合懺斯托スノ救ヒヲ施スノ宗ニ就

キ認メシコトヲ是ノ如ク認メ並ニ信ス、乃チ合懺斯托ス

ノ宗ノ真実ニ勝レタル我カ靈ヲ救フカ為メ、且ツ全心全

靈ニテ合懺斯托斯天主救世者ヲ愛シ、又タ凡ソ聖父聖子

並ニ聖神三位ニシテ一ナル天主ヲ信セサル者ハ、永遠ニ

沈淪スルヲ確ニ知テ、

合懃斯托斯ノ宗ニ就キ、合懃斯提阿尼ト為ルヲ願ヒ及ヒ  
 聖洗ヲ受ンコトヲ望ム、若シ全靈合心ノ願ヒヲ以テスル  
(卷ノ全カ)  
 ニ非ス、乃チ詭譎及ヒ二心ヲ以テ合懃斯托スノ宗ニ就キ  
 之ヲ認ムレハ、則チ我レ自ラ以テ見サルコトナキ天主ノ  
 審判ニ帰ス、而シテ天主ノ選ハレシ者ト分ヲ受ケサラン  
 コトヲ願フ、阿民、

問 薩他那及ヒ之ノ諸ノ所行、之レノ諸ノ差役、之レノ

総テノ勤メ並ニ之レノ総テノ矜ヲ祛ル乎、

答 祛ツ 若シ啓蒙セラレン人外国人ニシテ問ヲ弁セ、  
 ス、或ハ童子ナラハ則チ代父之レニ代テ答フ、

問 薩他那及ヒ之ノ諸ノ所行、之レノ諸ノ差役、之レノ

総テノ勤メ並ニ之レノ総テノ矜ヲ祛ル乎、

答 祛ツ、

問 前ト同シ、

答 前ト同シ、

問 薩他那ヲ祛テシヤ、

答 祛テリ啓蒙セラレン者或ハ代父答フ、

問 薩他那ヲ祛テシヤ、

答 祛テリ、

問 薩他那ヲ祛テシヤ、

答 祛テリ、

既ニシテ教主曰、

問 合懃斯托スニ耦スルヤ、

答 耦ス啓蒙セラレン人或ハ代人答フ、

問 合懃斯托スニ耦スルヤ、

答 耦ス、

問 合懃斯托スニ耦スルヤ、

答 耦ス、

問 合懃斯托スニ耦スルヤ、

答 耦ス、

問 且ツ之ヲ信スルヤ、

答 之ヲ主宰及ヒ天主ト信ス、

我信ス惟一全能ノ天主云々信經皆記、  
 スヘシ

聖信經ヲ誦シ畢テ教師復之ニ、

問 合懺斯托斯ニ耦スルヤ、

答 耦セリ、

問 且ツ之ヲ信スルヤ、

答 之ヲ主宰及ヒ天主ト信ス、

則チ三タヒ誦ス、

誦シ終リテ教主復タ之ニ、

問 合懺斯托斯ニ耦センヤ、

答 耦セリ、

右三次問答ス、

教主云フ、

之レニ拜セヨ、

伊ニ拜シテ曰、父及ヒ子及ヒ聖神ノ一性ニシテ分レサル

三者ニ拜ス、

冊子原寸 縦二七・三種 横一九・五種 一五枚

「一美 福永直之丞ヨリ久光公ヘノ建言

華土族祿高存置ノ件

「表紙 奉」

乍恐申上候、方今天下之御大政ニ付而は歎息罷在茂不  
少候得共、力及候訳ニ無御座候処、此節

御建白之趣実ニ難有奉怖候、就而は為差知僻論申上候  
義、至愚之私恐縮之至奉存、頻に謙遜仕罷在候得共、  
憂国之情難黙止又意底不申上義は返而不忠ニ当候付、  
不奉願恐左ニ奉申上候間、何卒

御斟酌被成下候処、拜戴仕度奉伏願候、

一掃に封建を廢し郡県を被為置、西洋之制ニ被為効、御  
政事大御変革トは乍申、今ニ御政治紛々之体ニ而、至  
当ニ不至茂有之、現事ニおひて理世安民之大道不相立、  
夫故万民未方嚮茂不相定、当分之勢ニ而は格別封建之  
治事ニ劣候欤ト奉存候間、此末兎角封建ニ歸し不申候  
而は相済申間敷奉存候得共、譬へ只今封建論申上候迎、

未右之機數ニ<sup>(虫損)</sup>哉と奉存候間、

御上京茂被為在候ハ、追々は又封建之御機會可被為

在哉、乍然新又御变革被遊候は不容易至重之大事件<sup>(虫損)</sup>

奉存候、昔より天下治乱興亡は、其君ニ有て右兩制之

間ニ無御座、明君暗君之間ニ而天寶祚を下し候、長短

可有御座哉、是故ニ

上峻徳を以天下を統御し、賢哲忠良之士を挙、政を任し、

上は天道協和し、下は万人之歛心を被為得候時は、自

然ニ強富之体相を夫々重るに、治乱之具を全ふし玉ふ

時は、何<sup>(虫損)</sup>万国を表宇内之不治之患不被為<sup>(虫損)</sup>ニ而、

是等之理は素より飽迄被 知召上候義ニ而、今更申上

候茂返而恐入次第奉存候得共、天道ニ協歛心を得之、

名実並昭すは実ニ難キ所欤ト奉存候、然る<sup>(虫損)</sup>御政事西

洋之制度之御変易ニ付而は、能々万慮ニ涉り、肺肝を

碎深味ニ甘し不申候而は、

御失体而已致到来候得は、<sup>(虫損)</sup>を招候訳ニ而候処、今

日之御政体は専文明開化とのミ唱へるニして、百事被

ニ効ふニ至を以、聖賢之道は度外ニ置、孝悌忠臣を唱

へ候者、地を払て無か如く、一兩年以后弥甚敷ニ至、

西洋有て聖賢有事を不知、官ニ在者開化をのミ唱へ、

聖賢之道はふるくさひなと、譏候者茂有御座由、当分

之勢ニ而は此末迎茂御国体難立行歟<sup>(虫損)</sup>之者多御座候、

依之奉仰慕候は、

御仁徳を以五常を被為布、礼義廉恥を以四維トなし、

日本之正体是非不取失様被為建被下度儀と奉存候、既

ニ供和政<sup>(虫損)</sup>傾候のミならず邪宗不可防之勢ひニ罷成、

此教葱々盛いたし候得は終ニ君臣父子之倫茂廢棄し、

此末顯然

鳳袖之下より禍之起らん欤ト類ニ皆人恐歎仕候事ニ御

座候、

一朝廷御費用御不足之趣、是は天下人心ニ関系し、御政

事之根元ニ而不容易、勿論軍備第一之宝ニ而御貯不相

成候而は不相濟事候得共、日本之小国は小国丈之賦財

有之、今天下郡県ニ被為替、不殘貸財

朝廷ニ帰し候而茂、一圖ニ西洋大国之盛大を見学候而

は、何程有之候而茂引足申間敷、左候得は弥實財御貯

蓄<sup>(虫損)</sup>は刃ニ<sup>(虫損)</sup>見得不申欵ト奉存候、乍恐我国ニは<sup>(虫損)</sup>

可行不可行茂候半、能々彼ト我トノ間多端ニ涉、其限

を察し、去後を計不申候而は立行申間敷、当時米国等

江夥敷御借財之由ニ而、御返弁之道は相立居可申候得

は、此節又々過分之御借金御約束相成、華族家并士族

高惣御買上之評判承知仕、此一条は前以承居候訳茂御

座候間、正説ニ相違有御座間敷当惑之次第奉存候、其

訳は

聖上天下を被為得候は皆封建之力、次ニは士族一命を奉

□候義ニ而、御一新以後は亦

御仁徳を以不忍人之御政道可被為在人皆奉仰候処、諸

候ニおひては、版籍返献御許容相成、誠ニ不被為忍訳

ニ候得共、公論之<sup>(虫損)</sup>不得止事至重之訳ニ可有御座

ト奉存候得共、旧

君公奉始只仁義ニ被為疑、当分之御住居其上纔十ノ一

被賜置候御高迄茂御買上相成候付而は、旧臣としてい

かてか痛恨仕申さくらん、何人か長大息仕申さくらん、

旧臣茂士族之凡名は許戴仕候得共、独田を有する之理

無御座、追付給地高御買上相成候得は、食用茂無之、

忽チ一身を置糊口を養事不能、且又無高等江八石六石

之御養被下置候米は、給地高出米を以御救相成由候処

是以高御買上相成候得は、御養米可出本無御座、弥以前

途相寒餓死より外ニ無御座、然時は紊乱之基ニ可有御

座哉、当累之義は全体米穀不引足候上、夥敷士族忽

農商ニ入候義相調候訳ニ無御座、何を以生を保可申哉、

耕さんと欲候而茂空地無之、皆農民之手ニ有之、徒ニ

無頼之餓鬼ト相成候外無御座、何を以

朝廷ニ奉し可申哉、然は人材は士族ニ不限四民之内ヨ

リ御選挙相成候故、勤方無之凡名之士族は平日不用ニ

而、兵隊御仕立茂四民より被召建候故、不用之者江世

録被下置候理無之ト申説茂有御座由ニ而、公論之決所

は全不奉存候得共、多分右等之所より西洋世録無之候



を一図ニ見学候儀共ニ而は有御座間敷哉、西洋は土地  
余有て往古より皆庶人ニ而活計茂相立、富饒之大国ト  
承候処、日本ニおひては昔より四民被召建、其内土族  
は皆録を以一命を保来、専君臣之義を固し、第一

御一新ニ奉尽力候処、風土之広狭万事之變易を茂審か  
に不弁、乍チ人命に拘候目前之大害を茂不甘、悪茂善  
ニ取違、大變革を主張し四方之民をして令就飢之

御失体ニ相当、天下万民之露命を繫候纒計之油迄茂不  
残

朝廷江被為絞候得は、秦之始皇か暴政ニ的当仕候欤ト  
奉存候間、宜

朝議被召替、御仁恵を以諸国是迄之土族、農商等ニ不  
入丈は於県々取しらへ之上、御救之世禄分限を以被成  
下候様被為在度義ト奉存候、就而は当県之儀茂、右ニ  
被準御取扱被為及等候得共、過分之土族戸数故、銘々  
被成下事候得は、他県より米御統ニ而茂不相成候而は  
引足申間敷候間、矢張是迄之通ニ而、高御買上不被仰

付方御手数等ニ茂不相掛、人氣ニ茂不相拘義ト奉存候、  
乍然是等は御旧国之儀故、公私之所は乍恐

御賢慮可被為在哉ト奉存候、

一前条ニ申上候通米国等より重々御借金相成候付而は、

御返弁筋御買上高所務を以被振向候迎、利付之大金補  
相成訳ニは決而至り不申哉、新金を以御返弁之道有之  
候而茂、未是迄之紙幣さへ御引揚之場ニ茂不至、剩眼

前朝鮮之患釀出し候哉ニ而、正説共不奉存候得共、此  
末若御征伐ニ茂被為及儀共御座候ハ、いか程之御入

費相掛可申哉、国力ニ而は逆茂不相濟、又外ニ何様之  
外費茂難計、重々外国ニ御借財相成終ニ御返弁不被為

整儀共到来候得は、

皇国茂敵之有ト相成階ト奉存候間、御買上高御差留相  
成、速ニ御返金被為在度御事ニ奉存候、

一脱刀勝手次第之令有之、佩劍之義は被

知召上候通、神代より威徳著しく、日本之国体和魂之  
宿所ニして、土氣外ニ無御座候処、英氣最早地ニ墮候

欵ト被存候而、東京之風帶刀之人全く無之ト申程之由、いか様之事件より脱刀相成候哉、脱刀不致候而は、天下を治事不能欵、万国ニ対峙する事不能欵、不得止事之大事件無之候而は、御国体を替候訳無御座不審至極ニ奉存候、西洋ニ阿諛する之党より起候半欵ト奉存候間、佩剣は此以前之通有御座度事ニ奉存候、一体郡県之制より弥輕薄ニ墮、切ニ憂国之人茂相少く、四民合一ト申説より士氣弥衰へ、戦争は義之一字ニ依り、一命を抛候而強兵ト相成可申哉、当時仏式として兵隊を卒トなし不淨所迄茂取扱為致、只規則を以押へ付候故、いつれ茂不服之体ニ而、番兵等ニ至り候而は義氣廉恥等有之向ニは仮初ニ茂承不申、此以来兵之御催促有之候而茂大根或魚壳如キ者、日暮シニ出候より外有御座間數專申触候間、未四民合一之御沙汰は無之候得共、華士族は矢張是迄之通被建置、銃卒之所銃兵ト被相替、士格式ニ被仰付度、左候ハ、実場ニおひて強兵ニ相違無御座候間、日本式別段被召建度義ト奉存候、左候而

輕賤之者より届出候者茂候は、銃兵被仰付候而茂不苦訳ニ御座候間、難有一筋を以義氣相立候儀茂可有御座哉、乍然其通難被為決義茂御座候は、近衛兵丈は是非士官格式ニ可被仰付哉、卑賤之者

鳳輦奉近衛候而は、尊崇之道相立不申ト奉存候、

一華族家高御買上之義、右家之内ニは世禄<sup>天</sup>大政大臣之俸

録ニ超へ下賜候訳無之候付、不相當ニ有之、尤富饒ニ

生立候得は、今日之責無之候故、人材不出来との事より起候義茂有之哉ニ茂承居申候、然は世禄は別段之義

ニ而俸録トは訳相替可申哉、且今日之責無之との事は

いか様かは道理無余儀奉存候得共、夫は御幼少より学

校江被為入、下民ト共ニ御勉勵被為在候義は御政道次

第二奉存候、且又当県士族高御買上之基は、封建之内

諸国世禄は皆藏米より渡来候処、郡県ニ被為替、

朝廷御藏相成候故、世禄相離困苦ニ廻<sup>ル</sup>り帰農等いたし、

又は県々ニ而一世又は年限を以、御救米被成下候故、

当県計世録被下置候訳ニ不至旨承居、尤之義ニは候得

共、諸県ニおひては今日之食料ニ廻り東京江妻子引連  
夥敷罷登、仕官内訟いたし候苦情誠ニ不便ニ堪兼候由  
ニ而難被捨置候訳故、前文御救之世録被成下事候ハ、  
再生之御仁徳奉蒙候訳ニ而、一入難有帰県可仕哉ト奉  
存候間、右之内より銃兵被仰付可然哉ト奉存候、

右は今天下御変易之秋ニ当、

御失体之御事ト乍恐奉存候得共、素より賤見井蛙之愚  
慮の当不仕は勿論ニ而、漫々申上候儀幾重ニ茂奉恐入  
候得共、何卒

御寛容被成下候処、謹而奉拝伏候、恐惶敬白、

申 十二月 福永直之丞

冊子原寸 縦二八樞 横二〇樞 九枚

一五七 島津家財産ト具有トノ區別ヲ正スヘシトノ

議

本紙ニ上陳スル如ク、一々其顛末ヲ上申シ、県下人民將  
来ノ融通ヲ鑑ミ、猶御仁徳ヲ不汚ニ御布キ被為 在度と

ノ厚意ニテ、許可ノ上御依託ヲ蒙リタルモノナリセハ、  
最ト大美事ト謂ハサルヘカラス、按スルニ下モヲ救助ス  
ル情ニハ可疑ニアラスト雖、公私ノ別ヲ失シ、旧主ノ  
公物ヲ果シテ専断スルノ体ニ帰セハ、廢藩置県ノ上ハ金  
錢其他重大ノ品物悉皆

朝廷ノ有ニ既ニ帰着スルモノト見据ヘタルヨリ、斯ク誤  
謬ヲ生シタルニモアランカ、果シテ然ラハ今更トイヘト  
モ、過チヲ改ル何ノ憚リアランヤ、然ル時ハ尊社等毎ニ  
差分タル顛末、其際ヨリ今日迄ノ本払ノ当分ノ有金、或  
ハ貸付、或ハ既ニ空金ニ属シタル、或ハ重大ノ品物等ニ  
至ル迄、一々名簿ヲ記載上申セハ、寛大ノ  
尊慮ヲ以テ、更ニ御依頼等亦其節ノ御決評可被為 在ト  
奉存候事、

但県庁ハ県下保護ノ任、会社如キハ人民ノ務ル処ニシテ名義

ニ適セサルヘシ、

文書原寸 縦一四・三樞 横二六・八樞

一九五八ノ一

皇統一姓ニシテ至尊ヲ敬スルコト大陽ノ如ク、忠臣義士

死ヲ恐レズ、

皇基ヲ護衛スルハ武士ノ定職ニシテ聊モ外侮ヲ受ケス、

剛胆武伎ハ大東ノ天性ナリ、故ニ国守ノ士臣其君ノ忠

ヲ責テ、

天皇ニ奉事センコトヲ勸ム、各国各君相連絡シテ日本ヲ

維持スル時ハ磐石ノ如シ、誰カ動スコトヲ得ンヤ、故

ニ国体ノ至要ハ封建ニ過キタル良法ナシ、譬ヘハ糸ハ

至柔ナレトモ、網ニ結フ時ハ大魚モ脱破スルコト能ワ

ス、古人モ百足虫ハ至死倒レズ、漢土モ郡県ト為リテ

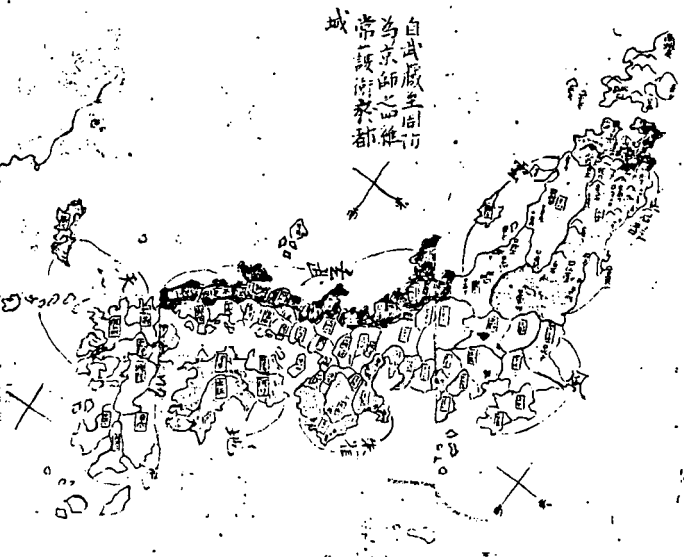
以来、敗乱ノ速ナルコト歴々トシテ記スルニ足レリ、国

体連絡ノ法ニ疎キ故ナリ、古昔禹ノ九州ニ定メタルハ、

八陣ノ法ニシテ帝都ハ中軍八州ハ天地風雲龍虎鳥蛇ニ

シテ首尾相救フノ法ナリ、然レトモ名山大川ハ不封ト

アリテ、各国ノ間々ニ險阻ノ地ハ天子ヨリ守護ヲ置キ、





自ラ練熟スヘシ、武ハ刀槍銃ヲ分ツ氣力ヲ強建ニシ、

戊辰ノ役旧藩ニテ、又鬼ト唱フル獵人ニ銃ヲ発セ

シメルニ、却テ從來ノ足輕ニ劣レリ、長崎振遠隊

トテ土着ノ兵來援セリ、調練ハ熟スレトモ勇戦ノ

効ヲ聞カス、長浜ヨリ庄賊侵入セリ、銃隊至テ多

シ、長浜將ニ総敗ニ及ントス、槍手ノ士十四五人

奮撃セリ、銃隊北走隊長ヲ討取レリ、境村ニテ仙

台南部ノ賊兵侵入ノ時ニ大村ノ兵士腰刀ニテ接戦

シ大ニ破レリ、刀槍ノ欠ヘカラサル如斯、然ルニ

下賤ノ者ヲ撰ヒ<sup>(虫損)</sup>□尺以上ノ大兵ヲ備ントハ兵道ニ

疎暗ナルニ非スヤ、士族ヲ以テ備ニ充ル時ハ、金剛

ノ兵多シ、若シ士族ニテモ文武情ル者ハ給禄ヲ半

ハ引上ケ、其子孫ノ勸勤者ヘ復賜スルモ可ナラン、

文武並ヒニ勸ムル時ハ、不虞ノ大患アリト雖モ必ス救

ニ足レリ、当節万邦通商ノコト禦クヘカラス、国体既

ニ立ツ、文武既ニ盛シナル時ハ彼レ長縮スヘシ、而シ

テ后ニ開港ノ法ヲ敵ニシテ何ケ処ト定メ、開港地ハ最

敵ニ兵衛ヲ設クヘシ、其交易ノ品モ定額ヲ敵ニスヘシ、  
出納濫ニ為ル時ハ国財足ラス万民窮ノ基ナルヘシ、

一衣服ハ礼義ノ本ニシテ古今制度沿革アレトモ、貴賤ヲ

分ケ、平服ト軍装トヲ異ニスルハ聖賢ノ正道ナリ、禽

獸ハ麒麟・鳳凰ノ鮮羽毛、燕雀ノ類ニ至ル迄貴賤ノ等

アルニ似タレトモ、其時其処ニ応シテ易ルコト能ワス、

人間ハ万物ノ靈ナレハ、鬼神ニ事ヘ至尊ニ見ヘ行旅ノ

服ヲ用ユヘカラス、西洋ハ天主ニ事フモ常服ヲ用ユ、

礼義ヲ知ラサル甚シキナリ、

皇国ハ大古ノ制ハ知ルヘカラス、中古ニ至リ隋唐等ノ制

ヲ損益シテ冠服ヲ制シ善美ト云ヘシ、清朝モ韃靼ノ風

ヲ雜ヘ鼠辮ノ姿トナル、羞ツヘキナラズヤ、礼義廉恥

ハ四維ニシテ一モ欠ヘカラズ、東方ハ地氣中正人物清

華万国ノ所景仰ナリ、洋書ニモ感スルニ堪タル国カラ

ヂヤト歎称シ記セル由シナリ、如斯ノ美風ヲ何ノ国迄

モ輝スヘシ、只洋服ハ戦陣又ハ船中役徒ノ具ニ宜カラ

ハ用テ可ナリ、

一長国家務財用必小人ナリ、財用ハ不急ノ物ト云ニ非ス、財用ヲ務レハ必下民ヲ剝損シ、上下交利ヲ征スルニ至ル時ハ、君臣父子ノ際必怨ヲ生シ、況ンヤ其他ヲヤ、実ニ利ハ乱世ノ始ナリ、方今地租諸稅周密ニシテ利ノ上ニ輻湊スル巨大ナラン富國ノヤウニ見ユレトモ、乃チ貨悖入スルノ理ニシテ人心ヲ失コトモ亦居多ナリ、生財ノ大道ヲ聖人制作シテ生之者ト為之者トヲ分ケテ、生之者ハ農ナリ、為之者ハ工商ナリ、カララ尽サシムヘシ、書經ニモ六府三事トテ、六府ハ水・火・金・木・土・穀、此レニ各官ヲ設ケ、農工商ニ力ヲ尽シムル時ハ財用足レリ、三事ハ正徳・利用・厚生トテ財用既足リ、衣食豊饒ナル時ハ教スンハアルヘカラス、故ニ民徳ヲ正シ器用ヲ利シ生活ヲ厚セシム、此ヲ富國ト云ヘシ、民心帰スル時ハ強兵ト云ヘシ、方今伝信機・蒸氣車等ハ奇工ハ妙ナレトモ、其費巨万其用却テ少シ、旅糞所謂不作無益害有益不貴異物賤用物民乃足ノ義ニ反シテ終累大徳ノ類ト云ヘシ、洋夷ハ古ヨリ其性貪婪ナルコ

ト左伝國語歴史ニ見ユル如ニテ、其地正帯ニ非シテ陰ニ僻スル為歟、顔・目・髮・膚大ニ異ナリ、肉食スルニ強悍ナレトモ恐ニ足ラス、凡ソ欲アル者制シ易シ、五胡乱ヲ起スタルハ皆ナ帰化數世ノ孫ナリ、所謂狼子野心ノ義ニシテ近ケ養フヘカラス、陸贄論スル如ク、一設險以固軍二訓師以待冠三來則薄伐以遏其(虫損)入四去則攘斥而戒於遠追コレヲ上策ト云ヘシ、必洋風ニ汚染セシムヘカラス、況ンヤ邪教ハ毫髮モ侵サシムヘカラズ、

案ニ洋夷邪教ヲ広ントシテ死ヲ惜マス、其事ヲ強テ從ワサル者ニ財貨ヲ施シ引入ントス、狡黠惡ムヘシ、

秋田県

小松 毅

百拜

一九五八ノ二

持天下有本末之策

臣謹案

物有本末事有終始者古先聖哲治天下之道、蓋無出于

此矣、蓋聞之師天下之本無他在人知而已和人心之道

在於使大人知義利之輕重也、其使知之者非戶說而人

諭之也、苟得其要則人心和而義利輕重之弁明矣、然

則其要何如、曰、正心苟心術不正則雖有周公之守而諛聽

矣先儒有言曰、天下常不亡于真小人而滅于偽君子、患得患失之徒、而無益于國家之實用

真可謂得其情心術不正則其弊也、如此可不畏哉、任賢屈己致

策略信而用之以期成功者乃任賢之實也、苟無此實則賢者無足、誠博訪

其寸雖伊呂亦無何之如耳、刀馬先日祭言行誠政事求賢之實也、納

諫聽受忠鯁必期改過、苟利于國家即日用之者乃納諫之實也、雖面

諫從真不改、其過者固必衰郭公善々不能用惡々不能去遂亡其國不

亦宜乎司馬光曰、詢安者本也、其本正則其末自正也、刑罰

危防治亂納諫之實也、法令

者末、董仲舒曰、人君正心以正朝廷……以正百官

……以正萬民……而遠近莫不一於正矣、臣謹案

春秋開卷之首章春王正月唯不謂王正月而加春字、春

者万物生々之時而仁政之行也、非有天地生々之大德

則不能以治天下矣、不謂一月而謂正月、正者王政之

大元一事不正則天下蠢々乎、而況万機乎、由此觀之

真非正心則不能以治天下矣、雖有正心之志非任賢則

一己之善而未必公也、故英哲王之治天下也、左右前

後必莫不正人故其所行也必公而善也、九經者以去讒

遠色為急書者以任賢勿式去邪勿疑為戒然則賢君之任

正人之重可知也、雖任賢広非求賢則一薛居州、独如

齊王何而不能以正君矣、雖用衆賢然亦非納諫、則天

下之善有所未足、雖一夫一婦尚有可採者、而況天

下之広亦豈可莫正人哉、蓋聞英哲王之治天下也、必以開言路

詩之有記過之史正君之故也公卿比諫方物而諫士傳言而諫庶人道議途路

辨讞也、商旅市謗然君聞其過……之改聞其義之從此子座之所以

不殺鄉校而永聖王之所以有天下也故言路苟開則天下之匹夫匹婦皆

以己之所長欲陳之于前況於明哲之士哉故朱子曰九政不在用一己之

善而貴有以天下之善故聖王之為政也唯恐不聞過此禹王之所以拜

昌言而興天下也暗君昏主乃不然唯恐聞過此桀紂之所以殺忠直而亡

天下忠故開言路与不開所以係天下之治、聖明察焉、

亂存亡也嗚呼可不畏哉、既正心任賢納諫則天

下之大本立矣大本立而后事業亦從可知焉然則事業果

何出邪曰在于足衣食蓋衣食足則民有仰事俯育之資有

其資而后教化可施焉、蓋衣食不足則窮而不蓋者少矣故夫子告冉

喪死無憾王道之始也范純仁知襄州民有罪則快其罪車輕以使植粟以

利其民也管仲告齊桓曰倉廩實而知禮節衣食足知榮辱也帝舜命棄

契之共後亦深意可知焉養民之既子則冗費亦不可以不省焉冗費

省則國財饒而民生有所遂矣不然則雖浚民之膏血所入也不如所出故

目得一敘不、臣誠惶誠恐謹白、

禮敬不可須臾離之說



臣謹案

自古英哲王之治天下也，未必不由于礼敬矣，蓋聞礼者非面從姑息之謂也，正君臣別上下禁患于未然之謂也，敬者非足恭揖讓之謂也，主一無適不東以西不南以北不二其心之謂也，然則此二者邦家之大綱而不可須臾離者也，臣白英哲同轍之証在堯欽明文思允恭克讓在舜在温恭允基在禹祗台德先不距朕行在商頌湯降不遲聖敬日濟在大雅穆々文王於緝熙敬止堯舜禹湯文武者皆天縱之聖也，然称其德也必以敬為首称蓋敬者一心之主宰而万善之大源也，以二帝三王之聖尚致々汲々修德恐失敬也，而況其下者何如可不戒焉哉故宋大儒真德秀論敬之害曰儀狄之酒伐性乱德是害吾敬也，南威之色蕩心惑志是害吾敬也，沈湎冒色婦言（龜德）用是害吾敬也，侏儒之戲滑稽之談是害吾敬也，優笑在前賢良在後是害吾敬也，鄭声之淫佞人之殆有一于此皆足害吾敬放而遠之不可以不嚴盤游之棗戈射之娛禽獸之珍豹馬之玩有一于此皆足害吾敬屏而絕之不可以不

力、孟子曰責難於君謂之恭陳善閉邪謂之敬吾君不能謂之賊嗚呼誠無此大敬則礼不虛行春秋伝曰礼者敬而已臣狂直出于天性故言無所諱唯

聖明海容、焉夫成大事者必以得民心為本也、以振廉恥為急也、以正賞罰為重也、蓋民者邦之本而盛衰未必不由于此矣古指人民為大宝重其生靈之意蓋可知焉、今也言民心則洵々每一令出無男女無老弱皆至于疾首蹙額而相告者豈偶然哉、

伏願

陛下察焉言廉恥、則夫人競利而已不知為理義之何物矣其甚也、父子亦至爭財此臣所大懼也、夫賞罰之行也、其源不在于言而在于行耳故以言教者爭以行導者從以行不導而唯以言而已則不行而禁民非之道亦唯禁其大而已其小者嘗不責焉伝曰禁多則不行又曰觀淵中之魚者不祥也譬于求隱微之過矣、今也雖細小之事無不有禁無不有罰動縛及之民實無所措其手足、如此則雖有万禁万刑民情實有所不堪、焉要之三者之不正者臣恕有于礼敬之未足欵、臣誠恐誠惶百拜頓首々々、

秋田県

小松直之進

百拝

冊子原寸 縦二五種 横一七・三種 八枚

一 堯久光公ヨリ西郷隆盛へノ詰問十四ヶ条

(包紙ウツ書)

一上

西郷江

詰問箇条書

一 戊辰年無届ニ而剃髮自恣之至、雖然非常出軍之事ニ付夫成打捨置候処、其後追々無届ニ而散髮之者多ク、知政所より免許ニも相成、終ニは

朝廷ニも及し候義、以之外之次第、風俗ハ政綱之關る所不相弁候哉如何、

一 右婦陣之節、於京師

朝官可被任 御内命有之処主人持之由ニ而御断申上、

早々引取候趣婦藩之上申出、尤之至と存候処、右之意ニ違ひ高位高官無遠慮御受申上候心底如何、

一 解兵後此方趣意難被行事多ク、桂初やゝもすれハ兵隊沸騰ヲ口実といたし候次第、畢竟根拠有之事ニ候、且其方ハ諸方江逃隠レ、兵隊よりハ頻ニ登庸いたし候様申立候始末如何、

一 解兵後兵隊暴行其方鎮靜可致候処無其義、却而尻押したし候哉之風評虚説ニは有之間敷と存候事、

一 去年上京之節之申口ニ違ひ、其前よりも官員相重ミ、且兵隊打崩シ、御国威衰弱ヲ醸成事如何、

一 夫ニ付士族持合之砲器等取揚之義、士氣振興之旨ニも違ひ、別而如何之事、

一 脱刀・散髮又ハ華・士族・庶人等縁与勝手次第之御達シ前代未聞沙汰之限り、風俗ヲ乱ス之根本一言も不申立ハ如何之事、

一 高給金ヲ貪リ己ニ従ふ者計登庸シ、其余ハ苦情ヲ不構苛政被行候ニ同意之姿心底如何、

一 一統商法ニ押移リ、士氣弥微弱、何ヲ以御国威可相立哉如何、

一四民合一之御趣意、右ニ同ク 御国威ニ關係スル重大之義如何、

一御巡幸之節、供奉第一之高官として御失徳のミ醸成心底如何、

一西洋砲艦迄ハ彼ノ長スル処トイヘトモ、其余ハ風土人情之用捨モ可有之処、一体之御政事総而西洋ヲ御手本

ト相成候義、嘆息之至不過之、従前之事件多クハ漢土之御移シ故、外国ハ西洋も同前と申論も有之由、雖然

漢土西洋同日之論ニ無之、此辺深く思惟無之候而は、御国体之沈浮ニ相関リ以之外之義心得如何、

一其方初之身上徳大寺江申立候ニ付、長士等拃躍云々以外之義、其方ハ方今通ニ而 御国威盛大之見留有之

と相見得候所存如何、  
一此方趣意ハ五倫五常ヲ基本トシ、当夏建言之十四ヶ条

ニ不外候条、従前之心ヲ改、右ニ従ひ一毫も不相背候哉如何、

文書原寸 縦四六・八種 横一九四・七種

包紙原寸 縦二八種 横四〇・三種

二六 源勝友袖控

各地ノ情況批評其他政治上ノ所見

一冊

(表紙)  
一袖控

明石

右は人氣弱く不振、一人も是といふへき人物無之、総而御一新後難渋ニ落入士族も多く、内職杯致し居候而寸計生産も立兼、間々は其妻子も妓或ハ売婦之体と成し、いと憐むへき有様也、

姫路

情弱成れとも明石ニ比すれば、少シ田舎風有りて、間々は帯刀之人も見、市中ニ至る迄洋風を惡むの意味有之、少しりきミの心有りて、士族も時々寄合共致し候内に、村上といふ人物杯既ニ立たり、併一緒ニ而奮起するの人氣ニ而は無之、龍野ハ少し勝りて土風少し強く、赤穂ハ

さすかに昔し風を不忘為こと有るの氣象有れとも、雄名の士は一人も無之といへとも、時に望みては少しつかはるゝ人もあるへし、

### 大坂

天下第一之金庫と聞しが、近比実視するに、案ニ不応之勢ニ而是迄大家と唱しも、今自力金万兩ニ充たるハ四五名無有之か、薩五代氏(友厚)も片手之屈指ニ入ると真に衰微を極めたり、是畢竟従来諸侯之根を締縛して北南の金を東西に融通し、自然に繰廻したる已ミならず、我手形を以自然に幾万の金を出したれば也、一旦県となり精算を逐し時坏、かじ作鴻議共家財を引負の爲めに入れたりと謂ふ次第、大蔵省租稅寮出張之官員諸県より積ミ上る米、其一度納高一所に不具は不受取と謂ふ事ニ而、諸方余程迷惑之由ニ聞ゆ○斯ニ府令昨六月猷言之末御採用ニ相成開港之打立ニ而海を斜ニ堤塘を築立、蒸船をつなかしむること要す、其入費凡六百万兩、半は大蔵省より元藩大坂之旧債を以被下給、半は戸毎に割付たり、其事ニ付石

井大蔵七等出仕出府に相成居申候、又神戸より大坂迄之鉄道は大抵出来し五月中試業と見ゆ、是は大抵公金ニ而出来致したれとも、大坂より西京迄之鉄道を商よりつもの工夫有之し故に大ニ近比人氣をそのへり、其証しば、廟堂を輕侮せり、又三井之昨年の説にばんくの制を亡さむといふを暗に取て銀行といふ物をひらけり、大坂最盛なり、是偏ニ国幣融通の道をは申なり、些細ニ西洋人の口まねをなしたりと見ゆ、商多くは官員ニ諂ひ我も朝廷をくさして金を設けむと競へり、皆は大蔵の権を三井かとり、兵部の権を山城屋がとりたる辺をうらやむと見ゆる也、

### 西京

さすか沐浴の地成る故、大分古風を帯而人々国体の事を論し抔致し、諸邦より集入たる者四五百も可有之、半は固僻之説ニ而、旧然皇国之衰微を憾ミ時世を变换せんことを欲す、地着之人は多く公家風ニ而士氣弱く度量纖少無足計者、神主・僧都之中ニは豪氣之者も多し、又有志

之人は多く禪房ニ滯泊せり、此の府政治は専ら開和風ニ  
而人氣不合成事も宜也、鳳輦東遷せしより金華乏しく人  
々貧ニせまりたる者逾夥、寺社も又然り、市中假時世を  
誹謗す、専ら己の貧賤を苦しむより出る物か其私情は不  
可論古風之不移は亦可称哉、

大和

古来我朝第一之強国ニ而人氣剛壯也、其病は人ニ己を誇  
るしばしば争論有り、元来 王都ニ而于今大乘院宮・一  
乗院の宮杯或勅願処・古陵・社寺多く、中々宝蔵院久く  
文武を誘ひくるニ至るまで不懈、大抵攘夷之説ニ而尚も  
不屈、都津川二階道最勇烈、織田郡山之士は尤弱也、五  
条は三条・中山之誘ニ而不相替固陋と謂ふ、併兵は畢竟  
敵に対する物なれば、開化風ニ而は士氣振間敷かゝる処  
こそ逾強かるへし、訴訟の多き大和をこすところなしと  
謂ふ、

伊勢

尤懦弱不足論、古来学問之盛なる弊かと考す、洋学は少

々宛解説する者有りと、皆婦女兒の所作ニ而不足取也、

美濃大垣

尤徒党有而近比開化説の者權を執、官途ニも此中より多  
くは出たり、されとも国中六七分は是を惡ひ、皇國の人  
は只和魂有り、古より武を以ておさまりぬ、何ぞ西洋の風  
を学ひ苒々欲<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>彼奴<sup>一</sup>乎と、是當時のはやりにはあらね  
とも真ニたのもしき処ニ而人々の胆力も定而堅広成るへ  
し、

駿府

一体旧幕之虚飾風を免れず人至而柔弱也、併人才の多き  
右に出る処なし、戦後は東京ニ止まる者大凡一万、国江  
越たる者三万、其内城下江は一万位ニ而、余は在中に潜  
めり、官途に即く者三千五百員有余、戦死遁逃する者幾  
万といふ事をしらす、今内国ニ金谷組と謂ふて四百未滿  
之人有之たるは、其始一橋侯封せられたる時、右之人々  
江地を割て与へられ自耕さしむ、随て彼人々我里ニ四方  
壁を築他の交を絶ち、朝夕武道を鍛錬し或は漢書を読め

り、中々撃劍体術尤盛也、諸侯華族と成りし比より國人  
大貧しく、旧臣大久保・勝井人見・梅沢(二巻)杯奮て之を扶助し  
大・勝両氏奉命之後は両氏能擲之、尤金谷組杯(海舟)ニは一橋  
侯の蓄財をも尽したりと謂ふ、一旦県となりしよりは右

金谷組ニも外より戸長は立けるか、決して其に不服、今  
に中条鎌之助と謂ふ者を其長として世の応対をも絶たり、  
一も県の法令を不用、別乾坤と定め、兼而散髪を禁し、  
洋物を不用、草鞋を踏、長刀を横たへ、忍笠に一風金谷  
組の客を成せり、総而當時上官ニ出し人物四五名も此中  
より出たり、熊沢・榎本・人見・梅沢・大久保杯かと思  
ふ、今ニ一橋侯ニ朔望礼を成せり、侯堂も不断活道を計  
れりと謂ふ、僕彼之地ニ至るや人見・梅沢直ニ来り訪へ  
り、懇ニ情を尽し三兩日滯溜し論談日を送りたり、土人  
曰、今万一国内ニ賊なと有らは国兵合て二大隊をも挙く  
へし、其他は用ゆへき人なしと伝承せり、又余程の後に  
て准流の者三百内外有之し中ニ真の罪を得たる者十の一  
も有之乎、可憐哉、人見・梅沢勉而此事を論せり、とき

く願くは廟堂注意せられん事を今一橋侯人ニ逢而説く、  
隠居は安楽也と其意如何そや、之を見るは昭也、請先輩  
潜思せられむことを、

#### 肥後

古より一致したるはなし、今に徒党分烈人々輕薄を根本  
とす、虚飾多し、然れとも先侯盛ニ漢学を起したるより  
人々少し廉恥之風を知り、直ニあやまちなからむことを  
願ふ故ニ、胆力逾織少成る故為る事なき者已ミ、併未タ  
敵ニ後ろを見せたる者なしといふ、是全廉恥の風ニせめ  
られて也、総体(小橋)横井の党過半也、其中ニ壺井と元組と二  
種有り、合而横井組と謂ふ、復古以来合奮而事を拳権を  
取たれとも、一と先づ壺井組盛なりしを、近来又元組盛  
ニして壺井社を押落せり、故に壺井組は慄々切齒せり、  
今官ニ上る人大抵は暗愚、山田十郎・津田(信忠)・林杯は少し  
勝れりと謂ふ、近頃伝壺井組は少し以前勤王家ニ咄合へ  
りと、

右九国実見或伝承のまゝ記せり、

人物人々の所稱は不書也、

(續應) 春日 西京之人也、年六拾八才

梅沢 駿府之人也、年二拾六才

毛利 米沢之人也、年二十八才

中島 都津川之人也、年五十才

道宗 肥後之人也、年五十三四才

匂子 西京之人也、女子元  
皇后の師也、當時上言ニ依而禁錮せられり、

安井 東京の儒者也、元常陸之人也、

一橋侯

凡天下ニ功業有るハ此人之右ニ出る者なし、真ニ我心  
を以見るニ連綿の幕世一時是を棄る轍の如し、統而權  
慎清直君ニ事而順臣といふへし、其肝胆も亦可見也、  
少も名利ニ不拘峻然天下の上位に出たるを、

王政一度新まりてかゝる人を不被用は人を撰むの道何  
以可相立乎、

政治の事ニ心付たるまゝ記ス

鄙夫不背と雖モ窃ニ長々短々之理ヲ知ル、夫協和政治長

々短々之理尤善シ、直ニ其法ニナツミ政綱ヲ改ムル則ハ  
其害逾多シ、凡天下長スル者ヲ以長官トナサ、レバ下服  
セサルハ自然ノ理ニ而、又只長者ヲ上テ服セサル有ルハ  
何ソヤ、縦トヘハ今八省中ヲ以テ見ルニ、或ハ華族或功  
業ノ人多ク長官ニ立、亦二十以下之人ヲ勅任以上ニ見ズ、  
直ニ長己ミアクル時ハ育者尠ト雖モ其官ヲスベ、童子ト  
雖モ又政綱之權ヲ執リ、女子ノ幼童ヲ以テ長タラシムル  
則ハ下豈服センヤ、一家一村之内ニ而実着可見也、是只  
長々短々之説ハ公然ニ而勢不行者也、其長々短々ハ只公  
然ノ一理ヲ論スル者ニ而、其根源民心ヲ安スルニ帰着ス、  
故ニ只短者ヲ上テ民心服スル時ハ是ヲアケ、門閥ヲ尊ミ  
テ民心服スル時ハ門閥ヲ立ツヘシ、民心ノ不帰ハ天道ニ  
非ス、亦協和之意ヲ害ス○況

我靖州

皇統連綿

神武一征シ武ヲ以国ヲ治メラレシヨリ幾千年、武道之衰  
ハ政ノ乱トス、其弊遂ニ幕ヲ立ルニ至ル、今又一新リ王

政復古スル時ハ豈其レ武道ヲ可廢乎、直ニ郡県ヲ成シト欲而無理ニ武ヲ棄ツル時ハ人心ノ背ヤ必セリ、如何トナレハ、古ヨリ時位ト政令ト分別而治マル事ナシ、是無理ニ出ツレハ也、今徒ニ国体ヲサダメス、武ヲ廢シ、十道協和郡封共差別ナキハ安ヲヌスムニヨク、而末大ニ害アリ、併今ノ政ニテ体ヲサダメナハ、一時ニ破ヲ取ル可知也、此無理ニ郡県ヲ成シタレハ也、併ナカラ体ヲサダメザレバ人々惑ヒ、逾利ヲ逐コトヲ知テ我業サヘサダメス、終ニ何ノ道何ノ国ナル事ヲ弁セサル様相成リ申間敷ト平素感慨罷在候、

疑

一金華○遂ニ何以得全ノ論ヲキカス、只商券真華ノ別サヘ不明、而三井組為替会社或銀行ト算ナキ繩張ヲヒロメラレシハ如何ノ益ヲ成スヤ、況多ク大蔵ノ權ヲサキ、遂ニ不可成ニ至ランカ、上タル人能目的実射シ給へ、

一兵道○英(公)ト弗ト法式異ナリ、米ト魯ト又違フ、是各国

地理人心ニ随其令ヲ定ムレバ也、縱令人小力微

ニ食乏シキ地ニ人大ニ力強ク食多キノ式ヲ学ハ、豈夫勞ニ勝ユヘケンヤ、我朝ハ古來義兵ト

唱シヲ、近比半ハ義ト云已ミニテ一モ恩愛ヲ無施、徒ニ敵敷律ヲ下スニ仍而人心ノ不服宜也、

今各国強大実ニ瞬息之間モ外務ヲ棄ンヤ、此機ニ望滿胸怨恨ノ土ヲ備ラレタルハ、昔日草鞋ヲ

踏ノ兵ニ勝レリヤ、直ニ慳然成レ之只人体甚長大ニ而筋骨不仁スルカ如シ、是何ノ故ナリヤ、

一刑法○情ト事ト不同事似惡而善ナル者アリ、情惡而事直直ニ規律ヲ主トス如何如善者アリ、実ニ刑官ハ民心ヲ安堵セシムルノ

根派ニ而、徒ニ規律トセバ簿ヲ掛テ足レリ、直

ニ空法ヲタツレハ如何成忠臣孝子モ復タ罪シ乱臣逆子モ無事也、其知織ナルハ無罰ニ而被刑、知

浚キハ姦盜ノ心ヲ以免罰、我朝ノ人民未タ節制ノ事ヲ不察ノ地ニ遽ニ此ノ道ヲ旋シ給フハ如何、

一人撰○勤任以上官ノ友人位ヲ望而職ニ不即者ヲ見ス、



是如何成故ソヤ、

一 鐵道 窃ニ聞ク、此ハ開化ノ余勳ナリト考ルニ、東西

各厚薄ノ情ナカラシメ、人々自奮發シ、己ヲ勤

勉スルノ力ヲタスクルト云フ、今乎空手徒ニ此

ヲ旋シ給フ、此何ノ故ソヤ、

諸件ノ税ヲハブクコト

一 膚ヌキノ者膝出シノ者 一 諸税

一 地稅 一 一人力車稅

一 人別稅 一 一戸長町用掛ノ稅

一 雇入之稅 一 船稅

一 空双場売置テ無益成ル事 一 官員之商法決而可停止

一 芸者之稅

其他新起之雜稅御廢止有之度事、

○ 諸港江交易問屋ヲ被立度事、

一 是迄売込問屋有之候処、假洋人ニナレ合、日本ノ損益

ヲ不計様相成居申候儀、以之外ノ事ニ付官より交易問屋

ヲ被設、是ニ而貸付入賃等ヲ計ラバ十分商人ノ事ヲ尽ス

ベシ、

外国江為替会社ヲ立ル事

亜国江茶烟草商社、イタリヤ江種紙社其他準テ設クヘシ、

尤交易問屋ニ引合往復為替取組、同質貸共弁シ融通之道

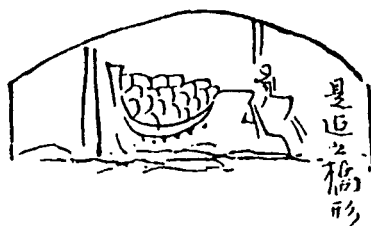
ヲ被計、我國ノ利ヲ起サンコトヲ願フ、亦廻社之運船三

四艘ヲ置キ飛脚船トスベシ、

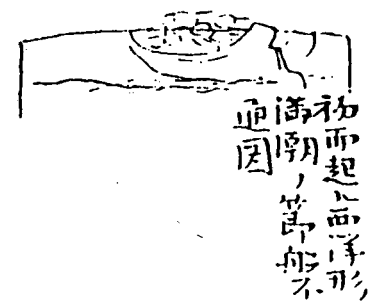
橋梁築造之事

東京ハ家ゼキノ道ナル故分裂潮入之堀ヲ通シ、船弁ヲナ

シ不時ノ用ヲハカル、然処近来カケル橋尺ク西洋ニ倣ヒ、



是迄之橋形

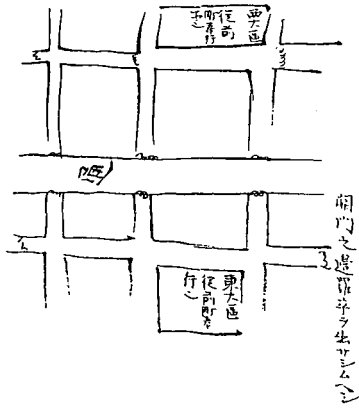


初而起之西洋形、  
海潮ノ節節不  
亞因

平ニ造リタレハ、満潮ノ節積荷ノ船不通候間尤不弁ナリ、  
人之妨ヲナシタモフ不少也、

東京

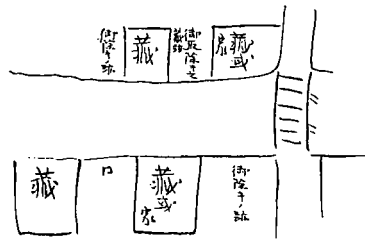
帝城ノ地ナレバ八省并行事ヲ弁スル故ニ、態と府ヲ設ク  
ルニ及バス、故ニ東京府ヲ被廢、東西二大区ヲ被置、是  
ニテ東西ノ事ヲ成スベシ、尤通町之外ハ都テ関門ヲ被建、  
不時ノ事ヲ計リ、羅卒ハ巷街已ミ運ヒ夜警共可使不忽也、



地所御改ニ付テハ願濟之地ハ当時害アル共其低ニ被置、  
不濟地ハ無妨モ如何ノ歎願共藏家等御トキハナシニ相成、

迷惑仕候者不少、何卒無害地ハ願ニ依テ御免許有之候ハ  
、市中実々公平ノ治ヲ戴キ可申事、

タトヘバ



源 勝友 (朱印)

横帳原寸 縦一九・五釐 横二六釐 一〇枚

一六二 銅貨不融通ノ原因調査上申

筆者不明

頃日旧銅貨不融通ニ付其原由探偵中、未タ確証ハ得  
兼候得共、是迄聞込ノ低左ニ陳述仕候、

過日來新銅貨發行相成候処、新古品位歩合ヒ之レアル趣申唱へ、市中兩替店ニ於テ取引不致、其中天保錢ハ從前ノ通引換之レアリ候、新古銅貨數種品位比例分拆上ノ儀ハ、篤ト探索ノ上不日可申上候得共、先ツ不融通ヲ釀成致シ候景況ハ、明治四年辛未十二月の中御布告ニ、旧銅貨本位新銅貨トノ比例ニ依リ、數種ノ旧銅貨ヲ併用スルトモ、一口ノ取り遣リ一円ノ高ヲ限り用ヒ候様御布告候ヘトモ、事實ニ至リテハ比較適宜ニ之レナキ趣申唱へ、旧銅貨天保錢ニ至リテハ、鑄造ノ節交セモノ多クシテ銅少ナク、故ニ新貨一錢ニ比較スレハ劣ル趣キナリ、其目方ニ至リテハ新銅貨一錢ノ四倍モ之レアリ、是レ畢竟鑄造ニ交セモノアル所以ナリ、其交セル品ハ錫鉛鈦ノ三品ナリ、之レヲ分拆スレハ右三品ハ消滅シテ些カニ銅ノミ殘ル、其殘レル銅ヲ以テ新銅貨ニ比較スレハ天保錢ノ位劣ルト云、寛永通宝青波錢ノ拾枚ヲ以テ式錢ト定メ耳白ノ拾枚ヲ以テ一錢ト定ム等ノ品位ヲ分拆スレハ、新旧銅貨歩合ヒ之レアルト相唱へ、姦商ドモ買込致シ候趣、尤モ

市中ニテ右分拆上ノ深意ハ知ラズ、買ヒ込モノハ新旧銅貨ノ現ニ目方輕重ノミヲ以テ旧銅貨ノ価ヒ騰ルト見込ミ買込ミ候モノモ有之趣、右ニ付市中小前ノモノ不融通ニテ困却不少、當時ノ景況ニテ諸県下ニ波及シ、衆庶ノ困難ニ及ヒ可申ト云、

大坂ニ於テモ頻リニ三ツ井組且ツ井上馨ノ手ニテ買ヒ入レ致シ候趣キ、同所取り沙汰ニハ造幣寮ニテ新旧銅貨分拆致シ候上、是非新旧銅貨ノ品位ヲ不換テハ不公平トノ内議之レアルヲ洩シ候モノ寮中ニ之レアルヨリ、右ノ次第ニ立至リ候趣風説之レアリ候、右ニ付大阪居付キノ謀者へ事實探索ヲ遂ケ候様申遣シ置候、

府下ノ人民井上馨・波沢榮一ヲ惡ム甚シ、其因テ起ルトコロハ、過日以來榮一国立銀行ニテ多分ニ旧銅貨ヲ買ヒ込候趣、尤幾手ニモ分チ、衆人ニ先チ買ヒ入レシ故、多分下直ニ手ニ入り候趣、榮一ノ此度先見アル所以ノモノハ、大隈參議殿ヨリ新旧銅貨比較不同故、旧銅貨不引換テハ不相成趣洩レ聞カシ、右ノ次第ニ立至リ候哉ニ風

説之レアリ、依テ原由探偵中ニ之レアリ候、

井上馨ハ外国人ト手組ミ、多分買ヒ入レ候趣相聞、

右ハ風説ノミ、尚ヲ確証突キ留メ追々上申可仕候也、

冊子原寸 縦二七・七種 横二〇種 三枚

### 一六三 伊地知正治？廟堂改革意見

一別紙第一ヶ条、只今より後日ニ掛 御取扱之件々

一段御居付海陸軍御取起之次第、其外体用本末大小輕

重緩急、順序ヲ以 御施行之事共、其事ニ関り候局々

江普ク評議ニ御掛ケ、各一ツ書ヲ以存寄申出候様被遊

廟堂要路之 諸公御熟評之上 御決定、一紙ニ御書調

一定之御見居相立居申度、一人より申立即時ニ御施行、

又一人より申出如何ニも尤と御取行相成候様ニ而は、

当座之御取計と申者ニ而、前後致矛盾候事共到来、

御政事之体とも難申上候、尤一定之御見居へ相立居申

候而も、活物ニ候得は、順序之次第一々其通と申訳ニ

も参り兼、臨時之事件且来者ニ応し御取扱相成事も可

有之候得共、大段之方向定り居不申候而は、取舍方法  
ヲ失ひ、前後ヲ被為誤候事而已可有之欵と奉存候、

一第二ヶ条、遽ニ 御一新、一日御万緒御匆匆中、御答

メ申上儀ニは無御座候得共、未だ 御制度紀綱全ク相

立不申、何れ諸礼節衣服・戎服・軍旅之制等、確乎タ

ル本朝之御制度紀綱相立、不可犯者も御座候而は、六

十余州御維持

皇威光被之程無覺束奉存候、

一同条、朝班ニ連り候人々、淳厚之風俗とも相伺不申、

右は下々誹議も起り居候、旧幕吏さへ重役は酒樓辺江

参り候儀ハ無御座候処、当時此弊は多々御座候、外国

交際之道も相立、氣胆大ク罷成、小節ニ致区々候而は

可笑事ニ而、大度愉快ニ有之度と申論も可有之候得共、

大度愉快は外ニ有之事ニ而、西洋各国ニ而も其国之遊

所辺江遊候儀ハ嚴禁之由ニ御座候、此弊は近々御取締

相成度奉存候、

一同条、是意は外国人ヲ禽獸視し、漫りニ攘夷之説ヲ唱

へ固陋頑愚ナル所 本朝之憂ニ候処、形勢一変、今日ニ到候而は内外混合、本末之分ヲ失候様罷成処大患と奉存候、

但万国之公義ニ基キ、且各国之長所ヲ 御採用之儀

ハ申上候迄も無之事ニ御座候、

一同条、外国掛リ之御重役は、外国好キノ御方ニ而は、

大ニ失体ヲ生候儀到来可仕、下役ニは、外国之事ニ為

取馴人御用ひ相成度事ニ候得共、頭役之分は

本朝之大体御会得、万国之公義ヲ粗御了解之御方々ニ

無之候而は相済間敷奉存候、

一 第三条、命令一度発し不被行様御座候而は、 朝威ニ

も相拘事候間、為瑣々 命令は必ス此涯御差扣、前広

能々御評議、公道条理ヲ以相発し候 命令ハ下より如

何様物議申立候而も無御動揺、御名ヲ以法ヲ御確守被

成度、

外ニ

一 当時

御留守中ニは御座候得共、下より之同事等は、被仰御決定御差図相成度、無左候而は下不平ヲ抱キ混雜ノ基ニ御座候、

一人ヲ一旦御登庸之上は、容易ニ貶斥難被成事候間、初

メ 御撰用之折能々御吟味有之度、

一 百事成功ヲ御急キ被成間敷、事之大成者程成事之遅キ

者ニ御座候、十日にし不成は百日ヲ待チ、一年にして

不成は十年ヲ期し、其身ニ不成は其子ニ期ス、西洋各

国之今日之隆ナルニ至ル所以ニ御座候、勇武凜烈は

本朝之体ニ候得共、曠日持久は我之短ニ御座候、能々

御注目被為在度所ニ御座候、

本文今日之 御処置御遅緩ニ有之度と申儀ニハ万々

無御座候、

文書原寸 縦一七・三種 横一九二・五種

一 三三 大隈重信ノ罪状探索書

一 一昨壬申冬大礼服被仰出候前日、大隈ヨリ新和泉町大

黒屋六兵衛と申者江申付候由ニ而、同人東京・横浜ニ有之候黒羅紗不殘買上ケ候由、此ハ政府ノ議ヲ漏シリヲ計ルノ奸計ニ御座候、其折リ外国船羅紗ヲ積ミ大坂江廻リタルヲ急便ヲ以テ呼戻シ候由、然ル処大礼服被仰出候而モ拵ヘ候人無之ニ付、右羅紗ヲ持チ余シ、却而大損耗ノ処、右損ヲ大黒屋江押付ケ候由ニ而、大黒屋大ニ怨ムト云、右大黒屋外人江巷ケ月利息計リモ五千円程払ヒ候由故、三リン日賦ニ而割何レ金高三十万円余ト相見ヘ申候、

一大蔵省ニ商法司有之時、三井江二十万円程御貸シ出相成り、其後追々金高登リ唯今ニ而ハ百万円ニモ相成リ候由、右返納ノ道相立不申候ニ付、一昨年頃欵何レノ振リニ致シ返納候哉ト三井江相達候処、東京ニ而米相場ヲ御任セ被下候得ハ、利分余程上リ候間、年二十万円宛モ上納可致ニ付、右米相場御任セノ儀御許被下候様願出御許相成、海運橋三井会社ニ於而大坂堂島ノ如キ空米相場ヲ初メ居候得共、上納金ハ不致候間、昨年

中大蔵大丞ヨリ三井支配人辻某ヲ呼出及詰問候処、彼弁田此申立、却而大蔵省ヲ愚弄スルニ類シ候事モ有之欵ノ由ニ而納メ不申候処、阿波屋某右辻ノ懇意ニテ右ノ次第ヲ致意見候得ハ、辻云大隈殿江打合置候事故大丞杯彼此申候トテ構ヒ候ニハ不及ト申候由ニ御座候、

一日本橋釘店ニ伊勢屋平蔵ト申者有之、右平蔵一夕大隈ヲ招キ宴飲ノ処、平蔵兼テ致用意旧幕御家人ノ娘十七歳ニテ絶美ノ者ヲ二百円ノ約束ニテ引取置キ、右宴江指出候由、大隈夫トモ知ラス其美ナル趣ヲホメ候処、

指上ケ候テ宜敷娘ナリトテ右ヲ妾指出、夫ヨリ取り入り、終ニ大蔵省ヨリ南部礦山ノ事ヲ被命、四五十万金ト云大金拝借相濟候由、扱右礦山ノ儀ハ其土地ノ者ノ利ニ相成候様被成候儀御法則ノ由ニ候処、右礦山平蔵ノ一手ヘ為御任相成候ニ付、南部土人皆怒リ、平蔵来リ候ハ、打殺シ候杯申候由、其後平蔵人ニ袴袴テ二百金ノ本手ニテケ様ノ大モフケ致候儀ハ、余人ニテハ出来申間敷ト申候由、平蔵ハ当春致死去候由ニ候得共、伊勢屋勝郎ト申者跡

ヲ引受ケ居候歟ニ候、

一豊岡県参事田中光儀旧幕人ノ由及大属某扱ニテ県庁ヨリ松

下某・竹内某此ハ東京ニテベシ師ト唱ヘ候一種ノ商人ノ由住所等不承候杯ヘ銅ヲ引当ニ

取り、五千金余貸付ケ候処、右銅ヲ松下等重カキ入ニ

致候事ニテ、昨年七月頃歟懲役ニ相成候ニ付、右田中

参事右銅ヲ売払ヒ候由、然ル処松下等ノ方ヨリ懲役日

限僅カニ付何卒御免相成候迄待呉候様願入候得共、田

中不承知ニテ右銅ヲ売払売出シ、利分五割程取り候由、

依之松下等御免後右ノ段ヲ訴出ント致候ニ付、田中ヨ

リ金千円遣シ内済取組事済ミニ成リタリト云、然ル所

県庁ニ右様ノ金子無之筈ニ付、何金ニテ候哉大蔵省ヨ

リ糾シ候処、田中云、私モ能ク存シ不申候間調ラベ候

上申上候トテ致帰県、何トモ不申立候間大蔵省ヨリ尚

更取糾サント致候得ハ、右ハ糾シ不申候様大隈申聞有

之、夫切リニ相成候由右ハ昨年夏秋ノ頃ニ候、

一岩手県士族中星十郎等生産ノ為メ、陸中国岩手郡御明

神村字者戸前ノ銅礦ヲ掘試度、岩手県ヨリ願濟ニテ取

掛り、凡ソ五千円程費シ、弥出産多ク相見候ニ付東京

江罷出、礦山寮ノ免許ヲ得度願出候処、右願ヲバ聞届

不申指置キ、佐賀県士族安永某其地ニ行キ、終ニ其者

江願濟ニ相成候振リ県令島氏(推轉)取計候由、右ハ大隈ノ扱

ニテ右様ノ次第ノ由ノ処、第一右五千円程ノ入費返却

ニモ差支、殊ニ右ハ県ヨリ願濟ニテ費シ候事故、甚不

正ノ扱故兎玉準一郎右ヲ憐察シ、代言人トナリ出訴ノ

振ニ相成候処、岩手県ヨリ司法省へ如何申出候哉、右

中星十郎ヲ捕縛シテ国へ連レ行候ニ付、其扱ニ相成リ

居候由、

一長崎へ大隈先年逗留中、或町人ノ妻へ致奸通候由、右

妻昨年中ト欵出京又々大隈へ出入其縁ニテ右町人大蔵

省ヨリ金子拜借相濟候由、右ハ何訳ノ拜借金欵未タ承

リ不申候、

此ハ佐賀県士族某右詳細ヲ搜索ノ為メ、佐賀県へ参

リ、暴動ニ出會賊徒ニ相成候間、其後ノ事不承候由、

冊子原寸 縦二七・五釐 横二〇釐 四枚

一六四 三条実美卿ヨリ島津従二位殿へ

久光公ノ上京ト西郷参議ノ帰京ヲ促ス

(包紙ウツ書)  
「島津従二位殿

三条太政大臣

緘

新年益御万福御超歳可被成大賀之至存候、陳は旧年御上京之義御沙汰相成候処、御所勞御勝不被成御猶予御願相成候処、爾来如何御座候哉猶承度候、聊ニ而も御快方ニ候ハ、御上京相成候様為國家渴望仕候、先般御建言之義ニ付而は、國家之急務彼是御議論を茂御下問被遊度御義ニ候間、精々御扶病御登京有之度存候、偕西郷参議ニ茂御暇帰省仕居候処、方今

朝廷御多事之折柄段々御用向も有之候ニ付、速ニ出京致候様被仰出候間、同人義早々帰府仕候様御告諭有之候様仕度存候、右得貴意度旁一筆呈上仕候、宜御含御教示所望ニ有之候、仍此段申入度如此ニ候也、

一月四日

実美

島津従二位殿

文書原寸 縦一五・八横 包紙原寸 縦二八・五横

横 一〇二横 横 四〇横

一六五 佐田介石、松本喜三郎ヨリ大隈参議へノ建

白 二通一綴

富国強兵論

(表紙) 等象芥介石分 一通

富国議建白

松本喜三郎分 一通

一九六五ノ一

謹而上言仕候、即今 皇国の急務富国強兵なりと雖富国先に立て強兵後たるへし、如何程強兵ならんと欲すとも国家困乏致してハ如何ぞ強兵なるへけんや、因て急務中の急務たる、たゞ富国の一に在り、其富国の策たる物産を繁殖して外国金を取入れ、且ツ国内貨幣融通を盛大にするの外無之、其物産に二種あり、曰ク、天造と人造と



の二なり、其天造の物品百種あれども 皇国物産の中ニハ茶・生糸・種紙を以て最上とす、乍去茶・生糸・種紙の類如何ほど価貴クとも之を人造の品に比すれハ、其益下る事凡ソ數百倍なり、何となれハ天造の品は僅に一年に一度産するに過ぎず、茶ハ四月産し、生糸・種紙ハ五月産する而已にて二度産すへき品に非ず、然ニ人造の品ハ元日より造り始めて廿九日迄造り続けれハ、一日に一品宛ニ製し出すとすれハ一年ニハ三百六十品なり、十日毎に一品宛ニ送り出すとすれハ一年ニハ三十六品なり、加之天造と人造とハたゞ品の多少異なる而已ならず、価の高低も遙ニ異なり、たとへハ種紙の如きハ何ほど価貴クとも一枚の価一兩内外の間ニ出ず、其種紙を以て之を蚕と成し、之を糸と成して綾や錦と織り成し一枚の種子とす綾錦之を外国へ五十円七拾円に売り渡サハ一枚の種紙の益に勝れる事五拾倍七拾倍すへし、加之綾錦と織り成して売渡すに就而は、人民生活の職業を広く開き、天下の融通を盛大にすへき大益あり、先ツ一ニハ紡織の職を起

し、二ツニハ紡織の器械を製する職を起し、三ニハ紡織の器械を製する材木売買の職を起し、四ニハ紡織の器械を製すへき材木を産する処を潤し、五ニハ染屋の職を起し、六ニハ染具を売買する職を起し、七ニハ染具を産する職を起す、阿州の藍或ハ紅花等ハ申に不及其余楊梅皮、黄檗杯の草根・草実・木皮・木根の無用の品が大ニ有用の品に転する益あり、八ニハ染屋に用る刷毛・形紙・糊・絵具等の百般の染具を製する職を起す、かくの如く種子紙ナガの形にて売渡すにくらぶれハ、其種紙を以て人工に懸ケ綾錦と織り成して売り出すに就てハ、皇国の益たる事幾ク大ひなる事ニ候也、是れたゞ種子紙而已ならず、其余百般の産物何れも生形ナガにて外国へ渡さんよりも、人工の品と成して渡さバ百倍の大益たるへし、たとひ又人工に懸け候とも金銀銅の工製の如きハ地金を沢山用ひず、手輕クして精密を究め、彼れが舶来の懐中時計の如く目方タ一貫目の銅一貫目金一兩と定を以拾兩以上の品を十五箇造らバ、地金の仄にて売渡すよりハ凡百五拾倍の益たる

へし、ケ様に人造の品と天造の品とハ、其益に厚薄ある  
事實に同日の論に非ず、之を以て見れハ、皇国の富国の  
方ハ人工の物品を盛に起すに如クハ無し、時に此人工の  
製造の方を興すを以て富国の良法たる事ハ、世上大方タ  
の人の着目注意する処なれども、たゞ外国の器械製造に  
倣ふを以て、皇国の富国を致さんと欲する一筋の外無之  
に似たり、愚案ハ聊此見込と異なり、其仔細ハ今日我日  
本人の外国人より伝習する処の人工製作の物品ハ、彼外  
国ニ在てハ何れも年久しき彼国の発明の事なれハ、其製  
造の品は外国ニハ遍く行届カざる処無し、因て我日本人  
外国の伝習を受けて折角製造するとも、外国ニハ固ヨリ充  
溢れたる品にて、珍重するニ足らざる事なれハ、如何ほ  
ど日本ニ沢山製造するとも外国人が競ひ求むへき様無し、  
さすれハ日本製造の品ハ日本人の用に供するの外用ゆへ  
き処無し、因て日本製の洋流の品は此以後外国より入り  
来る品を防ク迄の益にて、是れ迄外国へ渡したる金銭を  
日本へ取戻す程の働きも無けれハ、又御国債を還へすハ

き力も無カルへし、是を以て真に我、皇国の富国の方を  
立んと致さハ、一ニハ御国債を還へし、二ニハ従来渡し  
たる貨幣を取戻し、三ニハ外国の金銀を取入れ蓄積すへ  
き三益を備へたる大策に非れハ、安ンゾ国を富すへけん  
や、就之先ツ我日本人と外国人と互ニ能不能あり、互ニ  
長する処あり、故ニ日本人ハ外国人の長技ありとも夫れ  
を頼らず、矢張我日本の長する処を以て物品を製する法  
を用ゆへし、因て今爰に日本人と外国人と互ニ能不能あ  
り、互ニ長短ある事を弁別すへし、抑々外国人ハ器械を  
造り及其余百般の技芸器械を以て製造致し、又器械を以  
て事業を成す、日本人ハ百般の技芸多クハ器械ニよらず、  
手技を以て器を製し業を営む、此れハ日本人と外国人と  
の上に自然に備へる天稟の別才なり、故ニ日本人ハ百工  
悉ク手技を以て製し、外国人ハ百工皆器械を以て製す、  
是れたゞ物品而已ならず、我日本人ハ琴瑟を弾し、笙笛  
を吹、何れも手技にて宮商角徵羽の五音を発す、綾羅錦  
繡を織、衣服を縫裁する手技に非るハ無し、外国人ハ楽

器を奏しオルゴ、綾羅を織り糸を引き衣服を縫裁する器械ニ依らざるハ無し、又日本人ハ物を画クも手技ニ依る、外国人ハ多ク写真鏡ニ依る、日本人ハ根付ケ緒締ニ到る迄手技にて彫刻致し、外国人ハ紐釦ボタ、骨批ボシに到る迄器械ニ依る、然ニ器械製造の品ハ巧拙の別無く、手技製造の品ハ巧拙に百段の別ありて其極上品を究むるに到てハ、器械製造ニ比するに風韻雅致ありて其位貴く、其価ひ器械製の品よりハ数倍致すへし、因て我日本人の手技製造の精密精巧を尽せる良品の良品たる所以を外国遍ク味ひ得るニ到らハ、我日本全国の力を究めて産物を製出すとも、外国の求めに足らざる事ニ相成るへし、乍去今日の俛にてハ日本製の品を外国人争ひ求むへき様無し、因て日本人をして肥後の松本喜三郎・久留米の田中儀右衛門の如き秀技の工才ある者ニ精工を究めしバ、果して外人競ひ求むへし、此手技工製之儀ハ日本固有の長する処故、今日よりして非常の鞭勵を加へ、練磨するに到らハ、今日の松本喜三郎に幾倍すへき英傑をも屹度群起すへし、

我日本人手技の長芸を人々貯へ乍ら、其光を顕ハさざるハ是れ迄磨ざるの罪なり、因て今日工才を備へざる人以て猥ニ洋行洋学等を御許容被遊候よりハ、其費用を以て早く工才の器たるものを一人人ほど御技擢ニ相成、其手技工製の法を被為起候ハ、一歳ニ一人宛ニ千兩の工製ニ而、外国の金子を日本へ取入候とも十年を累ね候ハ、一億万位の御国債ハ其工製一方ニ而相埋ウツ可申、三万人程工傑出来候ハ、三年にて一億万位の御国債ハ御返納相済可申、勿論交易ハ有無相通して益を得る事ハ古今の通則天然の常理、然処今日我日本人の外国人より伝習する器械製造の洋流の品ハ彼外国にてハ久ク行ハれ来て流行後れたる品にて彼れが珍事とセざれハ、此品を以て外国の金子を日本へ取入れ難く、僅ニ外国の物品が此以後日本へ入ラざる防きに相成迄の事にて、有無相通の商法に非れハ国を富すへき真術に非ず、依而日本固有の手技工製の法を新に盛大ニ始めずんハ、安ぞ外国の金子を日本へ取入れ、日本を富国ならしむへき真術ニ非ざらん

や、已ニ彼舶來の物品を見るに、一として人工の品に非るハ無し、日本より外国へ渡す品を見るに、多クハ天造の品ニ非るハ無し、所謂茶・椎茸・昆布・干粘・烟草の類にて彼外国の一品を以て日本の百品と鈞合可申割合ひなるへし、況や彼外国の品ハ精巧を究めたる人工のもの故へ、誠ニ手輕ク織微なり、我日本の品ハ量<sup>カサアテ</sup>太して、日本の荷物ハ蒸氣に積むとも外国の一艘と日本の百艘と鈞合ひ可申割合なるへし、此理より推して見れハ、一益を得て百利を失ふ謂れなるへし、さすれハ 皇國一代を尽し候とも如何ぞ富國の場ニ到るへき時あらんや、因て一日も早く日本人の長する手技工製の法を以磁器・漆器等の百工の職を盛大ニ興し、たとへハ竹の如きハ素より外國烈寒の地ニ産せず、又樺・桑・柘・桐・柞・黒柳杯の名木の如きハ外國ニ無き名材に候へハ、右様の名木を以て或ハ箱と成し、或ハ彫刻をなして工産と致し、或ハ外國人の望ニ適する品柄ニ応し、手技の巧を究めハ価ひ弥々貴く、品ハ必ず彼れ競ひ求むへし、時に今日我日本の

利を興す処の道、開墾と工産との二ツに過ず、其中ニ利を速ニ得へき道ハ工産ニ及ぶもの無し、開墾ハ沃野膏土たりとも、益と可相成事ハ十四五年以後二十年内外ニ過ず、況や寒地瘠土ハ其益を生ずとも三十年や五十年の事ニ非ず、尚十四五年や二十年内外の間ハ、其移居の人民の糊口だも御扶助を蒙らざれハ取続き致され難し、中々以て開拓にて外國の金を取入れ、皇國を富す抔と申事ニ到るへき事ハ遙ニ程遠き事なるへし、因て開拓と工産とハ二ツ乍ラ一も欠へからざる事なれども、富國の法を立るに就てハ、工産と開墾と懸ケくらぶれハ暫く緩急前後の別無き事能す、況や其益の厚薄多少を論するに到てハ、開拓地より収る数十年の益たりとも、工産を盛大ニ全國に及ぼす益ニ比すれハ、工産一歳の益ニハ及ばざるへし、此論を設る何ぞ開拓の是非を評する趣意ニ非ず、片時も早く手技製造の工産を盛大ニ致し玉ん事を欲するがため、暫く仮に益の多少を語る而已、区々たる持論を以て、尊聴を冒瀆する其罪万死に當る、恭伏奉乞御仁

恕、恐惶謹言、

明治六年第一月

等象齋介石



一九六五ノ二

今度豪斯多刺里の博覽會に御渡しの御品を拜見仕候処、  
何れも結構なる御品柄ニ候、乍去百工精密を究めたる外  
國へ御渡しニ可相成御品柄ニ候へハ、今一段尚精微を尽  
させられ候ハ、格別の御利益歎と奉伺候、右に就兼而  
宿願之次第可申上候、方今第一の急務たるハ富強の策に  
候、然ニ其富國の益の実効あるものハ工産ニ如クハ無し、  
其工産を興すニ就てハ天稟の工才ある者を集るニ在リ、  
而して其工才あるものハ辺鄙遠國の正直律儀を守り、未  
タ都會の風習に移らざる人ニ在リ、其故ハ都會の人ハ兎  
角利を先ニし業を後にする悪弊ありて、夫れがためニ其  
材器有リ乍ラ業に習ふニ終リ、遂る者無く、是れ上達す  
るもの都會に興らざる所以なり、幸に文明開化の今日ニ  
候へハ、何卒天下の人材を集め、其工芸を相競ハしめて

非常の修練を加へハ、屹度豪傑の工職興り、珍器發明の  
工産盛大に産し、外國の産物と相並ぶ勢ニ到るへし、素  
より 皇國と外國とハ風土人種も相替る事なれハ、工業  
の術も自然ニ同しからざるへし、外國の物品と異なるを  
以て外國人が日本の品を珍重懇望致セリ、同品ならば何  
ぞ彼れ珍重致さんや、爰に於て有無相通の商法相立てり、  
依て工産制作の法を昌ニ始め、可相成丈ケ金銀を渡さぬ  
様仕るを上の商法とす、金銀ハ産するに限りありて最少  
し、物産ハ逐ニ造り出して尽る事無し、故ニ其尽る事無  
き物品を以て交易致す処にて、富國の法相立申へし、依  
之天下の工才あるものを集めて之を御育ニ相成候ハ、  
之に過たる富國の良策ハ有之間敷、晰日同郷の人等象齋  
と申もの一夕来て持論の建白書を出して之を讀しむ、之  
を讀ミ畢て覺へす手を打て相共ニ語て曰ク、此れハ予が  
平生の志願也、其趣意全ク我意と符節を合ハセたるが如  
し、実ニ奇妙といふへし、因て之ニ併せて忠告し奉らん  
と欲す、若御採用被為在候ハ、私のため而已ならず、

又天下のためニ幸ひたらんも量り難し、恐惶謹言、

明治六年第一月  
浅草観音境内寄留  
松本喜三郎

冊子原寸 縦二四・七糎 横一七・三糎 一三枚

一六六 三瀨県土族石井瀧次ヨリ集議院ヘノ建白

財政上ノ件

(表紙)

「総論」

総論

不束之私 時勢をも不奉憚彼是と愚案申上候段、誠ニ奉恐入候仕合ニ候へとも、実ニ愛国之微衷より無拗吐露仕候儀ニ御座候間、台論海涵者竿越冠之謬御尤メ無之、唯々猷芹負暄之情被為垂亮察候様万々奉願候、御一新後泰平無事之様ニ相見へ候へとも、闔国一般之情態如何御覽被為在候半欵、恐至極之御義ニ御座候へとも御変革ニ相成候由、万民之情状始而塗炭を免レ、

天恩霽然之新雨露を奉感戴候と申意味ニも見聞不被致、唯々外交廢藩機製服変等之數件ニ睦若仕、疑惑呆望仕居候模様と目撃仕候、殊ニ近來道塗上ニ而承候へハ、御国計稍欠乏ニ赴候云々風評仕居候、抑本邦方今之惣計常理を以論シ候へハ、旧幕列侯を被廢天下庫ニ湊納候ニ付而ハ、御国計不足ハ無之筈之事と被相考候様ニ御座候、旧幕之所得ニ而、只今之禁内朝廷諸省之費は弁シ可申哉ニ奉存候、旧藩所得之半を以只今養兵之費ハ相調可申旧藩所得三千万金と見候而其半千五百万金を以而も三十万之兵ハ養ヒ出来可申候、五百万金ヲ以當時旧諸侯・旧士卒之閑祿ニ費シ候而も千万金之所余御座候を、半ハ武器製造之料と出張練習之費ニ充テ、半ハ外交諸費ニ御取用ヒと申ニ而も事ハ足り可申哉ニ奉存候、孰レ之廉も定額ニ而給し不申、只々給し候丈ニ御処方候而可然哉ニ奉存候、尤外債藩債之儀根元何等之債ニ可有御座候哉、幾億万兩と申程之様伝承仕候、此ノ分敵密ニ利息年々差出候と申ニ御座候へハ、一割ニ而も幾千万金を費シ、朝

廷ニは所入ハ無之姿ニ相成候、藩債とは旧諸侯自発之楮幣并ニ巨商より之借財等ニ可有御座哉、是等ハ国内之義ニ付如何様共支消出来可仕、外債ハ如何之物ニ可有御座哉、是以四海兄弟之無態ニ相成候ニ付而は、息を止メ期を緩フシ、或ハ券ヲ焚カシムル等之応接相立候義ニは有之間敷哉、官村既ニ擢シテ兵勢又強ク候ハ、決而超超長縮ニ不及、断然国論被為立、情義相通シ、彼も納得致候様應復有御座度事ニ奉存候、国家一日モ縦弛ス可カラサル者ハ官ト兵ニ御座候、富国強兵と連ね称シ候も、費ハ兵ヨリ大ナル者ハ無之より之事ニ可有御座奉存候、兵を強く致候而も国財之乏置セサル様ニ可致と古より反覆論説致有之候事と奉存候、就而は他件ニ何程御差支有之候迎、官禄ヲ削り、兵給ヲ減シ候と申義ハ、御奉行有之間敷御事ニ奉考候、官省諸員相整ヒ府県兵士既ニ足り候ハ、余事ハ匆皇遽忙ニ成効御急ぎニは不及御事ニ可有御座候、外交上ニ致候而も物品貿易彼ノ新奇ヲ喜ヒ彼之物ヲ得而殆ント万金を出し、我之物を販ヒテ僅ニ千金を

入るゝ等之事、其他諸新事件先ヲ争ツテ興作シ、各速効ヲ求メ候より計面窘蹙(トヤ)金源忽涸渴シ、黄白地ヲ掃ヒ、券契重沓スルニ至り候、皆根元急忙事より起り候義と奉存候、文明開化も我之国体を護、惜シテ漸々導誘不致而は、即チ峻剂病ヲ療シ、病愈ヘテ身隕ルノ憂難免と奉考候、使節応接彼此往復之費も必しも彼之饜待既ニ此ノ如シ、我ノ聘具も須く此ノ如クス可シと一著ヲ彼ニ先制セラレ候意味ニは不及義と奉存候、各国ニ各形有リ、各時ニ各勢有リ、本邦今昨親裁創業之際、藩県廢置之初メ、戎馬之余擾、官省之新設、皆彼ノ目撃スル所ニ候ハ、前ニも申候如く公然彰然事故ヲ通示シ、我之体裁ヲ屈撓セス、信威相接し候工夫ハ樽俎之間ニも手段可当之義と奉存候、右ニ付今日厚財之道ハ開化之新事件を緩ニスル之外無御座と奉存候、別段生財之策ニは及不申、孰レ之國迎も立国ニ欠乏ハ無之様ニ天賦固定致居候義ニ付、唯々簡徐之二字ヲ以万務漸次御奉行候ヘハ貨財不足之患ハ無之筈之事ニ奉私考候、興一利不如、除一害と有之候ヘ

とも、当時ハ文明之際ニ付、害ヲ除ケ畢リテ後利ヲ興ス  
ト迂闊之見解ニ而も難相成候ニ付、旧害ヲ除クハ數百年  
之弊習、其ノ甚敷所より漸ヲ以消除シ、新利ヲ興スモ今  
日上之必用尤切ナル所ヨリ漸ヲ以興作シ、各々急緩之次  
序ヲ整列シテ著手セシメ、積累進歩候様ニ有御座度ニ千  
々万々奉私考候義ニ御座候、右之通ニ御施設候而も意外  
之大憂患、俄然差起リ難被行届御事も候ハ、本より全  
国内之大憂患ニ付、一時全国之力ヲ以如何様共応変之支  
撐ハ出来為仕候義当然と奉存候、夫レ故兼而煩密繁碎小  
利ノ策略節目ハ大振リニ被召置、万民恩沢ニ十分涵泳滯  
滯致シ難有と申ス義肺肝ニ染徹為致置候ヘハ、普天率土  
皆王之府庫ニ候ヘハ、一旦緩急ニは無遠慮御取り用ヒ不  
苦形勢也、且ツ道理也と奉存候、些不倫之比較ニも候ヘ  
とも、兩本願寺之民財を得候は、誠ニ濡手掬梁之有様御  
目撃も被為在候半、辺土遠国之端迄も他ノ勸エヲ待タス、  
每寺之掛ケ箱ニ人々莊嚴之志錢投入致置候情態、如何之  
所由と被思召候哉、右ニ付別冊田法稅制等も総テ立論之

体、此ノ開化之最中誠ニ不相当至極と可被思召候へとも、  
即チ是卻而取予之要方と愚案仕候間、外ハ寛以テ民ヲ安  
ンシ、内ハ簡以テ費ヲ省き、尤モ急拏忙動ヲ止メ、偏ニ  
漸導徐誘ヲ勸メ奉り候義ニ御座候、府下并ニ諸港コソ駭  
々開化之様ニも相見ヘ候へとも、二千五百年固定之国体  
三百年間習安之人情、只今之通り引立テ候とも、全国開  
化之域ニ躋り候義ハ二三十年ハ経不申而は山野之隅迄行  
届候義ハ無覺束奉存候、実ニ一大難事ニ御座候、然し  
本邦而已開化出来難致人物ニは無之儀ニ付、是非文明ニ  
進歩ハ為致度、但急迫ニ而は卻テ成効難相成と見込申候  
間、反覆鄭重、漸ヲ以旧習ノ甚シキヲ改メ、漸ヲ以新利  
ノ功ナルヲ興シ候様有御座度、愚見不差置奉謹陳候義ニ  
御座候、尚右ニ付而は文学教導并行之管見申上度儀も御  
座候へとも、未タ思索熟得ニ至り不申候間、重テ上言仕  
度奉存候、抑限之蝨々弗可俱謀始固ヨリ 廟堂上ニ而は  
深慮遠猷被為相立居候御事とハ万々奉存候へとも、被為  
御覽候通人情急激之世風ニ而、或ハ其奏効ヲ待タス猝カ



ニ紛紜雜擾ニ赴キ候半も難測歎ト深く杞憂之想ヲ作シ候  
義ニ御座候、掛卷モ乍恐八百年來之御復典、若シモ一時  
之輕忽ヨリ崩解ニ赴キ、遂ニ收拾シ難き之國勢ニも相成  
候ハ、在天

神靈之鑑臨如何可被為在哉と思念此ニ及候へハ、真ニ難  
奉堪戰兢悚慄小臣某誠恐誠懼伏

闕奉謹白候也、

明治六年一月 牛込岩戸町寄留広瀬孝同寓  
三滌県士族

集議院  
御中

石井滝次  
四十三歳



冊子原寸 縦二五・五種 横一七・五種 七枚

一六六 政府歳出入、府県費、内外国債概表  
〔表紙〕(朱)  
〔校正〕

明治六年

金穀出納及内外国債概表 全

歳入

〔<sup>朱</sup>全国高三千六百二十二万石余〕

正租反高大繩場

金貳百七拾四万三千三百四拾四円

内貳拾万円 畑永暨安石代改正増見込

米千百九拾八万五千六百貳拾石

東京府下税其外

金貳拾壹万七千七百九拾三円

内

金拾七万七千七百九拾三円 諸税

内金四百万円 地稅見込

金四百万円 地所払下代

大坂府下税

金拾万九千五拾五円

内貳万円 地稅見込

京都府下税

金貳万三千六百七拾六円

内金老万円 地税見込

造酒醬油税

金九拾万円

蚕種紙税

金貳拾万円

牛馬鑑札税

金貳万円

諸懸物 延米口米代金口永之類

金九拾万千貳百四拾円

国役金

金拾壹万九千六百九拾四円

各港諸税

金百貳拾六万五千五百壹円

内

金百万円

横浜

金拾八万円

兵庫

金貳万五千三百四拾壹円 大坂

金六万円

長崎

金百六拾円

新潟

東校納

金八千九拾円

汽車電信機

金貳拾万円

雑科 欠所物其外諸払物代之類

金參拾万円

駅通納

金五万円

歳入総計

金七百五万六千三百九拾三円

米千百九拾八万五千六百貳拾石

〔此金三千貳百九十六万四千四百五十五円、但老石ニ付貳円七十五銭ノ見込〕

〔卷〕  
総計

金四千老万六千八百四十八円

外金三拾万円

官林及荒蕪地払代払高  
牛酪之利益牧場上納物

但シ勸農開墾要費ニ充ツ

歳出

官省使歳費

太政官

〔卷〕凡積

金貳拾七万八千四百九拾老円

内

〔卷〕定額未極

金拾老万六千九百五拾貳円

内

金貳万四千元

史官用度局

金九万貳千九百五拾貳円

月給

金拾老万千七百八拾七円

左院

〔卷〕定額未極

金四万九千七百五拾貳円

式部寮

内

金貳千四百円

祭典入費

金四万七千三百五拾貳円

月給

外務省

金拾五万八千七百円

大蔵省

(米)「定額未極」

金三百九拾六万四千四百五拾円  
米貳百八石

内

金貳万四千五百五拾八円

省中諸費

金貳万六千円

駅通寮

金壹万五千元

翻訳局

金七百円

貨幣改所

金拾九万七千六百六拾円

税関及各寮出張所  
諸費月給

金三千貳百円  
米貳百八石

浅草倉粟及貢米  
納会所

金三拾九万七千三百七拾八円

在東京  
官員月給

金拾七万七千八百六拾七円

同旅費

金六万八千九百八拾七円

外国人雇給料

金百万円

回米運賃

金五万円

富岡製糸場

金五拾万円

旧藩楮幣引替  
及運送入費

金拾三万円

郵便改正

金拾五万円

紙幣寮建築

金壹万五千元

度量衡改正

金拾万円

租税及負債改正貫屬  
家禄調官員増凡見込

金拾六万円

鋼錢鑄造所建築  
及鑄造諸費共

金六拾七万三千六百円

楮幣改造

金七万五千元

國債証書製造入費

金貳拾万円

開港場運上所  
改正建築其外

陸軍省

金八百万円

海軍省

金百八拾万円

文部省

金百三拾万円

教部省

〔米〕凡積  
金拾壹万六千七百円

内

金四千八百円

定額

金九万六千六百五拾五円

月給凡積

金壹万五千貳百四拾五円

臨時諸費

工部省

金貳百九拾万円

合計

金貳千三拾六万三百四拾壹円

米三万六千五百九拾石七斗六升七合

司法省

金四拾六万円

府県歳費

東京府

金三拾貳万四千円

宮内省

金五拾八万貳千円

大坂府

米貳千四百石

米壹万八千石

米四千七百八拾壹石貳斗

内米三百九拾八石四斗三升三合改曆ニ付壬申冬一ヶ月渡越  
之分引之

金貳拾三万五千四百五拾五円

米貳千六百四拾石

米四千三百八拾貳石七斗六升七合

宮方家禄

京都府

金三拾貳万貳千七拾六円

米千八百石

県

金貳百三拾壹万四千九拾貳円

米拾九万七千三百石

内

金百五拾万八千貳百貳拾貳円

金拾三万三千七百七拾円

金三拾壹万九千五百円

金貳万五千元

金拾三万六千四百円  
米拾四万六千石

金拾九万三千三百円  
米四万四千九百石

米六千四百石

金五拾万円

三府邏卒入費

金六拾貳万九千三百拾三元

内

金五拾五万五千元

金四万八千元

金貳万六千三百拾円

東京  
京都  
大坂

各県捕亡及邏卒入費

金貳拾七万六千八拾七円

内金三万五千六百七拾三元

神奈川  
新 潟 港 邏 卒 入 費

各港入費

金拾六万五百円

内

金八万四百円

金四万六千八百円

横浜  
兵庫

各県常費増及官員出張費見込

金貳万三千円

長崎

米四十石万六千九百八拾五石六斗六升五合

金壹万三百円

新潟

改曆ニ付壬申冬一  
ヶ月通渡過之引

米四百五拾八万六千八百四十石三斗壹升壹合

合計

金五百七拾五万六千貳百貳拾三円

米八拾八万七千九拾貳石六斗貳升五合 華族

米貳拾万四千四百四拾石

米三百四拾七万三千三百三拾石壹斗八升七合 土族

米貳拾貳万三千七百三拾六石壹斗六升六合

諸歳費

官方及華族土族賞典

貫屬家禄及賞典

米四千五百八拾三石三斗三升三合 十津川郷土賞典

米五百万三千八百貳拾七石九斗七升六合

内

營繕堤防

米九拾六万七千八百四十六石五斗

華族

金四百五拾万円

米三百七拾八万六千九百五石六斗五升九合 土族

上水普請

米貳拾四万四千七十五石八斗壹升七合

金壹万五千元

官方及華族賞典

内国公債年賦 旧藩旧公債

米五千石

十津川郷土賞典

金五拾万八千七百円

明治五年分  
同 六年分

右之内

同上利足

旧藩新公債

金百拾万四百円 同上

同上一時償還 旧藩新旧公債貳拾五円未滿之分

金貳拾五万円

英国公債年賦

金四十五万円

同上利足

金三拾七万円

負債所置一件

金拾万円

勅祭

金拾万円

外国交際

金貳拾万円

親王并随行人員留学費

金老万円

特命全權大使洋行費

金拾七万貳千三百円

澳國博覽會

金貳拾四万貳千百三拾円

内

金九万貳千百三拾円

物品聚集及運送著述費用

金拾五万円

諸費用

東京民屋建築費

金百八拾九万七千六百円

合計

金六百九拾老万百三拾円

米四百五拾八万六千八百四拾貳石三斗老升老合

歳出総計

金三千六百三万貳千六百九拾四円

米四百八拾貳万七千五百七拾三石七升八合

〔米〕此金千三百二十七万五千八百二十五円余、但老石ニ付二円七十五錢ノ見込

〔米〕  
一総計



金四千九百三十万八千五百拾九円

歳入出比較

金九百貳拾九万六千六百七十壹円 歳出之方過

内国債 明治六年一月一日之高

内国債

凡金貳千六百四拾七万四千三百五拾壹円 旧藩負債高

内

凡金千三百七拾五万五千八百七拾三円 新公債

凡金千貳百七拾壹万八千四百七拾八円 旧公債

外国債

凡金五百五拾万九千五拾円

内

百五拾万弗

此凡金百五拾万円

百万磅 内拾万九千百磅

下関償金 但壹弗ヲ凡壹円ニ算ス

証券買上之分引之

八拾九万九百磅 鐵道及鉸山公債  
此凡金四百万九千五十円 但壹磅ヲ凡四円五十錢ニ算ス  
内外国債合計

凡金三千百九拾八万三千四百壹円

楮幣 明治六年一月一日ノ高

凡金八千九百四拾五万六千九百九十八円 拾八錢六厘

内

金四千三百二十五万八千三百六拾貳円 大政官札

金七百四拾七万六千七百九拾八兩三分壹朱 民部省札

金千四百五十三円八百七十八円 新札

新貨ニ徴 凡金貳千四百拾九万五千八百八拾壹錢壹厘 旧藩票旧 旗下札

冊子原寸 縦二四・五種 横一六・五種 一〇枚

一六六 四等議官丸岡莞爾「立国基礎」之議

立国基礎之議 四等議官丸岡莞爾

世間立国ノ体各一ナラスト雖モ、概ネ君民同

(朱) 一此一段是 治・万民共治・君主專治ノ三ニ出ス、而シテ

西人之所最羨而我邦而何苦哉  
尊而此體

〔朱〕此一團是即日本魂此一團精神之精且靈者名之曰賢明曰才能具此四德者

吾國ノ如キハ又各國ニ比類ナキ一種ノ国體ニシテ、假令ハ万民共和奉戴一君トモ名ク可ク、  
樞原朝廷以降治乱盛衰ノ小沿革ハ之アルヲ免カレスト雖モ、コノ大体ニ至テハ二千五百余年、只一日ノ如クナリシナリ、蓋其淵源ハ測リ知り難シト雖モ、史冊ノ載スル所、諷詠ノ伝フル所ニ因テ之ヲ徵スルニ、当昔我々ノ祖先列聖修理固成ノ恩沢中ニ生死シ、其感激ノ余寧ロ一身ノ權ヲ失ヒ、命ヲ捐ツトモ天津日嗣天津ヒツキ之高御座之位ノタカミクラ即位至尊ノカミウケラオ、ヤシマクシシロシメス惟神馭大八洲トコロ即獨立自主權利ヲ天壤ト無窮ニ保タセ給フ様ニト、真誠ニ甘服シテ朝廷ヲ尊敬セシ所ノ精神、コノ国體ヲ結ヒ成タルモノナリ、サテソノ精神ヲ子伝ヘ孫襲テ現今ニ至リシコト、人々自反シテ知ル可ク、サレハコノ我々ノ頭腦ニ宿ル所ノ精神固結シテ一団トナリ、以テ朝廷ニ奉仕スルコト昔日ノ如クナラハ、国體ハ愈確然不拔

而列於朝是古來之法也吾朝之美也自今而後萬民共和撰其人一君毅明奉其一人斯可

〔朱〕

近視之於其上下和合スル誠実ノ藹然タルモノ、彼ノ外ナルヘク、又コノ精神渙散シテ各一己ノ自由ヲ營ミ、至尊ヲ視テ一高貴ノ官人トスルコト彼ノ文明諸国ノ如クナラハ、国體ハ是ヨリ一新面目ニ變スヘシ、コノ毫厘千里ノ岐、是レ当路者ノ深ク心ヲ用ユヘキ所、夫レ君主專治ト云ヒ、万民共治ト云ヒ、君民同治ト云フ、是皆形ニ由テ名ヲ得ルモノナリ、モシ理世安民ノ事実ニ於テ尚遺憾アランニハ其名美ク、其形秀タランモ固リ以テ天津神即上帝ノ意ニ適ス可ラス、苟モ理世安民ノ実奉リ、闔国民情ハ甘服シ、且ツ祈願スル所ニ国體ヲ立ンニ、假令他国ニ比類ナキモ何憚ルニ足ラン、比類ナキ是レ尋常ニ優レタル者ナランモ亦知ル可ラス、況ヤ吾国ハ神代ノ昔ヨリ君ノ民ニ於ル之ヲ恤ム赤子ノ如ク、又民ノ君ニ於ル之ヲ敬スル敵父ノ如ク、之ヲ怙ム慈母ノ如クニシテ、

「（朱） 帝一敗彼  
民唾棄之  
豈謂之文  
明風俗之  
美乎」

「（朱） 政教律皆  
不離国体  
而後国体  
確立矣」

国ニテ鄙ム所ノ專治諸国ノ君民相忌憚シ、ソ  
ノ相視ル動モスレハ土芥寇讐ノ如キモノトハ  
固リ天淵懸隔ナルヲヤ、サレハ日本ノ国帝ハ  
日本ノ国体ヲ確守シ、以テ日本先王ノ遺民タ  
ル日本ノ人民ヲ保護シ給ヒ、又日本ノ人民ハ  
日本ノ国体ヲ負擔シ、凡ソ官吏ノ職ニ在ルモ、  
農工商ノソノ業ヲ営ムモ、皆是自己ノ為メニ  
非ス、即チ日本人種ニ固着シタル所ノ勤王ノ  
務ニシテ、之ニ因テ自己ニ得ル所ノ潤沢ハ、  
即チ聖明ノ賜ナルコトヲ遺忘セス、以テ日本  
ノ国帝ニ奉事シ、コノ君民ノ確守シ負擔スル  
所ノ国体中ヨリ建定スル所ノ規矩ヲ国律ト云  
ヒ、施行スル所ノ事務ヲ国政ト云ヒ、邪ヲ戒  
メ善ヲ勸ムル所ノ訓誨ヲ国教ト云ヒ、コノ律  
ト政ト教トニ服従スル所ノ人民ヲ国民ト云ヒ、  
凡ソ國中ニアラユル森羅万象一モコノ国体ニ  
統轄セラレサルナク、然後万国ト並立スルノ

功效得テ議スヘキナリ、是レ立国ノ基礎、而  
シテ万機ノ因テ出ル所伏テ諸賢ノ協議ヲ乞フ、  
癸酉一月

「（朱） 本議堂々間然ナシ、唯恐クハ人ノ看テ以テ尋  
常平田家流ト比論センコトヲ、此論是レ決テ  
死眼者ノ知ル所ニ非ス、真活眼者ニ非ンハ知  
ル能ワサル所ナリ、嗚呼是人是論ナクンハ吾  
安ニカ適婦セン、

三月十一日 一等議官谷鉄臣識」

大旱ノ後必霖雨アリ、物ノ均シカラサル動モ  
スレハ偏重シ、動モスレハ反对ス、概ネ然ラ  
サルナシ、モシ辛ニ五風十雨寒暑宜キニ適シ、  
暖涼節ヲ失ハサランニハ人民旱澇ノ患ヲ免レ、  
凶饑ノ災ニ罹ラサルヘシ、太平ノ福何事カ是  
ヨリ大ナラン、然ルニ民ノ情タルヤ早ニハ則

雲ヲ望ミ、雨ニハ則日ヲ望ム、ソノ望ム所ノモノ亦能ク我ニ禍スヘキヲ願ハサルナリ、蓋戊午・己未ノ頃ヨリ有志ノ士、其論其氣齊ク勤王ニ趨リ、愴慨義烈ノ余或ハ殘暴酷薄ニ至リシト雖モ、終ニ此ヲ以テ戊辰一新ノ大業ヲ成就ス、爾來文明開化ノ說一タヒ世上ニ伝播シ、時好ニ競フノ徒、朝ニ野ニ響應景從シ、終ニ公平ナル政治ハ共和ヲ以テ最トスヘシト云ニ至リ、前日勤王ノ文字ハ地ヲ扠テ燼キタリ、是此議ノ作ル所以、即チ霖雨ニ日光ヲ企望セシモノナリ、今ヤ天運循環シ、雲霧將ニ霽ントスルノ機アルカ如シ、惟恐クハ旱魃ノ代リ至ランコトヲ天モシ憐ヲ爰ニ垂レ、ヨク平穩ノ時候ヲ授ケ、五風十雨ノ度ヲ錯ラスハ、国家人民無上ノ幸福ナルヘシ、天下万全ノ理無シト謂フト雖モ、乗釣者ノ期スル所豈万全ニ在ラサルヘケンヤ、中外阻テス、細大棄テ

ス、長ヲ断チ短ヲ補ヒ、以テ理勢ノ宜キヲ制ス、是我カ時務ヲ識ルノ俊傑ニ默禱スル所以ナリ、

庚戌四月

莞爾重識

冊子原寸 縦二七櫃 横一九・五櫃 六枚

一六九 旧人吉藩新宮簡ノ対韓対露策ニ付除族終身

禁獄処刑ノ顛末記

一冊

一九六九ノ一

小子犯由予テ御聞及可有之候ヘトモ御含迄大略

相記シ候儀左之通

第一御維新以来奥羽ノ朝敵御裁定ノ末、其余燼且燃且滅シ、東北ノ奸慝出沒、不軌ヲ謀リ、長防ノ激徒攻戦ノ後西南ニ潜匿シ、本土ノ回復ヲ期シ、大村大輔(益次郎)・広沢参議(貞臣)ノ暴殺、南鍋町英国人ノ暗刺、福岡ノ訴獄、来目ノ動搖(通旭)・外山両公(光輔)ノ拳、草莽諸藩有志ノ論、柯太取捨(樺太)ノ議、朝鮮和戦ノ策ヲ建ルニ至ルモ、皆到底御交際上不得宜ヨ

リ、一時憤慨ノ余物情騒然ニ及ヘリ、加之廢藩置県ヨリシテ解刀断髮・四民同権・冠履服飾等御改制追々御踐行可被成処、是迄国体ヲ講シ名分ヲ説キ候輩自然相妨、遂ニ何如ナル變動ヲ生セムモ計リ難シトテ、朝野トモ有志ノ徒悉ク一大綱ニ駆尽シ、専ラ欧米ノ風ヲ移サムノ廟議ニテ、諸党夫々捕獲檻致セラレ、辛未春三月ニ至リ、矢野大博士・権田中博士・中沼侍読・米川学務・小河宮内(金道)(倉助)(令三)(徳)大丞・坂田神祇大史・青木寺院助・松村少史・長沼弾正巡察・鳥居弾正巡察・島田建部長・山田青森県知事・中村岩鼻県参事・落合中野県参事皆生ガ交接中有志ノ魁也、其他数十名及生共前后五七日間ニ御不審ノ義有之、諸藩へ御預相成、生ハ則チ福井県へ渡サル、実ニ同月廿二日正午也、何レモ只御嫌疑ノミニテ別ニ御糾弾筋一向無之、生ハ已ニ山口中弁ヨリ東京府へ掛合ニテ、外ニ御不審ノ儀無之候ハ、本藩へ当分御預替可執計トノ儀ニテ、事解ノ方ニ相運可申処、初回糾弾一通ニテ草莽貧困ノ士ニ許多ノ金ヲ賑ハシ、且王子海老楼ニテ大会議相催シ候旨

総テ相弁シ候処、愛宕公党与之者所持懐中ニ小子宛名ニテ西洋紙小片ニ、先外患ヲ攘ヒ候方ハ差置キ、内憂ヲ除キ候方ヨリ相始申度貴慮何如、委細ハ当人ヨリ御聞取御意見可被仰遣候ト、一ト口書ニ有之候由、右ハ高知人某・豊津人某ヨリ被托生へ面会ノ上相運可申旨趣、素ヨリ愛宕・外山両公ノ事ハ此席ニテ初メテ承及候コトニテ、右は未タ生ノ手ニ触レ不申儀ニ付、遂一弁解等明瞭相立候処、又々秋田藩中村恕介所持書類中ニ、征韓ノ部署職務割付、豊津・来目・秋田及ヒ北越三隊、草莽有志隊等多人数相認メ、第一頭ニ生カ名ヲ掲載セリ、此儀ハ如何ニモ恐入候儀ニハ無之哉ト官吏ヨリ糾弾詰問有之候ニ付、右ハ来目邸クルメニテ其藩古松簡二・高知藩岡崎強介・豊津藩志津野拙三・同藩二沢一夫・笹山藩畑経世等邂逅酒讌中、御交際上之五大事件、即洋教制禁・条約改定・支那締交其尤差迫候ハ柯太事務・朝鮮事務也、其進ントスル英・仏、韓ニ抛ラハ何如セム、退カムトスル魯・米、柯ヲ略スレハ何如セム、其進退維谷ル、是志士仁人投命敢死事

ニ幹タルヘキ秋也、内憂何如ノ論ハ吾カ取ラサル所、兄弟鬩牆ノ時ニ非スト論難傲昂半酣ニ至テハ、田將軍源廷尉ノ古ヲ欽シ、神功后、豊太閤ノ昔ヲ憶ヒ、反覆論談座間自ラ痛快壯烈ノ英氣勃々ト生シ、遂ニ彼京畿道ニ闌入シ、七道ヲ拳テ蹂躪シテ外征ノ矯矢トナル、夫レ吾輩ヲ於テ誰レカ有ルナト悲歌感慨、生北海ノ征役ノ勞鬱此席ニ於テ初テ解クルノ思ヒヲナセリ、此時古松筆ヲ把リ、事ニ幹タル者数名ヲ記シ、互ニ地図ヲ按シテ経略ヲ説キ、一先廟堂ニ抗疏シ整々堂々出師ノ事ヲ迫リ、御採納無之時ハ薩土ノ諸豪傑モ此論策有リト聞ク、即チ此レト共同シ有志輩明許ヲ得テ事ニ從ハム、尚御聞届無クハ願捨ニテモ同志輩ヨリ西征ノ功ヲ奏センナド相約シ、他日好機會ニ投シテ施スヘキモ、猶再議セムトテ各自ニ退散セルノミ、然ル尅恕介所持ノ連名書ニハ金穀鐵櫃器械彈藥若干種委詳ニ挙ケ、数十人ノ姓名ヲ添加シ、頗ル修飾シ征韓論ヲ主張シ、頻ニ党ヲ募リ游説セムトテ、岡崎手ヲ入レテ清書シ、未タ一面識ノ有無ニ拘ハラズ、有名

ノ諸士悉ク記載セリ、即其説ヲ聞キ心ヲ傾ケ共ニ為サムトスル者モ有テ、恕介モ岡崎ニ接シ、右連名書ヲ以テ其党ヲ説キ、相共ニセムトシ、岡崎子ニ乞ヒテ其書ヲ借受シ由也、夫故予カ知ラサル人大半也、右ハ後ニ岡崎ヨリ聞知ル所ナリ、其席ニハ東京府ノ壬府知事公・同大小参事土方中弁<sup>(久志)</sup>・玉乃大判事<sup>(世應)</sup>・片岡小判事等出役ナリ、右ノ件弁解向何如様ニモ可相立ナレトモ、難ニ臨テ苟モ免ル、コト素ヨリ丈夫ノ愧ル所、其鄙怯乞憐ノ蹟ヲ厭ヒ、自ラ任シテ論弁ス、且古松・岡崎ハ内憂ヲ除ク自論アリテ防長ノ脱士及来目・秋田・水戸諸藩草莽ノ徒ト氣脈ヲ通シ、虎ニ乗ルノ余勢ナルニ、事皆敗レニ就キ頗ル狼狽<sup>イ</sup>ノ余縛セラレ、本罪ヲ以テ論セラルレハ一死免ル、二道ナシ、故ニ偶々来目邸一時酒上ノ激談ヨリ征韓ノコトニ生ニ説カレ、其論ニ服シ前志ヲ翻シタリト云フヲ以テ弁スト、右ハ畑ヨリ頼ミ来ル、之ニ依テ生モ征韓ヲ以テ任シタルモ災禍ノ諸子ニ及フヲ以テ敢テ避ケサルトコロナリ、然リ而シテ鞫問中弁スラク、生カ此極ニ至ル一朝一夕ノ

事ニ非ス、其根拠スル所生カ北海ノ奉事ニ起レリ、則戊己ノ年柯太出張兼開拓事務被命、先年旧幕府箱館奉行小出大和守取扱来ル、雜居仮条約面追々本条約ニ結替ノ事務談判専ラ御国体是ヲ不辱様ノ義ニテ、恐多クモ天顏ヲ拝シ御杯ヲ戴キ、絹及綿等ノ恩賜アリ、玉座ニ咫尺シテ勅諭ヲ奉シ、且三条公台命、并ニ鍋島開拓長官・沢外務卿等御委任状ヲ下シ給ヒ、此ニ於テ感激速一途ニ上リ、岡本開拓判官文平、谷元外務權大丞道之始外務開拓ノ諸官員付屬百数名柯太ニ達シ、会合集議、即チ実地ニ就キ施行スヘキ方略ヲ指陳シ、農工婦兒共ニ数百人東京及ヒ奥羽ヨリ移植セシ者ヲシテ各自ニ其事ニ從ハシム、然ル処魯人殘暴頗猖獗ノ勢アリテ官庫ノ物品ヲ盜窃シ、兇見ノ炭坑ヲ強奪セムトシ、土人ヲ驅逐シ墳墓ヲ掘発シ箱泊ノ漁業場ニ大埠頭ヲ築出シ、其他種々妨害ヲ為シ、我カ川島權大録ヲ始数名御交際上隣交親睦ノ義破ラムコトヲ恐レ、暫ク忍耐シテ彼レカ凌虐侮辱ヲ受ク、是国家ノ榮辱皇威ノ張縮其關係スル所最大也、其傲慢無礼、一

々其罪ヲ上ケテ公法ニ照シ、談判數回、即齊藤大録・本多少録ヲシテ速ニ上京セシメ先事ノ概略ヲ奏ス、然ル我壯士輩彼カ輕蔑放恣ヲ憤リ、其跋扈跳梁(竊カ)ヲ制セムトテ事ヲ論シ、彼ノ營ヲ斫リ、彼ノ虜ヲ殲サムノ議アリ、我諄々説諭、朝裁ヲ請フヲ以テス、此ニ於テ人心稍鎮靜ス、則生及谷元道之始十余人、南上ニ決シ雪山ヲ跋エ、海水ヲ涉リ、帰朝シテ委曲ノ情状実地ノ經驗ヲ奏ス、叡感有テ慰勞御褒賞トシテ官員一同へ金若干兩賜ハル、其建議數件、就中北海ノ石狩、羽后ノ野代ヨリ千五百軒ノ家屋ヲ切組ミ本地ニ建設シ、駅通ヲ弁シ、南地ノ五稜郭ヲ本土ノ中心敷香ニ移シ本府トシ、益植民屯田ノ策尽ク御採納ニ相成リ、尚魯国政府へ十分ノ御談判可被遂ノ廟議俄ニ一變シ、魯国強大ノ余勢ニ畏怖ノ氣ヲ生シ、遂ニ其曲直彼我ノ弁ヲナスコト能ハス、甚シキ柯太・千島共ニ売却スヘシ等古史ニ昭々タル我板図ヲ割削シ胡羯ニ飽厭セシメムトス、是ヲモ忍ヘクンハ何ヲカ忍フ可ラサラム、又彼レカ朽船一艘ノ価ナシト嗤笑スルニ至ル、或ハ境界

論又雜居論トナリ、弥以テ彼カ吞噬ヲ逞セムトス、此ニ於テ生等ヲ始、有志ノ諸官員、廟堂及大臣參議ニ迫リ、前議ヲ主張シ、勅諭台命御委任状等泡露ニ属シ候義有之間布、万一柯太ヲ廃棄セムノ議ニ出テハ、越国ノ臣トナリテ其地ニ雄拠セムナト議論割切ノ余、豊津藩本地出張川本六之允慷慨漏ス処ナク、絶命ノ吟畏クモ綸言汗ノ如クナラサル意ヲ賦シ、屠服死ヲ以テ諫ム、尚其説行レス、是ニ於テ諸官員悉ク辞表ヲ出ス、慰解金ヲ賜フ、固辞再三総テ解職ス、生ハ御聞届無之不得止其佞奉職、然処支那締交ハ追々緒ニ就キ、相運可申条約改定ノ期ニ迫リ、我邦異教ノ頑民処置ノ件ヨリ柯太ハ勿論朝鮮ノ事務ニ至リテモ、元ヨリ其心(信)シ難キ条々有之、之ニ依テ又々辞表是亦御聞届無之故、鷓退ノ義再三ニテ漸ニ御聞濟ニ相成、聊任責ノ稍輕キヲ覚ユ、少シク安スル所アレトモ天恩万一ノ報答ヲ期シ、死以テ尽スヘキ者職掌中前ニ朝鮮后ニ柯太ノ事務、頻ニ杞憂ノ念不止、大臣・參議・卿輔ニ迫リ且夕忘ル、時ナク、其鬱結ノ情漏ル、所ナクシ

テ来目藩邸ノ酒座初テ小愉快ヲ買ヒ得タルノミ、其他沢公御前ニテ諸有志ノ激論ハ、旨趣中島氏ノ犯状中ニ詳也、予偶其席ニ在リテ其言ヲ聞クモ、其情ノ顛末ヲ探知セストテ悉ク弁解シ、決シテ沢公閣下ニハ御不審相懸候義ハ毛頭有之間布、右公へ管シ候義有之ト申者候へ、生ニ対決被仰付候様、公ノ御身上ニ触候義ハ一切生ニテ元ヨリ引受候心得ニテ弁セシ也、

口供大意

其方義、第一職務柄ト申シ精々説諭申聞等可仕管之処、朝憲ヲ不憚、諸藩士及草莽ノ書生輩ト共ニ御交際上ニ差響候事共輕議シ、不容易義相企候段、重々不届ニ付除族之上終身禁獄申付ル、

冊子原寸 縦二四・五種 横一六・五種 九枚

一九六九ノ二

先頃御建白之箇条、当今ノ急務此外ニ出スト奉存候、就テハ御上京国家万人ノ為メ御尽力在セラレ度候、不肖ノ



者右様申上候モ畢竟出位ノ言ニテ、其恐レ少ナカラスト  
雖モ、憂国ノ至情已ムヲ得サルノ際、其罪ヲ顧ミス吐露  
仕候、外ニ同志ノ者数人之レ有リ、鄙見ノ次第モ御座候、  
苦シカラサル儀ニ候ハ、高覽ヲ汗シ奉ル可ク候、頓首  
謹言、

明治六年一月 人吉 新宮 簡

從二位島津老公閣下

文書原寸 縦二四・五櫃 横三三・二櫃

(一九七) 向井新兵衛ヨリ小学生徒帯刀ノ建言

(表紙)  
「上」

学校之設は存養致知力行平天下ニ至るの学問と奉恐察候、  
仍而唯今小学校之御規則ニ而無闕漏管ニ候得共、小学之  
教は第一誠敬存養を主とするの学問ニ而其基本相立、夫  
より大学校ニ入り致知力行平天下ニ至る之次第ニ而可有  
御座候得は、其基本とする涵養持敬工夫は無虧欠とは難

申上、惟三級生之学科ニ三史略講解之御規則迄ニ而、外  
之講解之科目無御座、全体史類之講窮ハ、天下古今和漢  
之治乱得失因て来る所以之機微を察する学問ニ而御座候  
得は、心衰之權衡無之候而は、唯和漢古今之事跡人物等  
を知る途ニ(途カ)而実地ニ体認仕候而、今日之事業ニ施す事迂  
遠ニ罷成、頗記誦朗章之弊を醸出候半、仍而三史略講解  
之科目中江大学講解被相加、或問ニ因り存養省察持敬之  
工夫精密ニ致講窮、小学涵養之教を兼修め、左候而致知  
力行平天下ニ至るの学問ニ相及候ハ、扞格して不勝之  
憂無之生徒之有益尤不少儀と愚考仕候、且又体操之儀は  
一往被廢擊劍術御施行ニ付而は、平日も刀劍之心掛專要  
之儀ニ可有御座候処、当分生徒之内ニも脱刀ニ而出校之  
者も有之、学科之本意ニ背き候儀ニも相当り可申哉、仍  
而以来生徒之儀は帯刀仕候様御規則被相立度儀と奉存候、  
併散髪脱刀勝手次第之御布告ニは少々致違背候様ニも御  
座候へ共、擊劍之科目被建置候ニ付而は、生徒之儀は別  
段之御吟味を以帯刀仕候様被仰渡奉存候、右兩条暗愚

之僕致念得候訳ニ而は全く無御座、惟先賢之説ニ因リ把  
へ之愚情を以不願恐懼献芹仕候間、御評議之上、諸郷校  
江も尚又御吟味被成下、利害得失義理明白ニ是非之御沙  
汰承知仕度奉懇願候、謹言、

酉二月八日

向井新兵衛

本学校

御中

冊子原寸 縦二九・五寸 横二二寸 四枚

(符紙①)  
設学校教生徒不外於修身治国平天下、此亦可不待論而知  
也、雖然教有順序、学有次第、順序次第不可不審之、夫  
大学者何書也、大人之書也、薄学淺問之非所企而及也、  
況小学校已日曜有講小学論語之科、且三級生有許講論孟  
之条、然則学問之順序、孝悌彝倫之教足以略知其緒、不  
可謂独欠講経籍之規也、至於帶劍之事、小学第二校之論  
可謂得宜、

小学第三校

文書原寸 縦一四・七寸 横四一寸

(符紙②)  
夫学之設無他在明彝倫而已、凡所学自有順序不可失也、  
然則自卑而及高自近及遠、是乃所以下学而上達也、始習  
小学之節目、日講究其理而優遊涵泳、以明弁小学之微指  
得其極則終及大学之奧義、如此有順序則無踰等之憂焉、  
今三級之生徒講三史略、而今姑理会小学之要、以明究之  
後亦及第于中業、而研究大学之理義、足以得其奧義、豈  
為迂闊哉、是乃所以不失順序也、固三級之生徒稍授其大  
義、然而今忽然至令講大学之微指則不能逮、至於此猶恐  
有扞格不勝之憂焉、且夫学校科目苟開損益之端、則人心  
恟々規則不立、規則不立則学規靡焉、若有大害則固無不變  
更之理、雖然無大害則不待變更而可至於帶刀之議、則自  
朝廷既布告于天下其可否如何、若違背其令、則可謂不奉  
令矣、故不待論也、雖然未嘗聞政体之有本也、何則天下  
之法度不立故、人々嗷々不知所適從也、於是乎不可不察  
本也、政体之本立則枝葉從而萃、至此則百度得其宜方、

此時雖禁帶刀豈可得哉、是必然之理也、今帶刀一端之論抑顛末也、豈可不察本哉、今懇到切至雖吐露百端豈有益哉、今天下之政度無定法故除一害則一害生焉、除一弊則一弊生焉、天下擾々其勢不可不察也、故待法度定確之機而弁論可焉、今各校所弁論之利害得失、最可謂得其當焉、故不贅也、

二月

小学第一校

文書原寸 縦二三・八種 横二二種

(付紙③)  
小学校之設其法元來漢学を主張するニ非ず、天下之形勢ニ随ひ、方今有用之三学を目的とし、専靜岡県大家諸賢之手ニ大成し、一切彼ニ倣ふて階級等叙曲ニ品節いたし、且学科進歩順次之儀は、預め年期を積り、中業及第迄之楷梯表目致分賦、語学等之如き猶更年齢之分も有之、其間他技を不交様之学制ニ而、庚午年中学校被設しより、既ニ四年之星霜を経といへとも、未曾而其弊有を不聞、今更変易之論頗人心を動かすニ似たり、然れハ則規則之

通中業登進之上学庸致研究候而も猶いま遅と為す、何そ迂遠之名あらんや、帶劍之儀ハ人々可為勝手儀は勿論ニ候得共、帶刀規則ニ被召建候儀、全朝旨ニ相戻り候事件ニ付、可否之論ニ及申間敷儀と致評議、此段申出候、以上、

西二月

小学第四校

文書原寸 縦一四種 横一〇四種

(付紙④)

小学第二校

三級生課中加大学之説頗似(磨悉)□有理、然大学精微之理後生未遽易曉且如三史略、固読史之楷梯為童蒙、述之粗雖足知古今治乱興衰之故、比之全史抑末也、而今授稍解三史略之徒以大学恐不堪負荷、且中業課中既有四書、然則非闕束之也、至□散髮脫刀(磨悉)苟有志気者孰不歎之、然朝廷既布此令無違令、而禁之々理禁之焉、勢未可禁止也、姑待他日政度之定猶未晚也、

文書原寸 縦一四種 横五二種

〇一七五 松平慶永ヨリ久光公へ

公ノ上京建言ヲ促ス

一七五三 木脇祐治ヨリ久光公ノ御上京猶予ヲ乞フノ

書

此涯 御登京被為 在候哉ニ世説伝聞仕候、私式恐多奉  
存候得共、情當時之事情（願）觀察仕候処、何分不容易世情ニ

而、既ニ深キ 御尊慮之御旨御建白被為 在候哉ニ奉

窺候処、是以 御採用は勿論、却而新聞誌等ニ茂迂陋之

拙ニ非斥して、今哉殆と日本之言路閉塞之秋にして、譬

ひ此節 御登京 御尽力被為 在候共、復回之御都合ニ

は至兼可申哉、是而已苦心仕候、幾重ニ茂恐多奉存候得

共、何茂 聖慮ニ出候事共不被窺、唯要路一二之奸臣之

意表ニ出候事候やニ世説茂有之、実否更ニ不分明ニ而人

心茂不穩時機御座候ニ付、涯々卒然 御出掛ニ茂相成候

而は如何可有御座哉、万一因循狐狸之群謀中ニ踏され、

正義却而 御壅塞之場合ニ茂立至り申候様ニ而は、実以

残概之至此事と奉存上候間、彼是世情之模様等今一層

御熟考被為 立候上、可相成は当年中茂 御猶子之御都

合被為 在候様奉祈上候、何分反復之人心無情之習俗ニ

御座候得は、乍不及微身等之鄙情此事而已奉掛念候事ニ

而、傍觀黙止ニ不忍如此御座候、不願恐各御方迄歎願仕

候形行 御内聴江高達仕候御都合茂御座候得は難有仕合

奉存候、恐惶再拜、

明治六年

二月十五日

第二大区小八区  
土族 木脇祐治

二九

御役方  
御中

文書原寸 縦一六・五釐 横一三五・五釐

一七五三 東京折田利建ヨリ有馬莊十郎へ

近衛隊解兵ニ付旧薩兵ノ帰県又ハ教導團入り

ノ件

尚々、御家内御一統様へもよろしく御鶴声被成下度

奉存候、悪筆文面前後御用捨可被下候、

一輪致呈上候、余寒難凌御座候得共、いつれ茂様御揃、  
弥以御安康可被成御座奉欣喜候、次ニ我輩初愚弟ニ至迄、  
至極強壯無事罷在候間、乍慮外御休意可被下候、扱於爰  
元近衛隊之義、総而今般解兵被仰出、六番大隊丈ハ当月  
初メ解隊帰県いたし、四番大隊ハ十四日比同断、五番大  
隊ハ廿日解隊、翌廿一日帰県、一番より三番大隊迄ハ惣  
而復役教導団志願人数除ク之外、三番大隊江編入被仰付、  
教導団并復役人員ハ二番大隊江屯集、幼年学校志願人員  
ハ一番大隊江同断、復役人数ハ既ニ明日発足被仰付候ニ  
付、一筆御左右迄申上度、我輩等ニも是非一応ハ帰県被  
含御座候処、上下土官之義于今何共御沙汰無之、乍併今  
明日之内ニハ決而何とか御沙汰被為在候半と日ヲ数そヘ  
相待事御座候、我等如キノ不輩者ハ定而非役ニ相違無御  
座候ニ付、一日も早く帰県之方仕合御座候得共、何分難  
致瑞意いつれ御沙汰相待より外無他、不遠御目懸三四年  
ふり之長嘶可申上候間、御待可被下候、委細之義ハ今般

帰県人員より御聞取可被下候、非役ながらも従前之仕事

始末かた／＼取込ニ寄り荒々如斯御座候也、

西  
二月廿二日  
折田利建

有馬莊十郎様

御同姓要之助様

其外皆々様

参人々御中

文書原寸 縦一六・三種 横一〇五種

一六番 斎藤懋ヨリ川添某へ

旧小田原藩農政ニ就テ

一輪拜啓、過日は初而拜調、二宮先師興国安民法御篤信  
之御誠意縷々相伺、不堪感激不憚忌諱愚意申述、甚失敬  
之事共多罪御海容奉仰候、其節御託之為政鑑二冊騰写申  
付置候処、漸出来候ニ付為持差上候条、御落手可被下候、  
是は旧藩興復之根元先師苦心之所存ニ御座候間、御熟覽

可被成下候、扱旧藩三郡貳百貳拾六ヶ村、正徳・享保年  
間田野相開、人口九万有余、租税辻拾七万有余表を出し、  
頗富庶を称候処、自然奢侈遊惰之弊行ハレ、漸々相衰候  
折柄、天明度之饑饉ニ而戸口相減、荒蕪之地多分ニ出  
来、文化中ニ至リ人口三万有余、租税辻五万有余表ニ相  
減衰廢相極リ候段旧藩主深恐懼憤発仕、非常之大儉法相  
立、躬親執耒耜入百姓人別増、荒蕪開墾數十年間心力を  
尽し、荒蕪年々起返リ、租税辻追々相増候ニ付、猶又国  
用經費之度を縮し、米壹万七千表ツ、年々引放し入百姓  
人別増、荒蕪開墾窮民憊育之用度と相定、専勉勵取行候  
処、天保兩度之饑饉ニ而救荒之入費不容易、為之ニ累年  
之積功一時ニ相廢、新戸離散畝田再荒ニ及、其余殃何分  
難補三郡村々貧困相迫リ、怠惰無頼之汚風相極リ、加之  
闔郷之荒蕪凡三万石余、何れ之時興復之成功を可奏哉、  
更ニ目途も不立立痛歎之余リ二宮尊徳江及倚頼候処、同  
人発明仕候與国安民法之儀は、  
天祖天孫豊葦原を開給ひし蹤跡ニ基、荒蕪壹反を起返し

其産粟を繰返候得は、一粒一錢之出財を不求して幾億万  
之荒蕪も起返リ候良法ニ候得共、国家衰廢之根元は付益  
聚斂ニ有之事故、始ニ其終を尽し、興復之後国用節制之  
分度を不立置ハ、再衰廢ニ陥る、猶寒暑往来之如ク盛  
衰循環難免儀ニ付、興復之業ニ従事する必先永世之分度  
を可相立、旧藩租税辻古ヘ拾七万有余表を出し候ハ、則  
聚斂之致す所ニ而其余殃衰廢之極租税辻四五万表ニ減少  
仕候事ハ、孟猷子之所謂与其有聚斂之臣、寧有盜臣と戒  
置候ハ不欺我実ニ可恐之至ニ付、国を興んと欲セハ必先  
既往之租税を取調、致平均天命自然中庸之數を執、永世  
之分度を可相立趣を以、六合ニ基、六十年を為一周度、  
三才ニ基、寛文五乙巳より弘化元甲辰迄百八十年三周度、  
天祿自然之産を現量し、節度を立、古今歴代盛衰安危を  
明にし、天一周度平均租税辻拾七万七拾九表ハ中庸之數  
より三万九百六拾五表を増て為盛時為安、人一周度平均  
租税辻拾壹万八千六拾四表ハ為中庸之數、地一周度平均  
租税辻六万三千七百九拾三表ハ中庸之數より三万九百六

拾五表を減して為衰時為危、夫人ハ地ニ居て天を戴、天地之両性ニ被懷身命を保ツ、元來天地と一物一体也、此故ニ古今三周度平均租稅辻拾万七千三百拾貳表ハ盛衰安危之両弊を省き、過もなく不過もなく天命自然中庸之數ニ付、永久万世經濟之大極を定為規則、然といへとも元天地陰陽あり、又寒暑昼夜あり、因て古今盛衰を中分し、陰陽に則り、寛文五乙巳より宝曆四甲戌迄一周度半九拾年、平均拾三万八千貳百七拾七表、古之盛なるを陽となし、宝曆五乙亥より弘化元甲辰迄一周度半九拾年、平均七万六千三百四拾七表、今之衰たるを陰となし、初節を立、猶又陰陽之岸天保六乙未より弘化元甲辰迄拾ヶ年租稅平均度を再加へ、都合一百年之産を量平し六万六千七百七拾六表を以弘化二乙巳より向甲寅迄、拾ヶ年国用經費之分度と相定、弘化元甲辰租稅辻七万八千三百九表余之内、右平均度六万六千七百六拾六表引殘、米屯万千五百三拾三表ハ全ク度外之財ニ付、是を以興國之方法可及發業義ニ候得共、是ハ前々荒地開墾人別増壽命養育江堤

防堤普請非常困米等、古復料と称屯万七千四百九表余、前々散財取計來候ニ付、此分從前之通取扱、其余産出候分ハ今般改正、窮民撫育荒地開墾難村古復料と相定、以來拾年毎ニ分度改革之法を設、未來一周度六拾年甲辰ニ及て盛時之極數租稅辻拾七万有余表ニ沂候積を以別冊為政鑑組立、弘化二乙巳十二月尊徳方より前々荒地起返し産出候報徳養種金貳百兩繰入、旧藩主積年節儉を守り定用を省き、窮民撫恤之用途ニ致度積立置候手元金百兩差加、其余士民誠意之面々加入米金并日掛(繩カ)索代錢等差加、成田坪田兩村江及發業、孝行力農を賞し、曰窮民并困民を撫し破屋を修葺し、家作ハ勿論馬屋灰小屋を与へ、農馬農料を貸与し、家財農器を給し、防堤を修め、溝洫を通し、荒蕪を墾し、道を造り、橋を架、或ハ無利足金を貸渡、毎戸之借債を償、家道永安之法を授、或ハ索綯日課之法を示し、勸農を導、或ハ孝弟忠信を教、人倫推讓之道を諭、一村拾ヶ困苦を免れ、家道安心之際ニ臨索綯之丹誠を賞して其倍数を給し、毎戸一口粟六表之割を以

儲蓄之俵數倉廩造立之上時遺し、其外勸農賞粟之法を始、凡貧困を免れ永安を得候様、品々及施行候処、旧來遊惰之汚風致一洗、民心大ニ相進、村々誠意を積、歎願申出順序を以追々及発業、式拾有餘年連綿取行荒地荒増起返り、租稅辻式万有餘表相増、二節・三節分度改革合而老万四千三拾式表分内江相増、三郡式百式拾六ヶ村之内百老ヶ村及発業、其内五拾五ヶ村成就、取扱殘四拾六ヶ村專取行中連年之不作ニ而万事不行届、家小屋并防堤溝渠普請ハ勿論荒地起返し等村々仕掛取乱し置候折柄、去ル戊辰

王政御一新、府藩県一途之御政体被 仰出候ニ付、前条積年取行來候興国安民之実業、従前之通取行不苦義ニ可有御座哉奉伺候処、目的を立更ニ可奉伺旨 御沙汰ニ付明細取調雛形組立、従前之通取行方御委任被下置候ハ、一家一村ツ、も仕上取纏、其餘手廻り次第手広取行候様被 仰付候ハ、殘米金を以隣県他藩一家一村たり共願出次第荒蕪起返し難村取直し遣候ハ、旧藩内復古之

成功を奏候義ハ勿論隣り左右ニ推及生民可奉浴 御仁沢旨奉伺候処、従前之通取行其餘隣県他藩迄も可推及旨、蒙 御沙汰難有奉感戴、従前之形を以及施行候処、無程廢藩ニ付新県江引継取行方更ニ奉伺候処、御詮議之筋有之、御聞届難相成於下方 公費を不仰方法取設候義ハ不苦旨 御沙汰之趣冥加至極難有仕合、依之前々數十ヶ村仕掛取乱置候家小屋并防堤溝渠普請等仕掛り之分ハ勿論、非常困艱年賦渡し掛り、其外発端以來誠意之面々加入差出置候米金并仕掛置候村々困民共繩索之実業相励、日々五錢ツ、数年積立差出置候分共、御下渡被下置度奉伺、未 御沙汰無御座候得共、御下渡次第夫々配当、従前之方法相量始而安心可仕、且発端以來無數之開墾田畑肥良之地ハ追々畝下年季明本高入相成、全ク極難廢地、何分熟田相成兼候田畑并不作打統興復用度屈躓無余儀、自力試開発取計置候分共、何れも熟田見込相立兼候難地多之儀ニ付、今般改而畝下拾五ヶ年季を以御委任被下置候ハ、発端ニ立戻り、右冥加米大約五百表を種と仕繰



返し起返し候儀ハ勿論、試開発難地ニ至迄、或ハ水利を設、乾地ハ地下湿地ハ土置瘠地ハ客土等再発尽力仕、鋏下明ニ及御高入差支無之様取斗候ハ、一粒一錢之公費を不仰何方迄も荒蕪起返り可申、且前々無利足米金貸付置候処、右貸付法之義ハ日陽之国土を照し、父母之子を育する至誠ニ則り無利足とし、冬之短日ニ基五ヶ年賦とし、夏之長日ニ基拾ヶ年賦とし、春秋二分之節ニ基七ヶ年賦とし、元金或ハ百兩或ハ千兩或ハ万兩、此年賦を以賑貸法相立置候得は、年賦金全ク利足而已ニ相当り元金棄捐ニ歸し、借者各艱難を免れ活計を得、年々歳々繰返し一周度ニ及ヘハ、幾許家之活計を補、其家道を立、元金不増不減如元立戻り候ハ、日陽周歲国土を照し万物を生々し、恰ク人類を利して日陽不増不損か如し、且借家活計を補家道を立候為冥加報徳金相納候得は、積年ニ及て幾許之金高ニ相嵩候ハ、又日陽之行道ニ依て万物滋殖するか如し、実ニ無利足之大徳、父母之子を育する、其失費を不計其子之長遂を益とするの一誠心ニ則り、方法

組立数十年取行来候義ニ付、右返納掛り之米金、此上繰返し貸付方御委任被下置候ハ、一粒一錢之公費ニ不拘雖形之通、幾許家之艱難を除、些少之元金といへとも自然、御国恩を弁候誠意之者報徳加入金願出、且借者家道を復候為冥加報徳金相納積年ニ及てハ何方迄も推及天民之家道を補、御国本堅固ニ歸し、旧藩主重世積年刻苦仕候微志相貫、尊徳発明仕候開墾賑貸之二法終古ニ存し万世不朽、莫大之御仁恤ニ歸候義と重々冥加至極難有御許容之御沙汰日々企望罷在候処、此度数千里外遠路御来臨、右方法御篤信之御誠意を以積年取行来候仁術中麁仕候而ハ、御一新之際、御仁徳ニも関係仕候条奉為天朝深御遺憾之趣、縷々相伺実ニ不堪感激、先師早世刻慮仕候得共、幕政中終ニ広行を不得、幸ニして御一新之盛時ニ奉遇、良法却而十分之御採用を不蒙義ハ畢竟不肖之弟子共誠心不相立故之義と窃ニ吞声嗟歎仕候、扨前書東陞辺鄙之小藩、天明度之凶荒天民撫育之政不行届、戸口減少田畝荒蕪ニ歸し、衰廢相極候段旧藩主千悔仕、

彈丸黒子之小藩袁極之余を以唯只儉勤之二を守り、重世積年之勞を以て数十万之米金を抛、興国安民之実効殆相頭れ、二宮尊徳幾許之苦心を以、別冊為政鑑三郡永安之方法組立、余徳何方迄も可推及良法殆三十年連綿取行式百式拾六ヶ村之内百ヶヶ村已ニ其仁術ニ浴し、残百式拾五ヶ村一同拾数年間日掛繩索相励日々五錢ツ、積立、誠意を表し、発業を企望罷在候折柄、中廢ニ及候ハ、一同之脱力如何可有之哉、漸勤儉ニ赴候民心忽然怠奢之弊を可生ハ必然之義、発端尊徳申置候義ハ一度興国之仁術及廢業候得は、三郡之民心致感動不知々々勤農ニ赴候ハ、譬ハ一束薪江一本余計ニ打込候ヘハ、一束薪中蔵を加ふるか如ク、随て租税辻之相増候ハ、譬ハ八十八夜ニ及ヘハ苞米升目を増か如し、今試ニ米を茶碗ニ盛り、戸棚は隅ニ置而見るヘし、八十八夜ニ及ヘハ米粒茶碗より溢れ落るもの也、何となれハ米粒再ヒ生する不能といヘとも、天地發生之氣ニ感し、粒々生せんとする之念満るか故也、則苞米之升目を増す所以也、国民之仁沢ニ浴せん事を欲

し、勤農之効租税辻を増も亦然り、故ニ発端国用之分度を不立して租税増すニ随ひ、上之用度ニ入れ下民ニ不降時ハ民終ニ其仁沢ニ逢ふ不能事を知り、脱力を生し候得は、租税辻忽然として前数よりも減少す、譬ハ米粒八十八夜ニ生せんと欲して生する能ハす、暑中ニ及ヒ弥生する能ハさるに至れハ、忽然升目を減するか如しと戒置候義ニ付、為政鑑ニ組立置候通増す所之租税悉ク式拾有余年、興復用度ニ散候故租税辻毎年ニ相増拾万有余表ニ及候得共、今爰ニ中廢仕候ハ、三郡之民脱力を生し、且儉勤変して怠奢之風ニ立戻り、自然田畝蟲作ニ相成取穀相減し、随而租税辻年々減少、年経るに及んてハ戸口消耗、元之廢衰ニ帰し可申、元一粒一錢之出財を不求、全ク荒蕪変して産出候分度外之米粟を繰返し、藩政定規之外ニ相立置候、興国安民之良法ニ付  
朝政御定則之外ニ御立置被下置候ハ、別冊為政鑑組立之通三郡之天民永安を得候而已ならず、余徳四隣ニ可推及、抑方今三節目之平均度八万八百八表ハ発端、弘化甲

辰之租税辻七万八千三百九表江差引候得は、式千五百表眼前ニ相増居、況して度外之式万有余表ハ全ク仁術之法ニ依リ、荒蕪變して産出候表数、旧藩僅々之租税辻拾万有余表江对候而ハ、拾分之二ニ相当候得共、

天朝三千万石之御高江对候而ハ三十分之二ニ相当リ、乍恐九牛之一毛とも可申坎、況して御高外ニ准候表数ニ付出格之以、御詮議、尊徳組立置候雛形を以従前之通取行方、御採用被下置候ハ、三郡之人民治ク、御仁沢ニ浴候而已ならず、往々何方迄も推及、乍恐

延喜帝雪夜之御憐恤四海之民奉感動候同様、御一新之際庶生之困乏深、御仁恤之

叡旨速ニ感通仕、旧藩二村江仁術及発業三郡之民勤儉ニ赴候如ク、七道之民、御仁徳ニ奉感泣、怠奢之風化して勤儉ニ赴候ハ影響必然之儀と慨歎無限奉存候、且野・常・奥羽辺鄙之下国撫育之仁政不立候而ハ永続を難得旨、先師之常教少々認置候草稿入御一覽申候、前書願未去春以来叔父高慶詳細建言疾ニ御承知とハ奉存候得共、我道

興廢之際ニ臨御厚誼之御誠意感激難止、不遑憚忌諱至愚之婆心繰返し申述候条、失敬多罪御海容奉仰候、不宣、

明治癸酉二月廿五日 齊藤懋九拜

川添君玉几下

猶以近々御発途御上京之由、未タ春寒も去兼候条、

山水長詠御保愛專要奉祈候、以上、

冊子原寸 縦二四・六種、横一七・二種 九枚

一五五 寺師宗道ヨリ久光公へノ建言

公ノ東上延期ヲ乞フ

〔表紙〕

寺師宗道

今般西郷・高崎等之面々罷下り、頻リニ御登京を奉促候

處、竟ニ御決定被為在候哉ニ風評伝聞仕候、右は深キ尊慮茂被為在候御儀、且ツ彼輩何等之詛ヲ以テ奉促候哉、其旨可窺知様無御座候得共、已ニ去夏

御巡幸之御時御至当之(史蹟、御之)□ヶ条御建白被為在候哉奉窺候處、

其后追々日誌等ニ茂為相戴有之、豈測らぬ之ヲ迂腐之陋見と僻嘲し、恰く天下ニ布告相成程之時機ニ而、実ニ心

外恐歎之至、於茲天下有志之者真ニ憂懼罷在候儀ニテ、先ツ差向キ君公の御建白さへ如此之次第、況哉草莽野賤

の者ニ(史蹟)哉、此後いかなる卓論憂國の忠良茂惟水泡の

徒ニ屬し申候儀は申迄も無之、殆と天下の言路閉塞する

事ハ此一事を以テも明白なる訳ニ而、誰しも大息仕候儀

と奉存候、即今文明開化の御政体ニは何分違戻仕候様ニ

而、衆人茂此ニ甚タ不解の次第、畢竟開化の口実を以

テ万民を愚弄するニ相当り可申哉、疑惑之情茂不少訳ニ

而縱令今日如何成真実之口状も先ツ人心の变化難測、殊

ニ当時風薄之習俗ニおゐては、尙爰ニ頗る英名廉潔世ニ

聞る人物ニ而茂万々一世勢ニ因循之論を變し、節を易へ

忠貞義胆の大決断不出来、反復表裏の事ニも立至り申候

日ニは、実ニ欺策を以テ事を權られ候場合ニ御当り甚國

有志の真面目よりしては窃ニ残概此事ニ御座候半、右ニ

付既ニ世説ニ茂 公をして此節是非御登京の事を専ら当

県より出官の中、要路五六輩の者共、此事与論せし事と

云々、又一説ニは 公を爰にて引出し奉り、御出邸の上

は再ひ御帰國の事も不被為叶御壅塞ハ勿論、特ニ旧藩の

人心をして離間せしむるの一略策なりと云々、西郷此節

分而其密旨ヲ以て只管怠謝を表し、御意旨ニ準就して奉

誘引候奸策ニ出ル抔と種々之甚説も有之候、俗間の陋説

固より信用ニ不足と雖も、尚一体の情態有名無実の事の

ミ多く、古語ニ茂所謂大姦如大忠、大詐如大信にて倭漢

古今忠臣義士の履歴世ニ沈黙せらる事も、乃ち彼の戒語

ニ適中する事実も不少、然は若し果して事此ニ違ふニお

ひてハ、天下の為メ無此上不明の御都合と、乍恐世人も

茲ニ深ク苦心仕候儀ニ御座候ハ、其上物議沸騰、恐らく

は不容易事變ニも立至り可申哉も難計由て、只人心の氣

合如斯奉景慕候真情難忍、不憚忘偉頭前の事見を以て敢

テ不得黙止、就而は何卒祈る所、今般依然として責テ当

年中も御猶予の上、篤と御病氣御保養茂被為在候様奉祈

候、然ル上は尚天下万全の御目的も相立、愈々世勢の可否も分明いたし、其中万一挽回一定の御紀綱も相立候ニ而、多くは申迄も無之感戴安定仕候訳ニ御座候得共、恐らく即今の処中々洋僻無根の改革、実ニ甚しきニ過ぎ殆と一変地を易ふるの勢ひ顯然、世説の通り御座候半、其上頃日将又世評ニ此内欧羅巴江渡海の要路諸官員方一同帰朝の上は、彼国の盛大美況を羨慕して今一層大変革あらんと云々、是亦巷陋の談とハ乍申、実ニ可心得事と奉存候、彼是穉る罔極ニ臨ミ洵も卓見確論不可立は固よりにして、則惟孔明出師の表も徒らニ再度の忠諫至誠茂空しく画餅ニ属し、乍恐乃ち 公の御忠恕茂出師の表ニ相裳り不被行は其時運ニして不及是非、倭漢古今興廢の所係如此もの坎、単ニ此上人心の懇禱する処、惟是 公の皇国ニ柱石ニ頼みあるまてにして、天下の有志奉謁仰候事は勿論と奉存候間、此際御登京御猶予、尚此上も御時機を以テ、天下の御為メ確然たる御見留被為立候様奉禱候外無御座候、此等之事も忌憚ニ触れ却テ尊慮ニ奉悖戻

候儀と深く奉恐入候得共、私式愚陋の鄙情よりして不取敢不束の見を建述仕候、依而直ニ 尊聴ニ上達せん事(金指)□以テ不敬之怖も有之、仍而御役御中迄如此御座候間、御事故無御座候ハ、御都合ヲ以テ何卒愚書之趣宜敷様奉入御内、聴度儀偏ニ奉拜願候、恐惶頓首、

西二月 士族 寺師宗道  
御役方 御中

冊子原寸 縦二五・八種 横一八種 六枚

一七六 福永藤左衛門(祐之)ヨリ久光公へノ上書

公上京ノ上ハ兵威ヲ以テ奸邪排除ノ件 二通

一九七六ノ一

敬白

御巡幸之御時御建白被遊候亨則日拜見仕不奉堪感激候処、御採用之御都合候哉、依被為 召、今般被遊御上京候由奉承知千万難有奉踊躍候、私事廢官後十年

谷山江隱居仕、世事全ク相分り不申、奉上条々前後齟齬可仕は勿論と奉存候得共、老髦之僻として存慮難取抑、乍恐猷言仕候、

御笑覽被遊被下度奉願上候、所謂釈迦ニ真經之譬と奉存、尤突なる趣向も無御座、只通例之論なから以別冊申上候、当時東京之風態追々伝承仕候ニ上下尊卑共洋風ニ遷り、朝廷役々己れ夷ニ変する而已ならず、刃土遠境之人民迄も嗟々いたし、就中地下町人大に時を得、花靡開化驕奢跋扈、役々猶以朮を張り、何事も皆洋国を模写し、我朝之正体地を掃而相残不申、其勢ひ容易ニ動し難き形勢、兎角天下を掃除し清浄の地に挽回之儀は一旦籠盤ニ落、一度濺血ニ及不申候而ハ其期有之間敷と、近比罷下候者之咄ニ御座候、加之御建議一ヶ条も御採用之形ち相願し不申、姦賊精を出シ、弥前路閉塞仕候姿ニ相見得、不容易御時節欵と奉存候、然ニ唯人心程變動し易きハ無御座、

御建議相立候日に相成候得は、乍チ烈風浮雲を相払可申、尤有志之者共集来奔走可仕は一定と奉存、乍恐御根氣を被為養 御尽力被遊度奉願上候、いつれ之筋御成功無別条と只管奉仰慕候、併余リ念之過ニ奉存候得共、成と不成は天に有りと承候、且ハ時勢有り事ニ緩急先後有り、万一も至尊之御聡明奸兇を遠さけ給ふ事能はず、

御建議不立時は却而

上様之御患なら東京は龜邦也、幾を見て立と申事も御座候、とふそ前広御内々御乗船之御手当被仰付置、剛直ニ御届被仰上、実は前夜御発駕神速ニ

御下向被遊被下度、偏ニ奉願上候、左候而安ニ居而危を謀り、いつれ国賊を御除無之候而は事成就仕間敷と奉存候、老髦之願第一此所ニ御座候、私ニも乍不及御供奉願御奉公申上度、心は矢武ニ奉存候得共、極老憔悴平日之事さへ用立不申残念ニ奉存候ニ付、不殘愚意猷

言仕候、小臣祐之不奉堪涕泣戰慄、恐惶頓首、拜上、

明治六年癸酉二月日

福永藤左衛門祐之

文書原寸 縦二七種 横九四・五種

一九七八ノ二

奉副啓

別封已に捧奉候之時ニ至、於東京は四民合一之御内評

有之哉ニ風評仕、若々此

勅命下之時は日本之正脈已に尽ル之日可有御座、此末

皇統も如何可被為在哉と甚以奉恐縮候、就而ハ

上様 御上京之御都合乍不及熟考仕候に、表は市ヶ谷

御屋敷御拝領之御模様旁一体御厚意之御風態、裏は御

建議無御採用而已欵、何事も乖戾之御政体内外表裏不

相合、甚以難心得次第ニ而、朝廷之御内情一物有か如

くに相窺申候逆茂、左程之事は有御座間敷存上候得は、

卒爾に

御上京可被遊御事欵と実ニ奉疑惑候、余計之念之通ニ

は市ヶ谷御屋鋪江奉抑留禁錮、猶更奸賊共擅ニ志を取  
計可申哉も難計と有間敷事迄奉懸念候、乍恐

忠義公之御都合も眼前欵と奉存上候、此等之姦計は色  
ニ出シ不申筈ニ而難探得儀ニ御座候、然共止に止まれ  
ぬ御時節ニ御座候、篤

御工夫被遊被下度奉願上候、

一御上京之上、

主上御信任厚被為 在、奸賊不能奉妨候は御成功不日順

道ニ相運ひ、御国体之御幸福無此上奉存候、併

至尊之御上三条公等之御英断は奉恐察候得共、奸邪意を  
(実考)

恣にするの御時節ニ御座候得は、右通甘ク相運ひ可申

哉、更に洞察難仕御座候、いつれ正義を被為張候、

御上京候得は御供廻多勢不被召列哉と奉察候得共、御

供ニ而不御供前広より相庇之人数不目立様ニ人々私用

之体ニ而罷登居乍与所奉警衛、追々市ヶ谷御屋敷江参

集候様御内諭被仰下候は如何可被為在哉、いつれ難奉

勤御威勢無之候而は、大事相運兼候半と奉存上候、此

一条は現事相考候得は至大之御難事、御骨折之御事  
と奉存候、乍恐、御目的は此所ニ被為、在候半と奉存  
上候、

一御供廻初より大勢被召列、御威力を被為張

御上京候は奸賊共恐怖いたし、自然と無子細相鎮り可  
申候得共、朝廷江被為対如何之御都合可被為在哉、其  
外奸賊共万一も曲議相企、以

勅命奉拒は押破は易事ニ可有御座候得共大變御座候、  
一刺客を以奸邪を除候は、御成功も御国体も掌ニ運か如、  
至而無口能御座候半、然共堂々たる君子之御所為ニ無  
御座於臣下は

君を正路ニ奉誘事社本意ニ而

御不興を戴之儀無相違奉恐懼候、乍然事ハ誠を第一と  
仕候謀計策略未施之時ニ至り不申欵、此等ハ敵之思設  
さる所に出かた有り、大功は細憚を有すと様々工夫仕  
候得共、愚魯決断難仕心底之低、有文ケ奉申上候、宜  
御深慮被遊被下度奉願上候、万一茂

御左袒被遊候は、大山参事極密ニ被召呼、彼力存慮被  
聞召上度、謀は密なるを貴ふ、兵は神速を尊ふニ而御  
座候、いつれ、御成功無相違ハ此計策欵と奉存候、

二月日

以上、

小臣

福永藤左衛門敬白

文書原寸 縦二七種 横九二・五種

一七五 伊作実吉禎造ヨリ久光公ノ上京ニ随從願

謹而奉懇願候、私事固陋狭浅之身を以、実ニ奉恐入候得  
共、

御当家七百年代之御鴻恩を奉

蒙、臣子之情義難被忘何時奉報

御恩度奉存居候得共、不奉得機会日夜仰慕罷在候、然処  
此節依時機は

御上京被為

遊候哉ニ伝承仕候、若

御上京被為



在候ハ、近比恐縮至極奉存候得共、御供被 仰付被下度  
類ニ奉歎願候、就而は逐一  
御趣意を奉戴し只管御奉公仕度素志ニ御座候間、伏而奉  
懇願候、誠惶誠恐頓首謹言、

西二月

伊作  
実吉禎造

文書原寸 縦一四・五釐 横六八・五釐

一五六 向井朋厚ヨリ久光公ヘノ上書

二通

公ノ上京ヲ悦ヒテ国基挽回ヲ乞フ

一九七八ノ一

(表紙)  
一上

向井朋厚「

草莽之微臣井蛙之見込を以

奉汚

尊覽も万死之至ニは御座候得共、杞人之愚情不願恐懼敵  
言仕候、且去ル午年開拓使江献白仕候趣意尤暗愚之策ニ

は御座候得共、其節是非之御沙汰も無御座候間、万一も  
御採用被成下簾も御座候へは、今生之面目と相考重疊多  
罪之至ニ奉存候得共相添献芹仕候、

戊辰之役微臣儀、困病ニ嬰リ数月病床に臥し候故ヲ以、  
于今癯人と罷成実ニ千歳之遺恨ニ御座候、仍而当今を以  
戊辰之役ニ相易へ、赤心奉事仕度情願ニ御座候、扨当  
御政体儀愚察仕候ニ実ニ不容易御時節ニ而、此度大道不  
立は後來外国人之奴隸とも可被成哉と日夜苦心仕候、  
皇国万代不易

帝王確乎として不可拔は

神州之国体ニ而、人々所知外ニ可論之儀無之事ニ御座候  
へ共、当今西洋文明開化之説を類ニ遵奉する人氣ニ罷成、  
彼謂ふ処、至公平之道を称し候へ共、今魯人の如く天ニ  
二日なく地ニ二王無きの説を唱る時は、其至公平説も虚  
言にて万世ニ確立するの道如何にして可相立哉、現ニ各  
国万国公法之道を相立候へ共、其説は弱国之循従する道  
ニ而、強国之者は兵威を以人ニ逼り、公法之不行事而已

甚多し、可注意事と奉存候、然は名有て実なく、且君政  
民治と二事ニ分ち、又君主擅制・君主專治・上下同治と  
三種之説を立、其内上下同治之説を主長す、理ニ於て不  
公平之道とも可称、左候へは兵を以人命を絶ち、土地を  
広め利を計る之事ハ決而無之筈ニ御座候得共、動すれハ  
兵を交へ国を広め利を得るの為に人命を絶つ至公平之道  
不相立、至公平之道不行、実ニ虚言之至極ニ御座候、我  
国開国以來神武を以綱紀を建、不易之

神孫を以天と定め、国初より確乎として不可拔之大綱  
行れ来る大道を廢し、上下同治之政を慕ひ、文明開化の  
説ニ欺れ、国体を乱す人氣ニ罷成、爾後如何成世態と  
可相成哉、人心之方向実ニ無心元奉存候、其因て来る処  
外国諸夷も旧日之夷ニ非ず、知巧月ニ開け、文明日ニ化  
し、富国強兵之道を勉強し、戦は必ず勝ち施セハ必ず利  
ある事而已を知て其弊害有を不知、彼の長する処を目視  
し、其他を不顧、只管文明開化之説ニ陥り、浸々然とし  
て落胆し、国体を汚に至る可慨歎<sup>歎</sup>之至極と奉存候、将

又大坂江遊学ニ罷出居候松田壮二郎と申者、先日罷下り  
伝聞仕候ニ米国之僧ウイリヤムス・モリスと申者兩人大  
坂江滞在、日本語を以頻ニ耶蘇之新約説を致説法候由、  
尤東京は尚又盛ニ致説法候由ニ御座候、耶蘇之為教空海  
輩之教も、愚夫愚婦を諭すの道は大ニ致念得、仏教之害  
より甚敷御座候半、前車の覆轍を知て唯今之戒を不知、  
馬子之大罪を知て耶蘇之大害を不知は如何之御事ニ御座  
候哉、且又當時大坂市中税納之苛剋なる毎戸坪間口家根  
三税相掛り髮結輩毎月金三百疋、按摩輩同断式百疋ツ、  
の税金ニ而、近日ニ至り富家之者も小家ニ引移り候者も  
多く、却而旧幕を相慕ひ候哉ニ御座候、就而は  
皇国之大弊を 御一新被成申は此節と奉恐察候、誠ニ当  
時天下之志士  
御尽力被成下候様、実ニ奉希望候事如飢渴、且又大坂之  
人民近日ニ至り頻ニ  
御上京を日々ニ奉祈願候由ニ御座候間、  
御賢察被成下候様奉懇願候、扱国体は万古不可変と奉存

候得は、政事之細目は時ニ仍而不能無変、今外国人の知

巧も日ニ開け、天文測量窮理海陸之兵制其他諸機械等有

用之品不少、仍而右等之事件は用捨斟酌を以我

神州之道を補翼し、尚又不易之大道を確定し世界万国ニ

冠となり、

天孫を仰ぐ事日月の如くニ到しむるハ

大神之

神勅にして、今日之尤急務と奉存候故ニ天下万民人欲物

我之私心を捨て、人命を抛ち同心共力孳々として斃て止

むの時機と奉存候、且又幼年之者は学校ニ入り勉強勤苦

し、致知窮理之極ニ至り、人倫を修め平治之功を立る之

外、急務不可有之奉存候、仍而周制之如く学校を設け、

純粹之学則を建、純一ニ遵奉セしめ、至苦之他ニ到しむ

る事は亦今日之急用と愚考仕候、施行之宜を得候ハ、

十年を不期万国ニ対応し、三十年を不期万国ニ冠たるの

域ニ至る之管見ニ御座候、誠恐々々万死謹言、

向井朋厚

奉呈偶言一首次

韻

堂々天下慕西洋 左任夷冠神武亡

幸有如今賢主在 母傷報国赤心腸

明治六年癸酉二月立春日

冊子原寸 縦二五種 横一七種 八枚

一九七八ノ二

(表紙) 上」

毎度不顧多罪愚陋之見込献言仕候、

此般

御上京之 御内定相成候段伝承仕、実ニ千歳再難得之

大幸、

皇国之命脈も不絶之時機ニ罷成、

朝廷之 御大幸は勿論、天下之志士万民ニ至る迄も安

生之節ニ罷成、誠ヲ以難尽筆紙難有奉存候、就而は数

十年來之

御誠心、天下ニ貫徹仕、万民腹<sup>(被)</sup>之域ニ至るは確定之事ニ御座候得共、当 御世態を 御挽回被遊 御事ニ御座候得は 御配慮之儀も可被為 在哉と奉恐察候、仍而 御心志之 御願文

大神宮江 御奉納被遊候ハ、

神明も尚又 御照覽有之、天幸も不少儀と乍恐奉存候、万一 御採用被成下簾も御座候ハ、右之御使ニ從循被仰付被下度奉懇願候、恐多奉存候得共、微賤之小臣 愚意之誠心も相尺度心願ニ御座候、

一慶喜公御事は近年來大罪之次第も被為在候得共、此御方は非常之御人体軟と奉存候、仍而 御趣意御遵奉被為在候ハ、一方之羽翼とも可被為成御方とも乍恐奉存候、

一一昨日、洋学諸生参り耶蘇之教、当時御廢禁之事候へ共、漢学初而相渡り候節も同断ニ而、尤当分洋航之諸生は過半耶蘇教ニ入候由、耶蘇ニ入ざれハ教師懇篤ニ

不教との趣承り、誠ニ長大息此事ニ御座候、当時之洋学者ハ全体、漢学全く無之、初より洋学修行仕候へは、外ニ天地自然之道を不存故、右次第方向を失ひ、如此心入ヲ以、今日之学問と心得、異日天下を治るの考ニ而は愕然之至極ニ御座候、乍恐惟今朝臣之御方ニも右様なる御心得之御方も可有御座と奉存候、其故共和政治之基を醸出候様なる 御布告、毎々承知仕事ニ御座候、仍而後來は四書六經致会得候而心裡之權衡相備り候上、洋学修行仕候様有御座度奉存候、

一此節本学校江別紙献言仕候得共採用不相成、実ニ無用之事件ニ而如何ニも奉恐入候得共、

御閑隙之節 御一覽被成下候ハ、誠ニ難有次第奉存候、重畳不願恐懼献芹仕候、誠恐頓首謹言、

向井朋厚

冊子原寸 縦三櫃 横三〇櫃 四枚

一五九 浜島新次郎ヨリ久光公ノ上京ニ随從歎願書

謹而奉懇願候、私事固陋狭浅之身を以実ニ奉恐入候得共、

御当家七百年代之御鴻恩を奉

蒙、臣子之情義難被忘何時奉報

御恩度奉存居候得共、不奉得機会日夜仰慕罷在候、然処

此節依時機は

御上京被為

遊候哉ニ伝承仕候、若

御上京被為

在候ハ、近比恐縮至極奉存候得共、御供被 仰付被下

度頻ニ奉歎願候、就而は逐一

御趣意を奉戴し只管御奉公仕度素志ニ御座候間、伏而奉

懇願候、誠惶誠恐頓首謹言、

酉二月

浜崎新次郎

文書原寸 縦一四・五種 横六八・八種

一六〇 浅井実雄(南山)感慨詩歌

二詩一歌

身瘦春寒仮柳楊

圈延病客恨茲々

幽囚懷起文帝苦

花和夜烟影在香

明治六  
酉二月

西都二条城中

王獄作

向浩洋算路悠々

山影動揺意快哉

手採画図問倫鈍

撼山浪至自歐洲

右同年同月無罪ヲ付、獄ヲ出魚舟ニ而遠洋渡作、

乞添削、伊井南山人

寄大臣閣下

実雄

呼子鳥 君のこころを よひかへし

日繼の道を 玉体にうつせよ

文書原寸 縦一五・五種 横一一九種